臨床心理学研究

東京国際大学大学院臨床心理学研究科

第16号

論文	
「箱庭生成の自律性」に関する探索的研究	1
日本人男性同性愛者における性的指向性の 受容過程に関する一研究 津野 千文	13
小学生におけるソーシャルサポートの 受容・提供が QOL に及ぼす影響 齋藤 美菜	49
MBT は精神分析的な実践であると言えるのか? 東 啓悟	65
報告	
東京国際大学大学院臨床心理センター活動報告(2016 年度)	79

2 0 1 8

臨床心理学研究

東京国際大学大学院臨床心理学研究科

第 1 6 号

「箱庭生成の自律性」に関する探索的研究

池 H 有 加 里

次 目

- I. 要約
- Ⅱ. 背景
- Ⅲ. 箱庭に関する研究
- 1. 箱庭研究の流れ
- 2. 箱庭体験に関する先行研究
- Ⅳ. 問題と目的
- V. 方法
- Ⅵ. 結果
- Ⅲ. 総合考察
- 1. コアイメージの持ち方
- 2. イメージの広がり方
- 3.「箱庭生成の自律性」について
- 4. 違和感をおさめる方法
- Ⅷ. 今後の課題

I. 要 約

箱庭を制作する際には、 意識的に作ろうとし たものではないものを作りあげてしまうことが しばしばある。自分ではわからないがこのミニ チュアを置きたい、この場所でないとしっくり こないという感覚は、制作者の中に浮かんでく るイメージとミニチュアや箱庭場面をすり合わ せることが関係していると考えられる。本研究 ではこのようなイメージとミニチュアや箱庭場 面をすり合わせて箱庭を制作していくというこ とを「箱庭生成の自律性」と呼び、「箱庭生成 の自律性」に焦点をあて、箱庭制作が制作者の

中でどのように体験されているのかを検討して いった。その結果、制作者の体験しているコア イメージの展開の仕方. 及び個々のイメージの 広がり方をみることができた。そして、イメー ジとミニチュアや箱庭場面をすり合わせること の重要性や違和感を感じながらも、 それを箱庭 内にどうおさめるのかが明らかになった。

キーワード: 箱庭体験過程. 箱庭生成の自律性. 質的研究。イメージとのすり合わ せ、イメージの広がり、箱庭にお ける違和感

Ⅱ. 背 봄

箱庭療法はLowenfeld, M.が考案したThe World Technique を Kalff, D. M. が分析心理学の 考えを取り入れ、Sandplay Therapy (箱庭療法) として発展させた技法である(河合. 1969)。 砂の入った箱 (57×72×7 cm) にミニチュア などを自由に選択し、何らかの表現をしてもら う療法で、日本においては1965年に河合隼雄 によって導入されて以来、多くの臨床場面で使 用されてきた。一度だけの制作もあるが、多く は数回にわたり制作することが多い。また. 面 接の中で毎回の箱庭を制作するのではなく、他 技法を取り入れることや、話し合いのみの回が あるなど、箱庭療法のみで面接が構成されるこ とはほとんどない。教示はクライエントに対し 「この砂と玩具を使って、何でもいいから、 作ってみてください」(河合, 1969)と教示する。 教示の仕方は面接者によって多少変わることも

^{*} 臨床心理学研究科 博士課程 (後期)

ある。子どもの治療法として出発した箱庭療法 だが、その適応範囲は現在では子どもだけでは なく大人にも広がっている。

Ⅲ. 箱庭に関する研究

1. 箱庭研究の流れ

箱庭が研究の対象となった当初は基本的資料収集のため、数量的研究が多くなされてきた。木村(1985)は、箱庭表現の特徴(制作時間、玩具数、砂を使用するかなど)と、既存する人格検査(Y-G性格検査やロールシャッハ)や年齢の違いなどとの関連を調べた。岡田(1984)は、性差や年齢差の箱庭表現の違いを明らかにした。このことにより、性差や年齢ごとに箱庭表現がどのように表現されるのかという指標になり得た。また、岡田(1969)は、SD法を用いて精神障害者(統合失調症、うつ病など)の群と、そうでない群に分け作品の印象の違いについて明らかにしたことにより、箱庭における診断的側面の特徴を強調した。

しかし、その一方で岡田(1984)は、これらの基礎的研究と治療の間に大きなギャップがあり、「治療を中心に考え、かつ制作者の心の動きを大切に考えると、その過程中に実証的な、第三者的な刺激を加味することには、制作を歪曲する恐れ」があると指摘し、次第に箱庭研究の主眼は事例研究へと移っていった。

その後、斎藤(1992)の「idiographic な研究と nomothetic な研究は、車輪の両輪のようなものであり、治療を重視する同法においても、何らかの客観的な枠組みを提供するような nomothetic な研究は必要」という主張や、箱庭の基礎的データが不十分という主張(宮川、2005)もあり、再び量的研究も取り組まれるようになった。

そして、平松(2001)によって、箱庭表現において制作者にはどのような体験が生じているのかを明らかにすることが、箱庭研究の今後の課題としてあげられ、石原(2002)も制作者の主観的体験が今後の研究において積極的に取り

上げられるべきだと述べている。これら以外にも同様の多くの指摘によって,近年では箱庭における制作時の主観的な体験についての研究は多くなされてきた。

2. 箱庭体験に関する先行研究

岡田(1993)は、箱庭制作をグループで試行し、どのように制作していくかを調査した。各個人間の影響もあり、すでに置いてあるミニチュアにも影響を受けるということを示唆した。個人で制作した時にも複数人で一つの箱庭を制作した時にもすでに置いてあるミニチュアや箱庭場面からの影響は大きいものと思われる。

ミニチュアを置くことに関して、片畑(2007)は、アイテムをボール1つと単純化して、イメージの中で置く場合と実際に置く場合を比較しようとした。その結果、イメージの状況下では触覚が制作者の感覚の中から抜け落ちやすいことや、イメージの中で置くことと実際に置くことでは置いた時の「ぴったり感」が違うことを明らかにした。石原(2003)は、ミニチュアを一つ選択し、置いてもらうという行動を数量化し整理した結果、「ミニチュアが『いかに置かれたか』という視点が、箱庭制作の理解にとって重要である」と述べている。ミニチュアを置く時には制作者がどのように体験し、置いたかが重要となる。

砂の作用について大石(2010a)は、砂は作り手の心を動かし独自の内的表現を生じさせることにつながる一方で、砂は不安定という要素もあり、安定しないという感覚につながるかもしれないと述べている。

一方,箱庭の治療的要因に関しての研究もある。清水(2004)は,箱庭制作において立会人がどのような意義を持っているのかについて,「制作者と立会人の相互作用の結果として箱庭表現が両者の間に生まれる」ことを示唆した。大石(2010b)は,KJ法を用いて箱庭制作の場のもつ特徴や意味について検討し,セラピストに守られた空間と箱庭の枠によって守られた空間について,「危険性は十分に自覚しながらも,

そうした状況がクライエントとセラピストの間 で、2つの場をめぐってどのような形で抱えら れていくかということに注目していくことが重 要 | だと示唆している。千葉(2015) は、箱庭 制作後における箱庭と制作者との関係につい て、箱庭のイメージを制作者が内在化し、内在 化した箱庭を通して制作者の意識された内的な テーマと向き合うと述べている。片畑 (2006) では、箱庭制作を触覚の観点から検討してお り、箱庭制作において、「一致・適合感」を得 る過程には、触覚の影響があると主張してい る。伊藤(2005)は、箱庭制作過程をイメージ と意識の関係性という観点から検討し.「箱庭 制作過程では、イメージと意識の関係性の位相 が様々に推移し、その中で箱庭作品が展開す る | と指摘している。後藤(2004) は、箱庭体 験過程に焦点をあてPAC分析により「ぴった り感」の要因を明らかにした。制作者が箱庭に 主体をゆだねる形で作品を生成していき、感覚 に従って「さぐる」という作業をすることで 「ぴったり感」と出会うことができるという。 箱庭制作においては箱庭 – 制作者 – 見守り手の 三つの関係が影響しており、制作後もその影響 は続いていくと考えられる。

複数回の箱庭制作をした研究もあり、近田・ 清水(2006)は、大学生を対象として週1回、 計10回の箱庭制作をし、箱庭制作過程を一連 の流れとして分析した。この研究では表現をす ることによって気づきを深め、箱庭表現過程で 自我のあり方に変化が生じ、表現の展開に伴い 停滞や抵抗が生じることもあると示唆している。

平松(2001)は、「箱庭療法面接のための体 験過程スケール」を作成しプロセス研究への応 用の可能性を主張し、12回の面接で体験過程 スケールを応用した。その結果、制作者による 箱庭作品の説明や面接者との応答の中で調査協 力者の体験の深まりが現れたと述べている。

楠本(2011)は、制作の様子をビデオ撮影し、 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ に基づいて. 制作者の制作中の過程と自発的な 説明過程を分析した。その中で、制作者が箱庭 内に置いたアイテムとともに置けなかったアイ テムも、内的に保持することで箱庭療法におい てのおさめることが可能となると述べている。

Ⅳ. 問題と目的

箱庭を制作する際には意識的に作ろうとした ものではないものを作りあげてしまうことがし ばしばある。たとえば、木村(1985)は、前もっ て考えてきたイメージがあるにもかかわらず. ミニチュアを目にしたら使わねばという気持ち になった女子大生の例をあげている。また. 河 合(2002) は、「箱庭を作っていると、最初は 自分が考え、意図したように作っていくのであ るけれども、そのうちに自分の意図や意志を超 えて、どうしても何かを置かざるを得なくなっ たり、あるいは作ろうと思っていたことができ なくなったりということが生じてくる」という。 箱庭には異質だと感じるようなミニチュアが置 かれることもあり、箱庭内に置かれた異質なも のは箱庭療法の過程では重要な役割を持つこと がある。この異質なものは制作者が意図して置 いたものではないことが多い。これらの自分で はわからないがこのミニチュアを置きたい、こ の場所でないとしっくりこないという感覚は. 制作者の中に浮かんでくるイメージとミニチュ アや箱庭場面をすり合わせることが関係してい ると考えられる。箱庭制作の中で制作者はどの ようにしてイメージとすり合わせ、 ミニチュア を選び、体験をしていくのだろうか。本研究で はこのようなイメージとミニチュアや箱庭場面 をすり合わせて箱庭を制作していくということ を「箱庭生成の自律性」と呼ぶ。

前述したように、箱庭が研究の対象となった 当初は基本的資料収集のため、数量的研究が多 くなされてきた。現在では箱庭の研究は事例研 究を中心になされ、多くの知見が積み重ねられ てきた。しかし、岡田(1993)が箱庭療法の本 質は「制作中の制作者の心の動き」であると述 べ、近年では箱庭を制作する過程について研究 が増えてきている。これらの研究は探索的なも

のであり箱庭制作体験を概観する研究であるが、箱庭制作者の体験を理解するには、数がまだ少ないと言える。

本研究では「箱庭生成の自律性」に焦点をあて,箱庭制作が制作者の中でどのように体験されているのかを検討していく。

Ⅴ. 方 法

箱庭を制作し、ある程度言語化ができる7名 (20代男性4名,20代女性3名)を対象とした。 箱庭を制作後、半構造化面接を行った。なお、 箱庭制作には筆者が同席した。

半構造化面接では録音をし、音声データを逐語化する。データの分析方法は仮説生成のため、木下(2003)の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下M-GTA)を用いる。M-GTAはデータを切片化せず、コーディングと深い解釈を同時に行うことによって、データに密着しつつも恣意的でない概念生成をすることができる分析技法である。

概念生成については、池田のローデータを田中が独自にワークシート化し、生成したものを参考にして、分析を進めていった。¹⁾

Ⅵ. 結 果

分析の結果、10の概念が生成された。

結果図から作成したストーリラインを述べる。以下、[]は制作者の語り、【 】は定義、 < >は概念名である。

箱庭制作を始める時には何を作ろうかというイメージが湧いてくる人とそうでない人がいる。すぐに【箱庭の中心となるイメージが湧いてくる】人はそのイメージに沿っていく。すぐに湧いてこない人はミニチュアの並べられた棚を見ているうちに〔最初は本当にどれから手を付けていいかわからなかったんですけど、ぱっと見た時に大きめな木を置きたいなという所から始まって、そこを作ってから街の様子を作ろうと思って進めていきました。〕と【ミニチュ

アからイメージが湧いてくるし。

コアイメージについては本研究では3つの系 統がみられた。一つ目は、一つのコアイメージ のまま制作していく人で、 コアイメージと出 会ってからそのコアイメージに沿って箱庭を制 作していく。「まず一番最初に白い卵型のおも ちゃが目に入りまして、パカっと割れる仕様に なっているんですけど、それを見てここから生 まれるっていうのが一番最初に浮かんだ〕と一 つのイメージに沿って箱庭が展開していく。中 には、〔カフェのイメージも捨て切れず、公園 にもなりきらず、そのまま行きました。〕とい うようにコアイメージに沿ったミニチュアがな く、違うイメージに変えようとしたがコアイ メージは捨て切れずに箱庭を制作していく人も いた。二つ目は、最初は制作者の中でコアイ メージがはっきりと浮かんでこないが、制作を しているうちに中心となるイメージがだんだん とはっきりしてくる人である。例えば〔ミニ チュアを見て木とか滝とかがあって自然にしよ う〕と思い作っていくうちに〔好きな人とぼ けーっとしている所がいいなと思って自分がの んびりするのが好きなので置いて、川を見てい る〕と自然の中で自分がのんびり過ごしている コアイメージがはっきりとしてくる。三つ目は いくつかのイメージが同時にある人である。制 作者の一人は自然を意識した海と恐ろしい魔女 のイメージが同時にコアイメージとして存在し ていた。

ミニチュアの並べてある棚を眺めている時に 「愛らしい熊なんで使えればいいかな」 「最初ライオンが目に入ったので絶対使おうと思って」 と【ミニチュアを見た時に惹かれ置きたいと思う】 こともある。コアイメージに沿って箱庭を 制作していき,惹かれるミニチュアを置くこと で,制作している箱庭から刺激を受け,<連想 の広がり>が起こる。 [この卵型のおもちゃを とった時はここから生まれてくるものはもう ちょっと穏やかで人と争わない,人というか他 のものと争わないような,そういうものが生ま れてきたらいいかなって思って〕 [こんなに木 を置いていいのかなっていうくらい置いちゃっ たんですけど、置くとなんか箱庭が生き生きと してくる感じがして〕と【箱庭から受ける印象 が活発になる」。箱庭から刺激を受け、連想が 広がるという、制作者と箱庭の相互作用がある と思われる。

置いていく際には、すでに形作られているミ ニチュアや箱庭場面と制作者の中にあるイメー ジを照らし合わせて<イメージとのすり合わ せ>をして箱庭を制作していく。〔(卵から生ま れるミニチュアを置くことについて)蛇とかワ ニだと若干こう. こっちの人間(制作者)のイ メージとしてちょっと凶暴とか凶悪な感じのイ メージもあるなって。そうじゃなくてもう ちょっとこう生まれた赤ちゃんじゃないですけ ど、小さくて今生まれましたみたいなのに近い イメージがこの草食恐竜っぽいのが一番イメー ジが近かった〕とすり合わせることでミニチュ アを選んでいく。ミニチュアを選ぶ際にはミニ チュアは既製品でありイメージ通りのものがあ ることは多くない。すり合わせていく中で、イ メージ通りのミニチュアがない場合には〔本当 は火山みたいなイメージにしたかったんですけ ど、ミニチュアの中にそれがなかったのでそれ に順ずるものって言えば火かなって感じ〕とい うように<代替物>として違うミニチュアを選 ぶ。置いたミニチュアはイメージ通りの物の代 わりとなるが、代替物として足りないように感 じるとそれを補うようにいくつかのミニチュア を組み合わせてイメージを表現することもあ る。〔腰の曲がった老人を一人置くので良かっ たんですけど。この人(フォークを持った人) が一番近いですね。若いのでそれを補うように 他の人を置いたのはあるかもしれません〕と老 人の代わりに置いた人だけでは足りない感覚が 残り、補うようにイメージに近いミニチュアを 置いていた。また、〔この人がスーツっぽいん ですけど(直立している姿勢でスーツを着た男 性のミニチュア), ちょっとリラックスしてい るような感じがして海岸に着て伸びをしている サラリーマンって考えるとこの海岸にマッチし

ているような感じ〕「自分の中で、たぶん暖か みとかを出したかったので、ひいおじいちゃん とかそういうイメージが自分の中にあって置き たかった〕と【ミニチュアへ制作者のイメージ を投影する】こともある。<ミニチュアへの投 影>はミニチュアに個人的なイメージが投影さ れている。

連想が広がっていくと、制作者の人生に関わ る一場面が箱庭に表現されることもある。「二 匹飼っていたんですけど、去年一匹亡くなっ ちゃってその犬と仲良くて、似ているなと思っ て置きました〕 [昆虫は小さいころに昆虫で遊 ぶことが多くてナメクジとかカエルとかいっぱ いいて、自分には親近感があるものなんですけ ど、大きくなって生活していると昆虫とかは見 なくなるので、そういったものを置きたかっ た〕と箱庭の中でも重要なイメージとして登場 する。中には〔なんとなく今やっていることを していなければ、カフェ開きたかったことを思 い出して〕とコアイメージとして人生に関わる 場面が出てくることもあった。

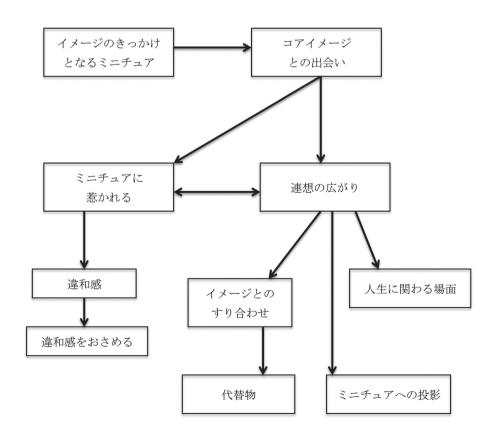
上述した【ミニチュアに惹かれる】際には制 作している箱庭の中に置くと〔(熊を) 普通に 置いちゃうとこの恐竜の時代とこの熊の時代と ちょっとギャップがある〕「象の方は寂しい感 じ〕など違和感を感じることや、そのまま置く とイメージが強すぎてしまうことがある。この 強すぎるイメージをやわらげるために対処し, <違和感をおさめる>ためにはいくつかの方法 があるようである。〔寝かせたらこの表情に、 この熊の目が上に向いていてちょうど空想にふ けっているような顔に見えたので、 じゃあ寝せ てこの端っこに置いて頭をこっち向きにすれ ば、ちょうど空想が広がっているように見え る〕というように箱庭場面を区切っておさめる 方法や〔(ティラノサウルスが)全面的に出て しまうと箱庭が危機にさらされてしまう(中略) かすかに匂わせる程度というかそういう程度で 置きたかったので端っこの方に置きました〕と 距離を取ることや、〔魔女がおどろおどろしい ので、関係の深い可愛い小人を置いた〕〔(象 が)寂しい、険しい感じがします。(中略) ちょっと暖かいとかキラキラとかそういうほん わかしているイメージを(ビー玉を置くことで) 向かわせていくみたいな感じ〕と他のミニチュ アを置くことで強いイメージをやわらげる方法 がみられた。一方で、[ライオンとか虎とか迷 いました。(中略)置くとなんか壊されてしま うような怖さはあります〕と強すぎるイメージ をおさめることができないものは箱庭内には置 けないようである。

Ⅷ. 総合考察

1. コアイメージの持ち方

河合(1969)は「箱庭の表現の中に、何らかの意味でテーマ、あるいは主題と呼べるようなものを見出せることが多い」と述べているよう

に、箱庭には中心となるイメージがある場合が 多い。そのコアイメージは個人的な課題や内界 を映し出しているものだと考えられる。コアイ メージの持ち方について、本研究では三通りみ られた。一つ目は、一つのコアイメージのまま 制作していくもので、基本的にはそのコアイ メージに沿って箱庭が制作される。二つ目は. 最初は制作者の中でコアイメージがはっきりと 浮かんでこないが、制作をしているうちに中心 となるイメージがだんだんとはっきりしてくる ものである。制作しているうちにコアイメージ が湧いてきて、制作者の作りたかった箱庭がで きあがってくる。三つ目はいくつかのコアイ メージが同時にあるものである。どのコアイ メージも制作者にとっては重要なものである。 コアイメージの持ち方は制作者や制作した作品 によって異なると思われ、中心としたイメージ



	概念名	定義
1	コアイメージとの出会	箱庭の中心となるイメージが湧いてくる
	VY	
2	イメージのきっかけと	ミニチュアからイメージが湧いてくる
	なるミニチュア	
3	連想の広がり	箱庭から受ける印象が活発になる
4	イメージとのすり合わ	ミニチュアや箱庭場面とイメージを照らし合わせて制作
	せ	する
5	ミニチュアに惹かれる	ミニチュアを見た時に惹かれ置きたいと思う
6	代替物	イメージ通りのものがない場合にはそれに順ずるものを
		使う
7	人生にかかわる場面	制作者の人生に関わるものが登場する
8	ミニチュアへの投影	ミニチュアへ制作者のイメージを投影する
9	違和感	箱庭には必要だが、制作者がそのままでは置けないもの
10	違和感をおさめる	強すぎるイメージをやわらげるために対処する

が存在しそれに沿って展開していくことは共通 している。本研究では心理療法としての設定で はない上に一回のみの制作だが、心理療法の場 においてもこのコアイメージがどう展開してい くのかに注目することは重要なことと言える。

2. イメージの広がり方

箱庭制作におけるイメージの広がり方につい てはミニチュアを見た時にイメージが湧いてく ることや制作している箱庭場面からイメージが 活性化されるように感じることが挙げられる。 石原(2015)は、制作者はミニチュアを単なる モノとして捉えているのではなく、イメージと して体験しており「モノを単なるモノとして体 験するに留まらず、イメージを交錯させて体験 する」と考えられ、箱庭内に置く時には単なる ミニチュアとしてではなく制作者のイメージも 伴ったものとなると述べている。ミニチュアは 制作者のイメージが伴うもので、時には制作者 の強いイメージが投影されることもある。本研 究では海辺に直立した姿勢のスーツの人を置い

ている制作者がおり、〔リラックスしているよ うな感じ〕と個人のイメージを投影している様 子が見られた。そういったミニチュアは場面に そぐわないが制作者の中ではそこに置くことに 違和感を感じていなかった。箱庭制作の中には より強いイメージを投影されたミニチュアが登 場することも多いと考えられる。また、本研究 では人生に関わる場面を制作したり、連想した りする制作者もいた。河合(1969)によると意 識的に自分が箱庭内に登場していると把握して いる場合や「理想像や未来像、無意識的に生じ て来る面などを含んでいる場合 | があり、箱庭 作品全体が「自己像」と言うこともできると言 う。制作者の幼いころのことやできなかったこ となど制作者の人生に関わる表現は臨床の場面 でも重要なことと言える。

3. 「箱庭生成の自律性」について

コアイメージに伴ってイメージが広がってい き. 時には制作者も予期しない箱庭を作ってし まうことがある。それは箱庭制作には意識的な

ものだけではなく無意識的なものも関係しているからだと思われる。そのため、制作者もどうしても置きたい、箱庭にこのミニチュアが必要だという気持ちが湧き、それを箱庭内にどう置くかが課題となっていく。

本研究ではイメージとミニチュアや箱庭場面 をすり合わせて箱庭を制作していくということ を「箱庭生成の自律性」と呼んでいる。本調査 協力者も箱庭制作をする際にはミニチュアの棚 をじっくりと眺め、時には手に取る様子が観察 された。語りからもミニチュアから制作者が想 起するイメージと箱庭のイメージとをすり合わ せていると考えられる。また、箱庭場面におい ては実際にミニチュアを置いてみて合わないと 感じることや、この場所ではないと感じ、自分 のイメージと合うミニチュア. 場所を模索して いるようであった。この模索を通して、まだ意 識化されていないはっきりとしない制作者の内 的イメージを感覚で模索していくことで、 箱庭 場面からも制作者に働きかけが起き、さらに内 的イメージが活性化していくのだと考えられ る。制作者は箱庭制作を通すことで、自分の内 的イメージと対峙しそのイメージが広がってい くことや新たなイメージを発見することが箱庭 療法の治療の一要因だと推測される。

イメージとのすり合わせをした際には物理的にミニチュアがないことがある。その際には、置きたいイメージに順ずるミニチュアを選んでおり、ミニチュアがなくとも箱庭内に置けるようにするための妥協であると言える。

4. 違和感をおさめる方法

「箱庭生成の自律性」には箱庭制作の中で違和感をどうおさめていくかということも重要になる。本研究でも自分でも置こうと思ってはいないのにミニチュアに惹かれて置くことがあり、置く際には違和感を感じることもある。河合(2002)は箱庭を制作している時に制作者の意識的なコントロールされたものだけではなく、制作者も意図しない思いがけないものが生

じてくるゆえに箱庭における自己治癒力が可能 になると言う。制作者にとっては違和感を感じ ながらも置かざるを得ないものであり、置くた めには違和感をおさめなければならない。本研 究では違和感をおさめるために三つの方法がと られていた。一つ目は箱庭場面を区切っておさ める方法である。二つ目は距離を取ることで違 和感をやわらげる方法である。三つ目としては 他のミニチュアを置いて違和感をやわらげる方 法がみられた。前述した箱庭体験の先行研究で も千葉(2015)が箱庭制作後に箱庭のイメージ を制作者が内在化すると述べている。制作者に とって強すぎるイメージはそのまま内在化しに くく、上述したような三つの方法を使って違和 感をおさめている。箱庭におさめることができ る形にすることによって、制作者にとっても制 作した箱庭を内在化しやすいようにしていると も言える。

Ⅷ. 今後の課題

本研究ではイメージとミニチュアや箱庭場面 をすり合わせて箱庭を制作していくという「箱 庭生成の自律性」に焦点を当て、箱庭体験過程 を明らかにした。その結果、制作者の中で起こ るイメージの広がり方や箱庭制作においてイ メージとのすり合わせは非常に重要な要素であ ることが理解できた。しかし、本研究は箱庭体 験に関する探索的研究であり、今後も詳しく検 討していく必要がある。さらに本研究は一回の み制作でのデータなため、複数回箱庭制作を 行った際にはどういった心の動きが制作者に見 られるのかを概観したものではない。本研究で も示したように、制作者にとってはイメージと ミニチュアや箱庭場面をすり合わせ、箱庭内に おさめられるようにすることこそ、箱庭療法の 本質だと言えるため、連続した箱庭制作の中で はどのようにイメージが展開していくか、制作 者の心はどう揺れ動くのかを今後検討していく 必要がある。

注

1) 東京国際大学人間社会学部 田中信市

引用文献

- 千葉友里香 (2015). 箱庭制作後における箱庭と作り手との関係性の変化について――作り手の変容に関する質的研究―― 箱庭療法学研究, 28 (2), 41-53.
- 後藤美佳 (2004). 箱庭表現に伴う「ぴったり感」 のPAC分析 箱庭療法学研究, 16 (2), 15-30.
- 平松清志 (2001). 箱庭療法のプロセス――学校教 育臨床と基礎的研究 金剛出版.
- 石原 宏 (2002). 箱庭制作者の主観的体験に関する研究――「PAC分析」の応用と「一つのミニチュアを選び、置く」箱庭制作 岡田康信 (編集) 現代のエスプリ別冊 箱庭療法シリーズ II 箱庭療法の本質と周辺,57-69,至文堂.
- 石原 宏 (2003). 箱庭制作過程に関する基礎的研究——「一つのミニチュアを選び,置く」という箱庭制作の数量的データの検討—— 京都大学大学院教育学研究科紀要,49,455-467
- 石原 宏 (2015). 箱庭療法の治療的仕掛け――制作者の主観的体験から探る―― 創元社 63-72
- 伊藤真理子 (2005). イメージと意識の関係性から みた箱庭制作過程 箱庭療法学研究, 17 (2), 51-64.
- 片畑真由美 (2006). 臨床イメージにおける内的体験についての考察——箱庭制作体験における「身体感覚」の観点から—— 京都大学大学院教育学研究科紀要. 52. 240-252.
- 片畑真由美(2007). 箱庭制作における制作者の「体験」についての考察――調査の枠内で見られた一事例から 岡田康伸・皆籐 章・田中康

- 裕(編集) 京大心理臨床シリーズ 4 箱庭療法の事例と展開, 70-79. 創元社.
- 河合隼雄(1969). 箱庭療法入門 誠信書房.
- 河合俊雄(2002). 箱庭療法の理論的背景 岡田康信(編集) 現代のエスプリ別冊 箱庭療法シリーズ I 箱庭療法の現代的意義, 110-120, 至文党
- 木村晴子 (1985). 箱庭療法——基礎的研究と実践 創元社
- 木下康仁(2003). グラウンデッド・セオリー・ア プローチの実践――質的研究への誘い 弘文党
- 近田佳江・清水信介 (2006). 制作者の主観的体験 からみた箱庭表現過程 北星学園大学社会福 祉学部北星論集, 43, 35-57.
- 楠本和彦 (2011). 箱庭制作過程および説明過程に 関する質的研究の試み 佛教大学大学院紀要 教育学研究篇, 39, 103-120.
- 宮川貴美子(2005). 高齢者による箱庭制作の試み 箱庭療法学研究. 17(2). 33-50.
- 岡田康信 (1969). SD法によるサンド・プレイ技 法の研究 臨床心理学研究, 8, 151-163.
- 岡田康信 (1984). 箱庭療法の基礎 誠信書房.
- 岡田康信(1993). 箱庭療法の発展 誠信書房.
- 大石真吾 (2010a). 箱庭制作における砂の作用に関する一研究——作り手の主観的体験にもとづいて—— 箱庭療法学研究. 22 (2). 63-72.
- 大石真吾 (2010b). 箱庭制作という場の特徴に関する一考察——2つの場をめぐる作り手の体験に着目して—— 京都大学大学院教育学研究科紀要. 56. 209-221.
- 斉藤紫をん(1992). 不登校児の箱庭表現に関する 数量的研究 箱庭療法学研究. 5(1), 39-50.

Abstract

Exploratory Study of "Autonomy of Sandplay"

Yukari Ikeda

In a sandplay, we often make a sandplay that is not intentionally made. The feeling that one feels like putting a particular item although one does not know why, or that it feels wrong to put an item in any other places than a particular place, is thought to be related to sandplayer's reconciling the sandplay setting (or existing miniatures) with the image floating within. In this study, the author calls sandplayer's reconciling of sandplay setting with his or her images within as "autonomy of sandplay". The author studied seven research participants' experience of making a sandplay focusing on this "autonomy of sandplay". As a result, the author clarified how the core image that the sandplayer is experiencing evolves and how the image spreads. Regarding the "autonomy of sandplay", the author clarified the importance of sandplayer's reconciling process of sandplay setting with his or her images within, and the process of "osameru (pulling things together)" into a sandplay while feeling some incongruence.

日本人男性同性愛者における性的指向性の 受容過程に関する一研究

津 野 千 文

目 次

- I. 研究の背景と意義
- II. 研究の目的
- III. 研究の対象
- IV. 研究の方法
 - 1. 研究デザイン
 - 2. 研究期間
 - 3. データの収集方法
 - 4. 質的データの分析方法
- V. 結果および考察
 - 1. 性に目覚めるころ
 - 2. 同性愛者の人たちがかかえる困難や混乱, 葛藤について
 - 3. 性的指向性の受容と性的アイデンティ ティの確立にむけて
- VI. 今後の課題

要旨

本研究論文の目的は、日本の男性同性愛者の人たちの性的指向性の受容過程を明らかにし、それに関する理論的仮説を構築することである。情報化社会の昨今、LGBTと呼ばれる人たちは、昔とくらべ今では、より快適な環境のもとで生活しているようにみえる。しかしながら、日本の男性同性愛者のほとんどすべての人たちが、これまでに異性愛者的役割葛藤や抑うつを経験してきており、そして今もなお経験し

ていると言われている。調査を行なうための質問紙を独自に作成し、12名の被験者が本研究に参加した。被験者の人たちと著者とのあいだでデータのやりとりをするために、電子メールを使用した。また、収集したすべてのデータを質的に分析するにあたり、SCATを利用した。このSCATを用いてデータを分析した結果、日本の男性同性愛者の人たちのほとんどが、みずからの性的指向性を受容するにあたり、6つの段階をふんでいくことがわかった。だが、彼らのほとんどは、おそらく、5番目の段階、すなわち選択的カミング・アウトの段階にふみとどまっているようである。

キーワード:LGBT, 異性愛社会,性的指向性, 受容過程,異性愛者的役割葛藤, SCAT

1. 研究の背景と意義

生物学でいうところの有性生殖や、人間社会全般にみられる結婚という制度を慮るならば、有性生殖の場合には、雄と雌が交尾をすることによって、はじめて子孫を残すことができるというのが大前提であるし、結婚制度においても同様に、愛し合う男と女がいっしょになって、子どもをつくり、家庭を築いていくというのが通常である。したがって、異性愛者の人たちが、性的指向性(sexual orientation)の受容や、性的アイデンティティの確立において、悩むな

^{*} 臨床心理学研究科 博士課程(前期)

どということはまずないといえる。

それでは、性的マイノリティである同性愛者 の人たちの場合は、どうだろうか。

情報化社会の昨今,同性愛に関する情報も巷に溢れており、みずからの性的指向性を受容し、性的アイデンティティを確立していくのに、さほど困難を伴わなくなったかのようにみえる。たとえば、2015年11月5日から、東京都渋谷区と世田谷区では、生活を共にする同性カップルを夫婦と同じような関係の「パートナー」と認める制度が開始されるなど、性的マイノリティの人たちにとっては朗報といえる動きも出はじめている。

だが、たとえば、日高庸晴(2006a)は、「同性愛に対する社会的な差別や偏見、暴力を恐れ、多くのゲイ・バイセクシュアル男性は自分の性的指向を公に打ち明けることは少なく、異性愛者としての社会的役割を担い、社会生活を送っている」として、これを「異性愛者的役割葛藤」と命名し、同性愛者の人たちの異性愛社会での生きづらさを述べている。

さらに、多くの同性愛者たちは、異性愛者であれば経験することはないであろう数多くのライフイベントを経験していると考えられる。日高(2006a、2006b、2007)によれば、そのようなライフイベントは、とくに思春期に集中して発生しているという。たとえば、「周囲の友だちが「異性のこと」や「好みの女性のタイプ」などを話し始める頃に、"男性に対して性的魅力を感じる"自分自身について不安や戸惑い、違和感を覚えることが多い」と彼は述べている。その好例が石川大我さんであろう。

「しかし、学年が進むにつれて、どうやら、自分の気持ちはその「ホモ」であるということがわかってきた。そしてそれは「同性愛」であるということも。そして、決して誰にも言えない秘密を抱えてしまった、と一人悩んだ」(石川大我、2009、p.52)

「さてさて、高校生になって困ったことが起きた。それは恋愛が具体的になってきたということだ。—中略— 気になる女のコが一人

もいないようじゃ、昼どきの会話がもたない。ここは「気になる女のコ」というヤツを設定せねばクラスの「爪弾き者」になりかねない。」(前掲書, pp.83)

というふうに、自分の中・高生時代をふり返っている。

ところで、石丸径一郎(2008b)は、「第二次性徴を迎える思春期の頃には社会的困難やアイデンティティの危機を体験することも多いが、それをうまく乗り越え、克服することができれば、通常は特に援助を必要としないで生きていくこともできる」と述べている。すなわち、同性愛者の人たちは、思春期の頃にはみずからの性的指向性に途惑い、悩みながらも、いつかはそれを克服し、乗り越えて、今を生きているということになる。したがって、そこには、みずからの性的指向性を受容するにあたり、段階(ステップ)が存在するのではないかと推測するのは不自然ではあるまい。

海外では、過去数十年のあいだに、同性愛者の性的アイデンティティの形成過程に関して、いくつかのモデルが提案されてきた。たとえば、ヴィヴィエンネ・キャス(Vivienne C. Cass)(1979、1984)や、リチャード・トロイデン(Richard R. Troiden)(1989)らの先行研究がある。

日本においては、堀田香織(1998)が学生相談の経験知から、男子大学生の同性愛アイデンティティ形成のプロセスについて考察した研究や、梶谷奈生(2008)のような、女性の同性愛者の自己受容過程における課題について探索的に行った研究がある。また、HIV感染の問題や、周囲の人たちへのカミング・アウトの問題といったように、日本国内における男性の同性愛者や両性愛者が抱える問題や深刻な現状などを調査・報告したものは存在する(たとえば日高ら、2007)。だが、同性愛者や両性愛者を対象にした、みずからの性的指向性の受容過程に関して研究したものは、日本では数少ないのが現状である。したがって、たとえば、カウンセリングなどで同性愛に悩む人たちに対する心理

的援助を行うにあたり、同性愛者の人たちが、 実際にみずからの性的指向性をどのように受容 していくのか、あるいは受容していったのか、 その過程を研究することは、意義深い。

Ⅱ. 研究の目的

日本人の男性同性愛者の性的指向性の受容過程 全般を明らかにし、その理論的仮説を構築する。

Ⅲ. 研究の対象

男性の同性愛者、いわゆるLGBのうち、G(ゲ イ) に該当する日本人で、研究への参加協力の 同意を得られた人。年齢層は、日本社会におい て成人とみなされる20歳以降とする。また. 性同一性障害(gender identity disorder: GID) に該当する人は除く。なぜならば、同性愛は、 性的指向性 (sexual orientation) の問題である のに対し、性同一性障害は、みずからの生物学 的性別と自己の性認識の不一致が問題となるの であり、扱う問題の次元が異なるからである (山内俊雄, 2004, pp.21-24)。

IV. 研究の方法

1. 研究デザイン

日本人の男性同性愛者がみずからの性的指向 性を受容していくのにあたり、そこにはなにが あるのか、どのような問題が生じてくるのか、 それに対して、彼らはどう感じ、どう対処して いくのか、そして、全体としてどのような段階 をふんでいくのか などについて考究していく 質的研究である。

なお. 本研究を行うにあたり. 東京国際大学 学術研究倫理審査を受け、その承認を得ている。

2. 研究期間

2016年4月~2016年11月

3. データの収集方法

以下の方法で、データを収集した。

①男性同性愛者の性的指向性の受容過程に関 して、理論的仮説を構築するための質問紙 を独自に作成した。その具体的な質問内容 は、以下のとおりである。

★ 質問事項 ★

- 1. あなたが、異性ではなく同性(男性)に性的魅力を感じたのはいつごろですか?
- 2. 同性(男性)に性的魅力を感じる自分に気づいた理由は何ですか?
- 3. 同性(男性)に性的魅力を感じる自分に気づいたとき、あなたはどう思いましたか?
- 4. 同性愛者であることによって、これまでに日常生活上で困ったことがありましたか?
- 5. 4でYesだった人は、どのようなことで困ったのですか?
- 6. 4でYesだった人は、その困ったことをどのように解決しましたか?
- 7. 同性愛者である自分を、これまでにいやになったことはありますか?
- 8. 7でYesの人も、Noの人も、その理由を書いて下さい。
- 9. 7でYesだった人(つまり、同性愛者である自分をこれまでにいやになったことがある人)は、今でも 同性愛者である自分がいやですか、それともいやではありませんか?
- 10. 9の理由を書いて下さい。
- 11. 自分が本当に同性愛者なのかどうかを、なんらかの方法で確かめようとしたことはありますか?
- 12. 11でYesだった人は、どのような方法で確かめましたか?
- 13. 同性愛を治療しようと思って、医療機関やカウンセリングなどにかかろうと考えた、あるいは実際に 医療機関やカウンセリングなどにかかったことがありますか?
- 14. 13でYesだった人は、その後 どうなりましたか?
- 15. 同性愛者である今の自分を受け入れている人は、どうして受け入れようと思ったのですか?
- 16. 15に関連して、同性愛者である今の自分を受け入れている人は、そうしようと思った何かきっかけが ありましたか?
- 17. それはどのようなきっかけでしたか?

- 18. もし生まれ変われるとすれば、また同性愛者として生まれたいですか、それとも今度は異性愛者として生まれたいですか?
- 19. 18の理由を書いて下さい。
- 20. 家族や友人、あるいは職場の同僚といった身近な人たちにカミング・アウトしていますか?
- 21. 20でYesの人も、Noの人もその理由を書いて下さい。
- 22. その他、お書きになりたいことがあれば、なんでも自由に書いて下さい。
- ② 研究協力者に対して、①で作成した質問紙を用い、電子メールを利用した調査を実施した。なお、この電子メールによるやりとりは、研究協力者ごとに数回行った。

4. 質的データの分析方法

SCAT (Steps for Coding and Theorization) を用いて、協力者の人たちから送信されたデータを分析し、そこから得られた結果を基礎にして、日本人の男性同性愛者が性的指向性を受容していく過程に関する理論仮説を構築した。

SCATとは、名古屋大学大学院教授の大谷尚(2008, 2011)によって開発された、質的データの分析の一手法である。具体的手順は、以下の通りである。

表の中にセグメント化したデータを記述し、 そのそれぞれに、

- ①データの中の着目すべき語句
- ②それを言いかえるためのデータ外の語句
- ③それを説明するための語句
- ④そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコードを考えて付していく4ステップのコーディングと、そのテーマ・構成概念を紡いでストーリー・ラインを記述し、そこから理論を記述する手続きとからなる分析手法である。1)

V. 結果および考察

全部で14人の方々に研究の協力者になってもらうことができた。しかし、このうちCさんとHさんは、研究の対象者から除外した。その理由は、Cさんの場合は、イギリス人であったためであり、Hさんの場合は、Hさん自身も書いているとおり、本研究の対象者であるための

条件である「男性の同性愛者、いわゆるLGBのうち、G(ゲイ)に該当する人」にあてはまるのかどうか疑問が残ったためである。

したがって、12名(Aさん・Bさん・Dさん・Eさん・Fさん・Gさん・Iさん・Jさん・Kさん・Lさん・Mさん・Nさん)の研究協力者からのデータを SCAT にかけて質的分析を行った。

研究の結果から、12人の研究協力者のすべての人たちが、紆余曲折がありながらも、みずからの性的指向性を受容することができていたといえる。

これから、彼らがどのようにしてみずからの性的指向性を受容していったのか、その過程を時間軸に沿って説明していきたい(ただし、2のiからviiにおいては、SCATによる分析の結果、質的データから抽出された諸概念を中心に説明する)。研究協力者の人たちが、実際に書いて送ってくださった内容は【】で括り、本研究において重要と思われる概念を表現する語や句はく >で括ってある。なお、ここで述べられる内容はすべて、理論的に飽和がおきたものである。

1. 性に目覚めるころ

12人の研究協力者の人たちが、異性ではなく同性(男性)に対して性的な魅力を最初に感じた時期は、幼児期から思春期にかけてであった。

当初、同性(男性)に対して性的魅力を最初に感じた時期は、性に目覚める思春期に集中するはずと予想されたが、結果はそうではなかった。Bさんのように【小学校時代や小学生以前は性の経験は全くなかった】という人もいるが、Aさん・Dさん・Eさん・Fさん・Gさん・Lさん・Nさんは、フロイトのいう男根期や潜伏期にあ

りながらも、同性に対して性的な興味をいだ き、さらには性的な行為におよんだ人もいる。 ただし、そのような性的な行為は、【意識的に 身体的な接触をしていました。」と書いている Eさんや、自分から進んで行動をおこしていた DさんやLさんといった例外も存在するが、し かし、たいていの人たちの場合は、自発的にあ るいは能動的に行われたものではない。それと は逆に、身近かにいる成人男性や、年上の少年 たちの誘惑によって、あるいは、GさんやNさ んのように映画やテレビ番組などで、ヒーロー が敵にやっつけられているサディスティック な・マゾヒスティックなシーンによって、性的 な興奮を覚えたというふうに、受動的になされ たことは注目すべきことである。周囲の成人男 性や年上の少年の存在と身体的な接触の継続と が、小児性欲を刺激し、維持させたものと考え られるし、またDさんのように、書物に載って いる男性の裸体像や、生殖器の解説図などか ら、性的な刺激を受けることもあるのだろう。2)

●Aさん:

【自分が男性に興味があるのを感じた最初 は小学校の2年生から3年生にかけて。】 【小学校の警備員(当時は同じ団地に住ん でました) に誘われるがままにキスされた り、局部の見せ合いや相互マスターベー ションをしてもイヤではなかった。】

● D さん:

【かなり幼いころ、小学校に上がる前から ぼんやりと関心をもっていたように記憶し ている。】

【近所にあった柔道場の中学生のお兄さん たちが着替えるところを入り口からじっと 見ているのが好きだったのを思い出す。】 【10歳ごろに、家にあったギリシア美術の 本も、男性の裸体像が載っているページだ け選んでページをめくることもあった。 【また、当時、百科事典の男性器に関する 医学的な解剖図が載っているページに非常 に興奮したのも覚えている。男性器のペー

ジは、説明を覚えこむぐらいに何度も見て いた。

●E さん:

【小学校1年生 6歳のころ。】 【近所に住む同じ小学生のお兄ちゃんたち が大好きだったから。 【性的対象として好きでした。】

● F さん:

【5歳ころ】

【ペニスに興味を抱いたから…?】

【一回り以上離れた当時19歳位の従兄が、 一緒に寝ている時にいじらせて、大きく硬 くさせたことが大きいと思います。】

● G さん:

【小さい頃ヒーローものの番組などを見て いて、たくましい男性主人公が悪者に捕え られて痛めつけられているのを見て興奮を 覚えたので、それが最初かもしれません。】 【多分3歳とか。】

■ L さん:

【自覚は無いが、幼少期の頃から。】 【保育園のときに、年上の男の子を追いか けていたり、 友人のお兄さんの勉強机の椅 子にほおずりしていた記憶がある。 【小学校4年生のときは、担任の男性教諭に 強く惹かれて、写真にキスをしたり、ジャ ンバーのにおいをかいだりしたことがある。】

■Nさん:

【私はSMの嗜好も有しているが、自分の そういう性癖として最初の記憶としてある のは. 多分自分が幼稚園か小学校低学年の 時の経験である。】

【その映画の中で少年の赤胴鈴之助が悪漢 に捕まり、縛られて梁から吊るされる場面 があった。なんとその部分だけ、いまだに 記憶が鮮明に残っているのである。】

ここで疑問に思うことが一つある。それは, 男根期なのであればいさ知らず、潜伏期に入っ てからも、子どもはみずから進んで性的な行動 に走るものなのだろうか。このことに関して、

フロイト (1905) は、潜伏期における小児性欲 に関して、次のように述べている。

「さらにわたしたちは、これまでの経験から、誘惑という外部の影響によって、予定よりも早い時期の潜伏期の中断が引き起こされ、場合によってはその時点で潜伏期が廃棄されてしまう可能性があることを確認することができた。こうした場合、子供の性欲動は、事実として多形倒錯的なものとして現れてくる。さらに言えば、こういった予定よりも早い時期の性活動は、それがどんなものであっても、子供を教育する可能性を傷害するものとなる。」(Freud, S. / 渡邉俊之(訳), 2009, p. 299)

したがって、潜伏期にある子どもが性への興味をいだき、性的な行為にまでおよぶことは、周囲の成人男性や年上の少年の存在、および身体的な接触が継続するという条件のもとでは、十分にありうることなのである。

しかしながら、同性との性的な行為におよびながらも、そのことと同性愛とは、AさんやFさんたちのなかでは、直接に結びついてはいない。むしろ、性というものに対する無邪気さや純粋さ、あるいはあどけなさのようなものがある。ただし、Aさんの場合は、【子供心にも「これは人には言ってはいけないこと」と薄々感じたんだろうね】と書いていることから、成人男性との性的な行為に後ろめたさのようなものを感じているようだ。

ところで、アンナ・フロイト(1965)が、男 根期の子どもたちが示す行動でもって、その子 の将来の性的アイデンティティを予測すること が可能である、と述べていることは興味深い。

「概して、男根エディプス期にある子どもの行動は、それ以外の時期よりも性的な役割と性的対象の選択に関し、彼の将来の傾向をより明確に予示しているといえる。」(Freud, A./黒丸正四郎・中野良平(訳), 1981, p. 150)

だが、A さん・D さん・E さん・F さん・G さん・L さん・N さんのように、男根期や潜伏期

といった早い時期に同性愛傾向(ここではまだ「傾向」である)に気づいた子どもであっても、 それを明確に同性愛として同定するには、やは り思春期を待たねばならないのだといえよう。 同様のことを、フロイトも、つとに述べている。

「最終的な性行動のありようは、思春期のあとになってようやく決定される。それは、一部は体質的なものであり、一部は偶然的なものであるような、いまなお見通すことのできないたくさんの要因の成果なのである。」(前掲書、p. 185)

Aさん・Dさん・Gさん・Nさんは、次のように書いている。

●A さん:

【高校生の頃、乗り換えの駅のトイレに入っていたら、隣の人が局部を見せてきたり、2人きりになったら触り合ったり、隙を見て個室に入って行為に及んだ。これがゲイと自覚したきっかけだった。】

●Dさん:

【中学生になると、自分は「同性」に興味を持つ特別な(異常な)存在なのではないか、という自覚が生まれ始めた。】

●Gさん:

【はっきり「これは男性に性的魅力を感じている」と思ったのは、やはりマスターベーションの時に思い浮かべるのが学校の体育の先生などすべて男性だったからだと思います。】

【中学1年生のころだと思います。】

●Nさん:

【男性そのものに興味を持ったのは中学校2 年生の時, 一年先輩の男の子にあこがれた。】

このように、思春期に入る以前に、同性に対して性的な魅力や興奮を感ずるようになる段階を<性への目覚め>の段階とする。

次に、Bさん・Iさん・Jさん・Kさん・Mさんは、思春期に入るころや、思春期に入ってから、はじめて同性に対して性的な魅力や興奮を

感ずるようになる。ただし、ここでも、学校の 体育教師など身近かにいる力強い成人男性の存 在が、同性に対して性的な魅力を感じると自覚 することに関与していることは看過できない(1 さんの場合は、同級生であったが)。

■Bさん:

【中学2年くらい】

【体育の先生や同級生に目がいったから。】

■Iさん:

【小学5年生頃】

【男の子の友達がコケて押し倒された形に なり、その時に修学旅行で見た裸が浮かん できた。

■Jさん:

【小学校6年の頃。いわゆる初恋の頃です。】 【今まで感じた事のないドキドキ感をある 男性に感じ、彼を考えながらオナニーした のを覚えています。】

●Kさん:

【中学1年生の頃】

【運動部に入っていた彼の颯爽とした姿や汗 の匂いにうっとりしている自分を意識した。】

■Mさん:

【自分が同性に性的魅力を感じたのは、中 学2年生(14歳)の時です。

【気づいたきっかけは、電車の網棚に置き 忘れていた雑誌がホモ雑誌『薔薇族』で. 思わず持ち帰って読んだことだと思われ ます。

Mさんが、実在の成人男性や年上の少年、あ るいは同性の同級生からではなく, 雑誌などの 記事といった「物」から性的な刺激を受けたが. これはDさんと同様である。Dさんも、書物に 載っている男性の裸体像や、生殖器の解説図な どの「物」から、性的な刺激を受けたのだった。

2. 同性愛者の人たちがかかえる困難や混乱. 葛藤について

同性愛者の人たちは、<性への目覚め>に

よって、だんだんと同性に対して性的な魅力や 興奮を感じる自分に気づいていくのだが、これ にともなって生ずる彼らの困難や混乱. 葛藤. および孤独感などについて、これからiからvii にわたって、詳述していく。

i 周囲との齟齬をきたすこと

学年が進むにつれてものごころつくころに は、換言すれば、異性愛中心主義の社会に感化 されるにつれて、同性愛者の人たちは、みずか らの性的指向性に関して「自分は変じゃないか」 「自分はまわりの人たちとはちょっと違うん じゃないかしというふうに、周囲との齟齬をき たしはじめる。また、自分が同性を好きなこと は隠しておいたほうがよいという気持ちをいだ きはじめ、不安になる。隠す理由としては、同 性愛者はいじめや差別の対象となりうるからで あり、また、良好な人間関係を構築し、維持す るためでもあると考えられる。同様のことは. 室井舞花さんも述べている。

「同性を好きになることや、男・女らしくな い人は、からかわれたり、いじめの対象にな る」からである(室井舞花, 2016, p. 10)。

●Bさん:

【同性愛者だとカミング・アウトすること で、友達関係が崩れるのではないかと考え ていました。

●Dさん:

【思春期以降、性に関しては、周囲の流れ と決定的に違うのだと気づいた時は、大き なショックと孤独感があった。まず、この ことは絶対に外に漏れてはいけない、と固 く思った。】

●E さん:

【どうやら他の子と自分は違うみたいだ なぁ。

【他の男子は女子を好きになるみたいだ なあ。

■Jさん:

【G男性が差別の対象になっている事を

知ったのは高校1年になってそのような話題が出始めてからです。それからは、そのような自分を出さないように気を付けなくちゃと思い、そうするようになりました。】

●Lさん:

【自分が異質で人に言ってはいけないということをなんとなく気づいていくうちに, どうしようどうしようと焦っていた。】

ii. <異質である不安>

このように、ほとんどの男性の同性愛者の人 たちは、みずからの性的指向性を自覚するにお よんで、「そんなはずはない」とか「ふつうと はとちがう」とかいう感覚をもって不安になる。 たとえば、キャスは、他人とはちがっている自 分に対するこのような不安の状態を 'alienation' とよんでおり、「個人が、自分は 他人とはちがっていると、自己に対してよそ者 であると感じる程度 | と定義している。また. トロイデンは、'marginality' という単語を使 用し、「自分が同性を好きであるということは、 この社会では主流ではなく辺境にいる」という 同性愛者の人たちの境遇を表現している。さら に、同性愛者であることを公にしている精神分 析医のリチャード・イサイ (Richard A. Isav) は、 'outsider' や 'peripheral' という単語を使用し, 同性愛者の人たちの置かれた孤立した状況を次 のように述べている。

「よそ者・のけ者のように感じながら、同性 愛者である若者たちは、親離れをするために も、そして、まわりから受け入れられている と感じられるためにも、この時期には、仲間 たちの存在が必要不可欠になってくるのだ が、その仲間たちの輪の中には入れず、しば しば周辺のままであり続けるのだ」(Isay, A. R., 1996, p. 64)

本論文では、この同性愛者の人たちのいだく 孤立した感情を〈異質である不安〉とよぶこと にしたい。この〈異質である不安〉をなんとか して解消しようと、EさんやLさんのように、男 性の同性愛者の人たちは悪戦苦闘するのである。

●E さん:

【大学2年生のときに試しに女子と付き合ってみたが、手もつなげなかった。】

●Lさん:

【こうだったらな、こうじゃなかったらな、 と空想の世界を思い浮かべては慰めていた。】

さらに、イサイは、次のように述べている。「公けにカミング・アウトを行っているスポーツ選手や、政治家、俳優、あるいは高名な教師、弁護士、そして医師は、いまもって非常にその数が少ない。彼らは失うものがあまりにも多すぎると信じているからだ。不幸にして、初期青年期にある同性愛の少年たちは、それゆえに、みずからの同性愛を自認するうえで助けとなるやもしれぬ役割モデルを奪われているのである。もしそのような役割モデルがいたとするならば、「ぼくも、あの人のようになりたい!」と、彼らは自分自身にむかって言うことができるかもしれないのだが。」(前掲書、p.64)

たしかに、イサイの言うとおりかもしれない。身近かに、もっと自分と同じ同性愛者として知られている有名人や社会的地位の高い人物がいれば、同性愛の人たちは、〈異質である不安〉をかきたてられることも、現在と比して少なくなるかもしれない。

iii. <振り子の状態>と<実験的行動>

同性愛者の人たちのなかには、「いまは同性が好きだけれども、いずれは異性が好きになるはずだ」という思いから始まり、「やっぱり、同性が好きなのかもしれない」という思いを経て、再び「いやでも、もしかしたらそうじゃない(異性を好きになる)かもしれない」という思いに戻るといった往復する心理的な現象が認められる。

たとえば,石川さんは,次のように記述して いる。

「だから、自分の気持ち=男のコが好きなこ

と、に素直になれなかった。「思春期よ早く 終われ!」こう思ってボクの思春期は過ぎて いった。「思春期が終われば、ボクは女のコ に恋をするのだから……」(前掲書, pp. 80-81)

筆者の研究においては、Dさん・Gさん・J さんに類似の現象がみられる。

●Dさん:

【中学生になると、自分は「同性」に興味 を持つ特別な(異常な)存在なのではない か. という自覚が生まれ始めた。当初は. きっとこの段階を経て自然に異性愛にたど り着くのだから、もう少しの辛抱と思って いたのですが、中2の頃になんとか脱却し て異性愛に早くたどりつかなくちゃ、と焦 り始めていました。

●Gさん:

【知識としてやはり思春期には女性を意識 するようになるものと思っていた】

■Jさん:

【当初私は、まだ子供から大人への過渡期 だから男性が対象でしたが、そのうち女性 になるものとの思い込みがありました。】

イグナシオ・ロツァーノ-ヴェルドゥツコ (Ignacio Lozano-Verduzco) が、「同性愛の欲求 を排除するのか、それとも社会化するのかのあ いだを、振り子のようにゆれ動く。その動き方 は、同性愛の男性たちが受容と排除のあいだを 行ったり来たりするのと同じである」(Lozano-Verduzco, I., 2015, p. 27) と述べているように. 同性愛者である自分を認めるのか、それとも拒 むのかのあいだを往復する現象を、時計の振り 子にたとえている。そして、この<振り子の状 態>を解消するために、自分がはたしてほんと うに同性愛者なのかどうかを実際に試して確か めてみるという行動をとる人たちもなかには存 在する。この行動は、Dさん・Eさん・Gさん において認められる。

●Dさん:

【同性愛とは逆方面の自分を試すというこ とで、高校生のころ、女子に告白してみた ことがある。

●E さん:

【男性との初体験を済ませた時に、疑問が さらなる革新になった。3)

【女性に対しての性的指向はない、性的指 向は男性に向いているということです。】

●Gさん:

【女性の水着姿などを見ながらマスター ベーションをしましたが、全く満足感が得 られず、矯正は断念しました(苦笑)。】

Dさん·Eさん·Gさんにおける上記のような. ほんとうに同性愛者なのかどうか、みずからの 性的指向を試してみるという確認の行動や、性 的指向性をみずから変えようとする行動を、こ こで〈実験的行動〉として定義したい。

iv. <正体が知れる不安>

さらに、ほとんどの男性の同性愛者の人たち は、良好な人間関係を構築し維持するために も、自分が異性ではなく同性に性的な欲望を感 じることは秘密にしておかねばならないという 警戒心のようなものをもつといってよい。この 警戒心のようなものを、ここでは<正体が知れ る不安>とよぶことにする。さきほどの<異質 である不安>と併せて、この<正体が知れる不 安>をなんとか解消・除去しようとして、男性 の同性愛者の人たちは四苦八苦するのである。 殊に、Jさんの場合には、周囲からの否定的な 言動や態度により、孤立無援の状態(社内のい じめ)におかれていたこともあり、<正体が知 れる不安>ははかり知れない。また、Kさんの 場合は、同性愛者であることを秘密にし続ける ことのたいへんさを物語っている。

●Dさん:

【まず、このことは絶対に外に漏れてはい けない、と固く思った。】

●E さん:

【男子が好きということは、他の人には言わない方がよいみたいだぞ。】

●Lさん:

【気の合う同性の友達に性的要求がでてきてしまうので、友達関係を築けない、築いても自分からシャットアウトしてしまう。】

●Jさん:

【会社で私と男性の新入社員とが先輩後輩として普通に親しくしていた時,勤めていたエリア内の会社員達ほぼ全員(約100人)に私達は"エイズ!"と差別的な表現で呼ばれました】

●Kさん:

【職場の後輩を好きになり、親しくなったがGであることは隠していたのに、覚られてしまい、一方的につきあいを拒絶されてしまった】

【職場の後輩については、何度も交際を復活してほしい旨を告げ、Gではないと嘘をついて弁明したが、翻意はできなかった。】

●Nさん:

【私はできうる限りノンケに見えるよう、 言動や容姿にこだわり続けてきた。そうい う面でのストレスはかなりあった。4】

【私はGが集まるような場所やお店, サウナなどには一切近づかなかったので, 余計そうであった。近づかなかった理由も, 仕事関係など万が一ばれることを恐れてのことであり, やはりかなり抑圧された状況に長年いたと考えられる。】

ここで注意すべきは、この<正体が知れる不安>をもつことと、自分は同性愛者であると認めることとは次元を異にする現象であるということである。このことは、BさんやNさんに典型的にあらわれている。

●Bさん:

【すぐに受け入れたが、友達にはそれを内緒にした】

●Nさん:

【隠し続けてきている】

【自分は生まれついてそれなりの嗜好やフェチを持っており,自然とそういう自分を受け入れていたように思う。】

v. <男らしくない男の子症候群>

ところで、男性の同性愛者の人たちの一部には、子どものころ、「しぐさやふるまいが、男性なのに男らしくない、女っぽい」「男の子がふつうやるような遊びが好きで、そればかりやっていた」「男の子たちとよりも、女の子たちとよく遊んでいた」といった人たちが存在することが知られている。

サイモン・ルベイ (Simon Levay) (1996) は、 次のように記述している。

「こうして、幼児期のジェンダー不適応と成人後の同性愛の関係は、とくに男性については明確に確立された。一中略一この関係は発達心理学において最も際立った堅実な発見の一つとなっている。」(Levay, S. / 伏見憲明(監修)、玉野真路・岡田太郎(訳)、2002、p.93)。

アンナ・フロイトも、次のように記述している。「この時期〔潜在期のこと—筆者注〕で将来の同性愛傾向を暗示するものは、むしろ女の子と遊びたがったり、女の子の玩具で遊んだり、こっそり楽しんだりといった傾向の方である。こういった逆の傾向は、潜在期の少女にもあてはまる。」(前掲書、p.160)。

ここでは、〈男らしくない男の子症候群〉とよんで、検討してみたい。たとえば、バーナード・ズッガー(Bernard Zuger)(1984)による研究では、早期より女の子のようなふるまいをする被験者の少年たち55人を追跡調査した結果、38人の少年たちの性的指向性に関して決定することができ、35人(63.6%)が同性愛者かその変異型になり、3人(5.5%)は異性愛者になったと報告されている。ただし、残った17人の少年たちのうち、10人はその性的指向

性を確定することができず、7人はその後の追跡調査をすることができなかったという。

本研究では、Fさん・Gさん・Iさん・Kさん・Lさんがその典型的な例であろう。

●Fさん:

【しぐさとか言葉遣いが女性っぽく見られないか気になった。】

【ある友人に「…じゃないの」ってよくいうけど、なんか女っぽいと言われたことがあった。】

●Gさん:

【小さい頃から少し女性っぽいところがあったため、よく「オカマ」と言われていじめられました。】

【言葉づかいがかなり優しい感じでした。 歩き方も小股でチョコチョコ歩く感じでした。少しだけピアノを習っていたのですが、一緒に習っていたお姉さんたちが小指を立ててピアノを弾いているのを見てそれを真似してみたり(笑)。小学生の時はゴム飛びもよくやりました。逆に男の子がよくやる球技(野球、ドッヂボール、キャッチボール)などは大変苦手でやりませんでした。そういう様子を周りの男子たちが見て、「女のようだ」「きもい」「オカマ」と言うようになりました。女子たちからも「クラスのどの女子よりもおしとやか」とか言われたりしました。】

■Iさん:

【同性愛者としてとはちょっと違いますが、私のキャラクターがキャピキャピしていて、歩くカミング・アウトのようなものなので、小中高(大)と、知らない人にも「あの人ホントにオカマらしいよ」→「まじで!? チョーウケる。キモイ。」という話が多々あること。】

【精神的ダメージが大きくて泣きっぱなしなしでした。】

●Kさん;

【自分の中身が純粋に女の子である】

●Lさん:

【きっと本当は、ままごとをやって、きせかえ人形をやって、絵をかいて、そういうことをたくさんしたかったのに、同年代の友人は、ゲームセンターいって、スポーツやって、暴力的で、そういう人間関係の中にいることが苦痛だった。】

Fさんの場合は、言動が「女っぽくて男らしくない」と友人から指摘を受けたことにより、「自分が同性愛者であることが周囲に知られてしまうのではないか」、あるいは「すでに知られてしまったのではないか」と、「正体が知れる不安」に陥った。Iさんの場合は、【私のキャラクターがキャピキャピして】いるところが、周囲の人たちの目には、「男の子なのに、なんだか女の子っぽい」という印象として映り、【あの人ホントにオカマらしいよ】と判定され、いじめられたものと考えられる。そしてこのことは、Iさんにとって一つの心的外傷体験となってしまった。

次に、Kさんの場合である。【自分の中身が 純粋に女の子である】と書いているのだが、こ のことに関連して、フロイトは、次のように記 述している。

「心的な両性具有に関する理論では、対象倒錯者の性対象が正常な性対象と相反するものであることは当然の前提となっている。すなわち、男の対象倒錯者は、女性と同じように、男の肉体的特徴や心の特徴から発する魅力に弱く、自分自身を女であると感じ、男を求めるというのである。これが妥当する対象倒錯者はたくさんいるが、対象倒錯の一般的特徴を言い当てているわけでは全然ない。男の対象倒錯者の大多数は、男としての心的特徴が保たれており、反対の性の第二次性別特徴を備えていることは比較的まれである。」(前掲書、p. 182-184)

たいていの男性の同性愛者の人たちは、フロイトも「男の対象倒錯者の大多数は、男として の心的特徴が保たれており」と述べているよう に、「自分自身を女であると感じ」てはいないであろう。だが、Kさんに限っていうならば、「自分自身を女であると感じ」ていることがわかる。 Kさんのように、同性愛者の人たちのなかには、女性的な心性をもつ人もいることがわかる。

このように、男性の同性愛者の人たちにとって、この「男っぽくない・男らしくない(effeminate・camp・sissy)」ところが、そのまま「同性愛者(オカマ)である」と判別されることの悲しみや、自分が同性愛者であることが顕現してしまうのではないかという恐怖といっても過言ではないほどの不安を感じるのではないかと推測される。Dさんが【「同性愛・おかま」というのは社会規範からはずれた、嘲笑されるべき存在で、全うな人間ならばそうはならないものだという暗黙のルールを感じ取っていた】と書いているように、男性の同性愛者の人たちにとって、周囲の人たちから「オカマ」と呼ばれることは、侮辱である。そして、これも〈正体が知れる不安〉のひとつである。

vi. 「異性愛者的役割葛藤」の不自由さに耐 えること

日高は、男性の同性愛者の人たちがかかえる 「異性愛者的役割葛藤」について、次のように 説明している。

「カミングアウトしていない多くのゲイ・バイセクシュアル男性は日常的に異性愛者としての役割期待に応えるために努力しているといえる。」(日高庸晴, 2000, p. 268)

「「異性愛者」としての社会的役割とは、女性と恋愛関係にあることが自明視される中、日常の会話が進められることであったり、親から結婚や孫を期待されることによりプレッシャーを感じつつも「異性愛者」として立ち振る舞うことであったり、男性の恋人やゲイ・バイセクシュアルの交友関係のことを自由に話せない制約などである。こうした異性愛者を装う役割演技によってゲイ・バイセクシュアル男性の多くはストレスを抱え、自らの性的指向やその欲求を抑圧しなければなら

ない。」(前掲書, pp. 269-270)

日高の述べるように、ほとんどの男性の同性 愛者の人たちは、〈正体が知れる不安〉をなん とか軽減しようとして、四苦八苦する。〈正体 が知れる不安〉から、ほんとうはそうしたくは ないのに、異性愛者中心主義の社会では異性愛者のふりをせねばならず、そこから「異性愛者 的役割葛藤」が生ずるのである。この〈正体が知れる不安〉を軽減させるには、「異性愛者的役割葛藤」の不自由さに耐えねばならず、そこに生きづらさを感じることになる。

筆者の研究においても、多くの人たちが「異性愛者的役割葛藤」の不自由さに耐えていることがわかる。

●A さん:

【この歳で結婚しない事をやはり諸々言われたり, 肩身の狭い思いをしております。】

■Bさん:

【大学時代, サークルの合宿の夜中の飲み 会で, 好きな子は誰が一人ずつ言わなけれ ばいけなかったとき, 無理矢理, 一般的に 可愛い, 皆から人気があった女の子の名前 を言いました。】

【異性の話や恋愛の話になった時は面倒臭いなと思っていて、出来ればそういう場面から避けたいとは思っていました】

●E さん:

【彼女の存在や結婚のことを聞かれたときに、彼氏の存在を彼女と言い換えたり、嘘をついたりする自分に嫌気がさしたことがあった。】

このように、どのあたりまでを「異性愛者的役割葛藤」と感じるかは、その人によって異なってはくるものの、ほとんどの男性の同性愛者の人たちが、なんらかの「異性愛者的役割葛藤」を体験しているといってよい。5)自分が異性ではなく同性に性的な欲望を感じることは秘密にしておかねばならないという〈正体が知れる不安〉ゆえにである。

vii.「オモテ」と「ウラ」

ところで、Lさんが次のように書いていることは、注目に値する。

●Lさん:

【2つの仮面を着け外ししながら生きている,全く違う2つの世界を2つの人格をもっていききしている】

【2つの仮面】や【2つの世界】というLさんの表現は、石丸の行った研究に出てくる「あっちの世界」と「こっちの世界」という表現に通ずる。石丸は「あっちの世界」と「こっちの世界」について、次のように記述している。

「LGBにとって"あっちの世界"であると感じられるのは、異性愛者が構成員の多くの割合を占める生活世界のことである。LGBの存在は、人口中の割合としては異性愛者よりもかなり少ない。意図的にLGB同士で集まらない限りは、LGBは多くの異性愛者たちの中で少数者として過ごすことになる。具体的には、職場・学校・家庭など、LGBの日常生活の多くが"あっちの世界"として感じられる。一中略一つまり"あっちの世界"というのは異性愛が暗黙の前提となっている世界である。一中略一"あっちの世界"においてもっともよく見られる経験は"異性愛者を装う"ことである。」(石丸、2008a、pp. 69-70)

「"こっちの世界"と感じられる場面では、LGB同士のやり取りがなされる。異性愛であることが前提となっていた"あっちの世界"とは逆に、お互いにLGBであることが前提とされたコミュニケーションがおこなわれる。典型的な場面としては、LGBである友人と会う経験、LGBサークルでの活動の中での経験や、新宿二丁目などのゲイタウンでの経験などが見られた。」(前掲書、p.76)

Lさんのいう【2つの世界】とは、石丸のいう「あっちの世界」と「こっちの世界」を意味していることは一目瞭然であり、【2つの仮面】とは、言わずもがな、「あっちの世界」でつけ

る仮面と「こっちの世界」でつける仮面のことである。石丸(前掲書, p. 80)は、「こっちの世界」について、「"あっちの世界"では言えないようなことや表現できなかった感情を、存分に表現して共有する時には、強い連帯感を生み出しやすいのだろう」と記述しているが、DさんやNさんも同様のことを書いている。

●Dさん:

【この問題を共有することのできる仲間を たくさん作れたおかげで, 孤独ではないと 実感できる】

●Nさん:

【私が○○に入団した時、周囲がすべてGであり、何の気兼ねもなく皆当然のようにGとしての会話をしている中に入り、非常に救われた記憶がある。その頃まで私はGが集まるような場所やお店、サウナなどには一切近づかなかったので、余計そうであった。】

同性愛者の人たちが行う「あっちの世界」でつける仮面と「こっちの世界」でつける仮面のつけかえで類推されるのが、土居健郎の「オモテ」と「ウラ」論である。石丸の「あっちの世界」が土居の「オモテ」の世界であり、「こっちの世界」が「ウラ」の世界となろう。土居は述べる。

「日本人は日常絶えずこのオモテとウラの二本立てで社会生活を営んでいる。何がオモテになり、何がウラになるかは、場合々々によって変るし、時によってオモテがウラになり、ウラがオモテになることもあるが、しかしオモテとウラの区別をつけることだけは変らない。」(土居健郎、1976、p. 2)

同性愛者の人たちにとっては,「オモテとウラの二本立てで社会生活を営んでいる」ことは,まさしく日常茶飯事なのである。

さらに、「オモテ」は「あっちの世界」、すな わち異性愛者の世界であるため、同性愛者の人 たちは〈正体が知れる不安〉にさらされること になる。「ウラ」は「こっちの世界」、すなわち同性愛者の世界になるのだが、〈異質である不安〉を解消するということは、「ウラ」の世界、すなわち同性愛者の世界の住人になることでもあり、【2つの世界】を生きることになる。そして、以下で論ずるように、カミング・アウトをする範囲を拡大していくことは、同性愛者の人たちにとって、【2つの世界】、すなわち「あっちの世界」と「こっちの世界」、もしくは「オモテ」の世界と「ウラ」の世界を1つの世界に統一していくことになるのであろう。

3. 性的指向性の受容と性的アイデンティ ティの確立にむけて

Vの2において、〈異質の不安〉や〈正体が知れる不安〉と、それに付随する〈振り子の状態〉や〈実験的行動〉、および〈男らしくない男の症候群〉についてその詳細を述べ、「異性愛者的役割葛藤」をかかえることの心労や辛労にふれることで、同性愛者の人たちのかかえる困難や混乱、困惑、葛藤、そして生きづらさなどについて詳説してきた。

これから、同性愛者の人たちが、このような 困難や混乱、困惑、葛藤、そして生きづらさな どにどうやって対処し、解決し、克服していく のかその過程を解説し、そして、そこに、性的 指向性を受容するにあたり、段階が存在すると いうことをあきらかにしていきたい。

i. 性的指向性の<仮の受容>の段階

Vの1において、同性に対して性的な魅力や 興奮を感ずるようになる段階を<性への目覚め> の段階としたが、ここで、<性への目覚め>の 次の段階を考えてみたい。

異性愛が当然とされる異性愛中心主義の社会において、自分が同性に性的な興奮を感じるということは、社会の主流からはずれることになるし、異性愛中心主義の社会を生きていくためには、そのことを秘密にしておかねばならない。すると、〈異質である不安〉しろ〈正体が知れる不安〉しろ、このような状況に追いこま

れるのは、その人が、「自分の性的指向性は異性ではなく同性に向いているのだ」と、ひとまず「自覚」しているからこそではないだろうか。このように、自分の性的指向性が同性に向いているということを、ひとまず「自覚」する状況へと追い込まれる段階を、性的指向性の<仮の受容>の段階とする。この<仮の受容>の段階をひとまず踏んだことにより、その人は、<異質である不安>や<正体が知れる不安>におそわれるのだろうし、「異性愛者的役割葛藤」を演じなければならないことになるのだろう。

イサイは、次のように記述している。

「計画されていない. 予期しないできごとに 対処しなければならない必要性がでてきたと きに、潜在的な対処能力があらわれてくるこ とは、よく起こることである。このことはい つも、同性愛者である青年たちが自己認識す るときに起こる。彼らは、偏見をもった社会 のなかで、みずからのセクシュアリティを表 現する方法を見つけ出さねばならないし、異 性愛者である仲間たちとうまくやっていく方 法を見つけ出さねばならない。彼らは、仲間 たちばかりでなく、血のつながった家族と自 分とがちがっていることについて考え始め る。自分の将来や、なすべき選択についての さまざまな疑問が、彼らの頭の中に浮かんで くる。そこには、平凡な生活を送って、自分 自身の家族をもって、というかつて描いてい た未来図を棄て去らなければならない可能性 も含まれている。」(前掲書, pp. 82-83)

イサイの述べるように、同性愛者の人たちが、自分の性的指向性は異性ではなく同性に向いていると「自覚」したときには、すなわち、性的指向性の〈仮の受容〉の段階に進んだあかつきには、未来において異性愛者として生きる道は絶たれるのかもしれないという、かすかな予感をいだくのかもしれない。そしてそれは、将来的には、「同性愛者の星の下に生まれてしまったのだから、しかたがないというあきらめの気持ち」にもつながるのかもしれない。

ii. 性的指向性の<真の受容>に向けて

今、性的指向性の受容には、〈仮の受容〉の 段階があるとしたが、〈仮の受容〉が存在する ということは、論理的に考えるならば、〈真の 受容〉の段階も存在するということになる。そ こで次に、この〈真の受容〉に向けて、同性愛 者の人たちが、一般的にどのような過程をふん でいくのかを考えてみたい。

(1) <否定的自己感>から<肯定的自己感>へ

同性愛の人たちは、異性愛が当然とされる異性愛中心主義の社会を生きていくうえで、生きづらさを感じ、Dさん・Fさん・Jさん・Lさん・Mさんのように、同性愛者である自分がいやになり、自己嫌悪感をいだく人もいる。この自己嫌悪感のことを、本稿では、<否定的自己感>とよぶことにし、その対義語に、<肯定的自己感>をあてることにする。

●Dさん:

【いやになったことはある。高校時代は、 その抑うつのピークの時期だったと思う。 自分で自分の性を一番嫌っていたころだっ たと思う】

●Fさん:

【若いころには何度もあった。】 【打ち明けられないし, 男同士の会話に参 加できないとき。】

■Jさん:

【自分の指向性を社会から認められていない,排除されているもの,差別の対象と感じていたのでいやでした。】

■Lさん:

【むかしは嫌で消えてしまいたいとよく 思っていた。】

●M さん:

【同性愛者である自分を嫌だと思うことは ありました。】

【自分自身のためと言うよりは,「親を安心させてあげたい」「孫をみせてあげた方がよいのでは」という考えから来ていました】

このように、たいていの同性愛者の人たちは、「自分は変じゃないか」「自分は他人とはちがっている」という〈異質である不安〉によって、あるいは、Mさんのように、「孫の顔を見せてあげられない」ことからくる親に対する罪悪感によって、みずからの存在価値がゆらぎ、その結果、〈否定的自己感〉をいだくのである。だが、そのうち、このような閉塞した状態からなんとかして抜け出したいと望むようになる。そして、この混乱の状態から解放されるための行動をおこすことになる。

トロイデンは、「いったん同性愛アイデン ティティを採用した. レズビアンの女性たちや ゲイの男性たちは、同性愛という烙印の問題と その取扱い・処理の問題に直面する。アイデン ティティの引き受けの段階にいるあいだは、い くつかある烙印回避の戦略のうちの1つを採用 するだろう」(Troiden, R. R., 1989, p. 41) と 述べており、その戦略の例として、 <降伏 (Capitulation) > と < 劇化 (Minstrelization) > . <パッシング (Passing) >. および<連帯 (Group Alignment) >の4つをあげている。⁶⁾⁷⁾⁸⁾ このうち、<パッシング>の戦略がもっともよ く採用され、<連帯>も同性愛の初心者にはよ く採用される戦略だと指摘している。また. ト ロイデンは、「<連帯>は、同性愛の初心者に よってよく採用される。所属をとおして烙印か ら逃れようとする同性愛の男性たちや女性たち は、同性愛のコミュニティーに積極的に参加す るようになる。似たような境遇にある他の人た ちの世界に"所属している"と認識することは、 烙印の苦痛を和らげてくれるのだ | (前掲書. p. 62) とも述べている。

ロツァーノ-ヴェルドゥツコも,「同性愛の欲求を社会化することは、同性愛者の男性たちが孤独や悲哀,そして罪悪の感情を消散させるための1つの方法であり、彼らが社会のなかで自分自身であると名のることのできるコミュニティや象徴的な空間を捜し求めるための1つの方法なのである」(前掲書, p. 28)と、同様のことを述べている。

筆者の研究においても、前に述べたように、 <パッシング>の戦略は、ほとんどの同性愛者 の人たちが採用していたし、<連帯>の戦略の 採用も、Aさん・Bさん・Iさん・Lさん・Mさ んのように、多くの人たちに認められる。

●A さん:

【コミュニティーも会社以外はほぼ同性愛 関係である】

■Bさん:

【最初は、インターネットでこちらの世界 のことを知り、同性愛者が普通に世の中に は沢山いるんだと知ったので、入りやす かった気がします。】

●Iさん:

【中学時代にビアンの友達が居て、その子がやりたいことをやりたい通りにやっていたので、「あ、自分もこれでいいんだ!」とおもった】

●Lさん:

【同じ仲間を探して苦しさを共有する, 気 兼ねない関係を探す。】

【一番の関心は、誰か気持ちを共有できる人はいないか?ということで、いわゆる出会い系の写真付きネット掲示板をみて、同年代で気があいそうな人と会うことを始めました。】

●Mさん:

【ずっと同性愛者として過ごしてきて,同 じ同性愛者の友だちも出来たし,いいこと もたくさんあった】

このように、同性愛者の人たちにとって、自 分と同じ境遇の人が他にもいるということや、 同じ仲間がいるということが、心の支えとな る。換言すれば、同じ性的指向性をもつ人間 が、自分以外にも実在していることを知ること で、同性愛者は稀有な存在ではないことがわか り、そのことが、性的指向性を受容するにあた り、ハードルを低くしてくれるのだといえよ う。そして、それは、<否定的自己感>から <肯定的自己感>へと変化するきっかけの1つとなる。ただし、<降伏>や<劇化>の戦略を採用した人は、今回の筆者の研究においては1人もいなかった。

ところで、なかには、Eさん・Gさん・Iさん・Kさん・Nさんのように、同性愛者である自分がいやにならなかった、すなわち、さほど<否定的自己感>をいだかなかった人たちも存在する。

●E さん:

【ほとんどない。】

●Gさん:

【同性愛者であるからという理由で自分の ことをいやになったことは、ありません。】

●I さん:

[NO]

●Kさん:

【ない。】

●Nさん:

【ない。】

その理由として、Eさん・Gさん・Iさん・K さん・Nさんが書いていることとしては、以下のとおりである。

●E さん:

【日常生活で大きな困り感がなかったのと、 それなりに周囲と調和しながら楽しく生活 してきたから。】

【自分がゲイであるかどうかの前に,一社会人として仕事を頑張った。仕事で認められたかった。】

【社会人として仕事をしているうちに、ありのままの自分でよいと思った。親、兄弟、同僚、友達とのかかわりの中で、ゲイである自分を受け入れた方が、人生が豊かで楽しくなると思ったから。】

●Gさん:

【実家がお寺で仏教的な考え方が身についていたせいでしょうか、この世に生まれて

きた以上は何か役割があるはずと思ったからです。何か意味があってゲイとしてこの世に生を受けたのだろうと思ったので自分のことをいやにはなりませんでした。

【『仏説阿弥陀経』というお経の中に出てくる一節「青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光」という言葉があります。これは極楽の池に生えている蓮のことを描写している言葉ですが、青い蓮は青い光、黄色い蓮は黄色い光、赤い蓮は赤い光、白い蓮は白い光を放っている、それぞれが自分の色で咲き、自分色で光っている、という意味なのです。この言葉の意味を知った時、ああ、自分は自分色で光っていいんだと思えるようになったのだと思います。】

■I さん:

【ビアンの子がいたのであたし一人が変なわけじゃない】

●Kさん:

【自分は自分だと思うから。】

■Nさん:

【仕方ないと思っていた。】

【あるがままの自分を受け入れるしかないのではないか。】

【そうである自分がいた。】

【そうなのだから仕方ない。それが自分である。】

EさんやIさんは、物事や事態を肯定的に捉えようとする<前向き思考>によって、<異質である不安>をはじめとする閉塞状態を打開し、性的指向性の受容にともなう苦悩や葛藤を解決したともいえる。Gさんは、仏教の教えによって、Nさんは、【そうである自分がいた。】【そうなのだから仕方ない。それが自分である。】というふうに、実存主義的な思考方法によって解決したといえる。そこで、GさんやNさんのような思考方法を、ここでは<哲学的な・スピリチュアルな思考>と定める。他にも、<前向き思考>によって解決しようとした人には、AさんやBさんがおり、<哲学的な・スピ

リチュアルな思考>によって解決しようとした 人には、Dさんがいる。

●A さん:

【ネガティブよりはポジティブに受け入れていきましたね。】

●Bさん:

【有りのままの自分を受け入れ、そういう 自分と共存しながら、幸せに生きて行きた いと考えたから。】

●Dさん:

【人間みなそれぞれその人の悩みを抱えて生きていくものであって、それが何であれ、恨むものでもなければ、僻むものでもない、という一種の宗教的な境地が見えてきた】

【よくこんなに深く人生を見つめる課題を いただけたものだと一種感謝に似た感慨も 湧いてくる。】

ところで、①〈前向き思考〉、②〈哲学的な・スピリチュアルな思考〉、という2つの方法以外に、もう一つ別の方法があるように思われる。それは、③〈周囲の人たちの友好的な・寛容的な環境の作用〉である。この③が、Eさん・Fさん・Iさんのように、混乱を解決するにあたり促進的に作用することがある。

●E さん:

【相手が非常に肯定的にカミング・アウトを受け入れてくれて, それが大きな自信になったから。】

●Fさん:

【ゲイの色々な素晴らしい人や生き方を 知ったこと。】

【素晴らしい友人やパートナーに出会えたから。】

【パートナーと一緒に所属するテニスクラブでは夫婦以上に一緒に行動しているので、殆どの方々が我々がゲイであることを感じていると想像しますが至って好意的です。】

■Iさん:

【「○○はそのままでイイよ」とも友達に言われたのもあるかもしれないです。】

この③の<周囲の人たちの友好的な・寛容的な環境の作用>は、さきほどの<連帯>とはやや似ているが、本質的に異なるものである。<連帯>は、自分と似たような境遇にいる他の同性愛者の人たちとの出会いを求めるのに対し、③の<周囲の人たちの友好的な・寛容的な環境の作用>のほうは、周囲の人たちは、そのほとんどが異性愛者の人たちであるという環境にあっての友好的な・寛容的な待遇である。9)

こうして、男性の同性愛者の人たちの心のなかで支配的だった〈否定的自己感〉は、〈肯定的自己感〉へと、時間をかけながらゆっくり変化していくのである。

(2) 性的指向性の<真の受容>の段階

ここで、注目に値するのが、さきほどのBさん・Eさん・Gさん・Nさんにみられる【有りのままの自分】【自分は自分色で光っていいんだ】【あるがままの自分】という表現である。これと類似した表現は、他の研究協力者の人たちにもみられる。

●A さん:

【同性愛者の自分が本当の自分であると 思っている】

【それが自然だと考えている】

■Iさん:

【自分は自分なんだからとひらきなおり】

●Lさん:

【このままの自分でもいいんだって思えた】 【本来, 人間はあるがままの自分でいたい とおもうものではないでしょうか。】

このような、「ありのままの自分」「あるがままの自分」「本当の自分」「自然な自分」といった表現を、ここでは<素(す)の自分>とよぶことにする。

さらに、これらの表現の背景には、Nさんが、 【仕方ないと思っていた。】【あるがままの自分 を受け入れるしかないのではないか。」と書い ているように、「同性愛者の星の下に生まれて しまったのだから、しかたがない・どうしよう もないというあきらめの気持ちしや「同性愛者 として誕生してしまったのだから、それを運命 として受け入れなければならないのだというあ きらめの境地 | といった心情があるようだ。同 性愛者の人たちのほとんどが. 「しかたがない」 「どうしようもない」という「あきらめの気持ち」 を抱くにちがいない。この「あきらめ気持ち」 や「あきらめの境地 | を<諦念(ていねん) > 「物事の道理を悟って諦める心をさし、主とし て文章に用いられる硬い漢語 | (中村 明. 2010) として定義する。

また、<諦念>には、FさんやLさんのように、「しょせん、人生とは孤独なものである」「人間は独りぼっちなのだ」と感じて、自分自身に納得させる態度となってあらわれる場合もある。

●Fさん:

【ごく普通に結婚して家庭をもっている友 人達が決して幸せには見えなく, 結局人生 は一人なのだと感じた】

●Lさん:

【人は所詮孤独な存在なんだと言い聞かせる。】

<素(す)の自分>だけは、変えたくとも変えようがないという<諦念>が存在するのである。このことは、Aさん・Eさん・Iさん・Jさんの次のような表現からも読み取ることができる。

●A さん:

【正直,「だってしょうがないじゃない」と 思ってますから。(笑)】

●E さん:

【受け入れようと思って受け入れたわけではなく, 受け入れざるを得ないと思った】

●Iさん:

【自分は自分なんだから、変えることができないから。変えようと思って変えれるものでも無いし。と思っているので。】

■Jさん:

【積極的に受け入れようと言う意識はありませんでした。始めから仕方ない事と言う意識だったと思います。しかし受け入れたいとする無意識はあったように思います。】

そして、みずからの性的指向性の<真の受容>の段階とは、<素(す)の自分>でいいのだと思えるようになることなのである。このとき、「自分は同性愛者である」という性的アイデンティティが確立されたといえよう。10)

このように、<否定的自己感>から、自分はこのままの自分でよいのだという<肯定的自己感>への変化が基盤となり、<素(す)の自分>だけは変えようがないではないかという<諦念>を土台にして、<素(す)の自分>でいいのだと思えるようになることが、性的指向性の<真の受容>ということになる。

(3) 同性愛と医療機関・カウンセリング

ルベイによると、「同性愛に取り組んでいた アメリカの精神分析医たちはまったく中立では なかった | という。

「四〇年代,五〇年代のアメリカでは同性愛の社会的受容はどん底に達していた。ゲイ男性自身も,その家族も,社会も強く同性愛を排除したいと考えていた。したがって,精神科医がゲイ男性の性的指向を変えようとするのには,強い動機があったのである。」(前掲書, p. 73)

マーチン・デュバーマン(Martin Duberman) という歴史家・教育者は、1950年代から60年 代にかけて、東海岸の3人の精神分析医 (Weintraupt医師とIgen医師、およびKarl医師)を渡り歩いた経験を語っている。

「Weintraupt 医師は、最初から、Larry との関係を断つように私に忠告した。彼が警告するには、私がそうしないのであれば、セラピー

においてほんとうの進歩とよべるものは,すべて不可能になるであろうとのことだった。」 (Duberman, M., 2002, p. 33)

「Igen 医師は、ほんとうの不道徳行為という のは、私の同性愛についての真実をうっかり 口走ってしまうことだということを、私に確 かめさせた。―中略―「結局、同性愛は君に とっていずれ過去のものになると思うよ。い つまでもそれにこだわっていると可能性のあ る将来を棒に振ることになるからね。|30歳 を超えた私には、そのような希望的観測は、 ますます空想的に思えた。だが、私は彼のこ とを信じたかったのだ。| (前掲書. p. 59) 「私は2年近くもセラピーに通い続けた。Karl 医師は、私にそのことを思い出させた。これ まで彼は、私の性的指向の問題をわざと成り 行きにまかせてきたのだった。しかし、Karl 医師は、彼が集団療法のときにしゃべったこ とを本気で言っていたのだ。これから同性愛 についての話題は禁止とする。もし、私がい まだに「行動化」しなければならない必要が あるのならば、彼には私を止めることなどで きない。しかし、彼は、集団療法のときに、 私が自分の同性愛行動について話すことに よって、第二の興奮を得ることがないように 防ぐことはできる。もし、私がこの新しい合 意が気に入らなのであれば、私は自由にセラ ピーをやめることができる。選択権はこの私 にあるのだ。Karl 医師は、このことを明確に したのだった。」(前掲書, p. 122)

以上のことからも、当時のアメリカにおいては、同性愛は忌むべきものであり、治療して排除しなければならないものであったが、その治療には、困難を極めたことがわかる。同様のことは、わが国日本にもあてはまる。たとえば、及川卓は、男性同性愛者の大学生A君に対して、約4年間、精神分析的心理療法を試み、現在も継続中(当時)の症例を報告している(及川、1982)。4年簡におよぶ心理療法をとおして、「A君の神経症症状は、ほとんど消失したといっていい」のだが、「同性愛傾向そのものが

消失,異性愛へと変化したというわけではない」と、彼は記述している。そして、A君の治療をふり返って、及川は、次のように述懐している。「同性愛を性的倒錯とみなす精神分析的立場に立つにせよ、こうした態度を強力に過度に主張することは、同性愛者の人格、あるいはそれまでに作りあげられた同性愛者アイデンティティーを完全に拒否・でしまうこととでなる。不必要に患者を同性愛者であることとになる。これは多かれ少なかれ同性愛者を治療する際に直面しなければならない問題である。一中略一科学的・中立的態度を保持することが望ましいように考える。」(前掲書、p. 148)

ここまでの彼の記述から、この書籍が出版さ れた1980年代前半において、同性愛は治療す べきもの、治療することができるものという考 えが心理療法家のなかにあったのだろうと推測 できる。これが、当時の精神分析理論や心理療 法論の限界であったのだろう。だが、筆者は、 及川のいう「科学的・中立的態度を保持するこ と」よりも、同性愛者であることからくる患者 の苦しみや悩み、混乱や葛藤、そして孤独感な ど、異性愛者中心主義の社会での生きづらさに 共感し、患者が同性愛者である自分とどう向き あい、どう生きていくのかを話し合っていくの が正しい方向性のように思われる。Eさん・F さん・Lさんが書いているように、同性愛者の 人たちが、同性愛者ならではの人生の意味を発 見していくのを援助することこそが、カウンセ リングや心理療法の果たす役割なのではないだ ろうか。

●E さん:

【人生の豊かさや楽しさは、性別で決まらないと思った】

【どんな境遇で生まれても, 自らの人生は 自らで開拓していくしかない】

●Fさん:

【セクシュアリティがどうであれ、全ては

その人の人間性が左右し、それこそが大切 だと信じます。】

●Lさん:

【どんな相手でも、大事な事に嘘をつくのは人間関係を築く上で失礼だなっておもうようになりました。】

1973年に、アメリカ精神医学会は、『DSM-III』から、同性愛を疾患からはずした。それに もかかわらず、同性愛者に対する差別や偏見は 今日まで残っている。今回の筆者の研究におい て、そのことを如実に書いているのがJさんで ある。Jさんは実際にカウンセリングに出かけ ていくのだが、自分が同性愛者であることが告 げられずに帰ってきてしまう。ただし、Jさん は、同性愛者であるという自分の性的指向性を 治してもらおうとしてカウンセリングに行こう と考えたわけではなく、【世間と同質化せずに、 このまま傷をつけられ続けたくないと強く感じ たため】である。Jさんと同様に、DさんやL さんも実際にカウンセリングを受けに行ったの だが、Jさんと同様に、2人とも同性愛者であ るという自分の性的指向性を治してもらおうと してではない。

●Dさん:

【大学に入ってすぐに、性の問題で大学付属の相談所にカウンセリングを受けに行ったことがある。】

【カウンセラーが矯正, 矯正という方向に話を持っていこうとする意図が見えてきた時点で,「この人に相談してもこの人の望む生き方しか示してくれないだろう」と感じて、やめた。】

●Gさん:

【僕は「これではいけない」と思いつつも、「これは病気だ」と思ったことはなかったので、治療という観点はありませんでした。

■I さん:

【性別:○○と言う事が確立されていることと,男性を好きになることに違和感がな

かったため。】

■Jさん:

【私には、他者との関わり合いの中でのチグハグがありました。いわゆる"世間"と言うものに、Gに対する蔑視・差別があったことが"いやで仕方なかった"原因です。】 【こころの問題を解決してくれるとの宣伝をしている所へ行ったことがあります。しかし、勇気が足りなかったので、本当の事が言えずに帰ってきました。結果、どうもなりませんでした。】

●Lさん:

【同性愛自体を治療しようとおもってということはありませんが、大学生のときに、人間関係の築けなさ、いつも孤独な気分で、大学のカウンセリングに1度いったことがある。】

今回の研究協力者の人たちは、Dさん・Gさん・Iさん・Jさん・Lさんのように、同性愛者である自分を病気であるとは思っていない。このあたりは、1940年代から60年代のアメリカにおける同性愛に関する思潮や、及川の症例とは様相を異にする。

むしろ、FさんやNさんのように、これがほんとうの自分、すなわち<素(す)の自分>なのだから、治すまでもないとう気持ちがあるようだ。

●Fさん:

【自由な生き方を生きる道を選んだから。】

●Nさん:

【自分は生まれついてそれなりの嗜好やフェチを持っており、自然とそういう自分を受け入れていたように思う。従って極端に自己嫌悪することもなければ医療機関などにという考えすら思いつかなかった。そうなんだから仕方ないと思っていた。】

iii. **〈正体が知れる不安〉から解放されること** 性的指向性の〈真の受容〉の段階をへて.

<異質である不安>が解消されたとしても、同 性愛者の人たちは、異性愛が当然とされる異性 愛中心主義の社会を生きていくうえで、 みずか らの性的指向性を周囲の人たちには秘密にし て、隠しておかねばならず、そのためには、異 性愛者を装わなければならない。そこには. 「自分が同性愛者だとばれたらどうしよう|「こ れまできずいてきた人間関係が崩れてしまうか もしれないしなどといった恐怖心が常につきま とい、そして、「自分が同性愛者であることを 知られないようにしなければ」という<正体が 知れる不安>にかられてしまう。しかし、いつ までもハラハラ・ドキドキしているわけにもい かず、なんとか打開策を講じねばならなくなる。 これから、同性愛者の人たちが、この<正体 が知れる不安>をどのようにして取り除いてい くのかを述べていく。

(1) カミング・アウトをすること

このような状況を打開するためには、Dさん・Eさん・Gさん・Mさんのように、周囲の人たちにみずからの性的指向性を打ち明けるしかないだろう。すなわち、カミング・アウトをするしか、他に選択肢はないだろう。

●Dさん:

【生まれて初めて、親身になっていろいろなことを話してくれる大学の先輩にカミング・アウトしたこと。当時は、情報のまったくない時代で、独りで判断する結果の見えない非常に勇気のいる行動だったが、とてもいい人だったので、私の心情を受け止めてもらうことができた。】

●E さん:

【周囲に対してカミング・アウトをすること, 自分のありのままを受け入れることで解決した。】

●Gさん:

【実家がお寺で、将来僧侶になってお寺を継ぐことを期待されていたので、僧侶にならない、お寺も継がない、東京に出たい、

ということを打ち明ける時に、どうしても 自分がゲイであることを言わなければ説得 できないと思ったからです。】

●Mさん:

【家族とその身近な人たちにはカミング・アウトしています。会社ではしていません。】

ところが, カミング・アウトをすることは, 同性愛者の人たちにとって, 一筋縄では行かない問題なのである。

たとえば、2015年の夏に、一橋大学のロースクールに通っていたAくんが苦悩の末、校舎6階から落ちて亡くなるという悲劇がおこった。最高に信頼していて、カミング・アウトをし、そして好きだと告げた同級生Zくんに「あいつはゲイだ」とLINEで言いふらされたことが原因だった。¹¹⁾

ジョゼリト・エレーニョ (Joselito R. Ereño) は、次のように述べている。

「また、同性愛の青年たちは、ジェンダーの指向性にもとづいて自分たちのことを判断することはないだろうと思われる人々にみずからの性的指向性を打ち明ける。この理由から、同性愛の青年たちのなかには、学校ではカミング・アウトしたほうがよいと思うのである。この研究でわかったこととして、このような同性愛の青年たちは、学校において、強い"仲間に対する愛着"をもっていると感じている。それは、友人らにみずからの性的指向性を打ち明けることで安らぎをえるからである。」(Ereño, J. R., 2014, p. 116)

Aくんも、学校においてもっとも信頼することのできる好きなZくんにみずからの性的指向性を打ち明けたのである。ところが、その気持ちをZくんによって無惨にも踏みにじられてしまったのだった。

筆者の研究においても、研究協力者のほとん ど人たちが、カミング・アウトの問題に悩んで きた。

●A さん:

【一部分にはしている。】

●Bさん:

【周りで、カミング・アウトをして後悔してる友人もいる】

●Fさん:

【数人の友人にカムアウトして受け入れられたが、実弟には大きな障害となった。】 【多分ゲイに関して嫌悪感をもっていた弟にはその後理解しあうことはありませんが、友人達とは更に深い人間関係を維持しています。】

●I さん:

【家族以外にはカミング・アウトしてます。】

●Jさん:

【友人の一部のみにした事があります。】

●Kさん:

【していない。】

【好きな人に告白する形で知られたり、その人と共通の友人に相談する形で話したことはある。】

●Lさん:

【人による。家族にはしていない。】

●Nさん:

【現在に至るまでカミング・アウトはして いない。】

12人の研究協力者の人たちのなかで、どの人にも対してもカミング・アウトをしているという人は、EさんとGさんくらいであろう。他の人たちは、カミング・アウトをする相手を選んでいる。このことを<選択的カミング・アウト>とよぶことにしたい。

ここで重要なことは、性的指向性の<真の受容>に至ることができたからとって、その人が、だれにでもカミング・アウトをするというわけではけっしてないということだ。ただし、その逆はありえないだろう。すなわち、みずからの性的指向性の<真の受容>なしには、カミング・アウトはありえないのだ。

<選択的カミング・アウト>をする基準というものが、それぞれの人たちにあるようだ。殊

に、Jさんは、試しにカミング・アウトしてみるということを行っている。

●Jさん:

【私は、Gについて知識の無い人にカミング・アウトする時は私の人となりをよく知っている人に対してするのがスムーズなのかなと思った訳です。今はLGBT関連書籍などの武器も多いので、聞く耳と考える頭があれば更にいいかなとも考えました。】 【カミング・アウトする場合、人の話を聞く耳と理解しようとする頭がある相手でないと面倒臭い事になると考えるからです。】 【カミング・アウトしたい気持ちで少しだけ実験した事がありました。始めは後腐りないように成人学級の人にカミング・アウトしてみましたが、手応えが悪いでした。】

●Lさん:

【相手に偏見がないであろうということがなんとなくわかり、結婚の話やどんな女性がタイプという話題がふられたりしたときに、きっかけとして言おうと思っています。】

Vの2のiiiにおいて、ほんとうに同性愛者なのかどうか、みずからの性的指向性を試してみるという確認の行動や、性的指向性をみずから変えようとする行動を〈実験的行動〉として定義したが、ここで、カミング・アウトをしても大丈夫かどうか安全かどうかを確認するために1回試してみるという確認の行動も〈実験的行動〉に含ませることにする。

(2) 家族にカミング・アウトをすることの 特殊性

ところで、Iさん・Jさん・Lさんのように、親しい友人にはカミング・アウトをしたり、Kさんのように、必要最低限の範囲内でカミング・アウトをしたりしているものの、親をはじめとする家族にはカミング・アウトをしていないという人たちが存在する。

エレーニョ (前掲書) が、この問題を取り上

げており、フィリピン人の同性愛の青年たち は、学校ではカミング・アウトをしているのに、 家庭ではカミング・アウトをしていない、その 理由を調査・研究している。そして、フィリピ ン人の同性愛の青年たちが家族にカミング・ア ウトすることができない理由として、3つをあ げている。1つめは、家族、とりわけ両親の「高 い期待(High Expectations)」である。そこには、 男性にしろ女性にしろ、同じ性の人とではなく 反対の性の人と関係をもつべきであるという社 会の信念が影響しており、この基準に従わない のは、その人物のイメージおよび両親の育て方 が反映しているためであると信じられていたと いう。2つめは、家族から「拒絶されることへ の恐怖 (Fear of Rejection)」である。これは、 同性愛者という自分の本当のアイデンティティ を明かすやいなや、自分に対する家族の待遇が 変わってしまうのではないか. さらにはカミン グ・アウトをしたことを否定され、 反発されて しまうのではないかという不安な気持ちであ る。フィリピン人の同性愛の青年たちは、両親 の「高い期待」ゆえに、「拒絶されることへの 恐怖」を感じるのだという。自分たちの存在が 両親を失望させるおおもとになるのではないか と恐れ、自分たちのセクシュアリティが家族に 恥辱と不名誉をもたらすのではないかと思うか らである。そして、3つめが、「混乱の感情 (Feelings of Confusion)」である。これは、フィ リピン人の同性愛の青年たち自身が、将来にお いて自分たちがどうしたいのか、すなわち、同 性愛者のままでいたいのか、あるいは異性愛者 になりたいのか、そのことについて半信半疑の 気持ちがあるからだという。

家庭ではカミング・アウトをしていないのに、 学校ではカミング・アウトをしていることについて、エレーニョ(前掲書)は、やはり3つの理由をあげている。1つめは、仲間たちの親密さや同性愛に対する開かれた心から生ずる「仲間に対する愛着(Peer Attachment)」である。2つめは、「受け入れてもらえたという感情(Feelings of Acceptance)」である。この感情が、 自己疎外や家族からの拒絶を遠ざけてくれるのである。そして、3つめが、「本当の自分でいられること (Being True to One's Self)」である。 抑圧された感情を仲間たちには表現することができるからだ。だが、このことは家庭ではできない。

家族に対して同性愛者というみずからの本当のアイデンティティを隠そうとすればするほど、友人たちには心を開こうと思うのである。それは、相手の反応を心配せずに本当の自分で表現することができからであり、そのようなことは家族のまえではできないからである。そして、この根柢には、社会的な相互依存性というフィリピン人の国民性があるようだ。

筆者の研究においても、エレーニョの研究結果と同様のことが認められた。

●Gさん:

【カミング・アウトする時,両親や兄がどういう態度を取るか非常に恐ろしく,不安でした。】

●Iさん:

【歩くカミング・アウトな私ですが、家族 も多分気づいているとは思うのですが恥ず かしいというか、友達以上に嫌われたら怖 いっていう気持ちがあるので。】

■Jさん:

【カミング・アウトしたい気持ちと、した後に色メガネで見られるのではないか、親ならがっかりさせるのではないかとの気持ちの両方がありなかなか出来ません。】

●Kさん:

【家族は社会的規範や常識を重んずる人なので、理解されないと思う。友人も、自分が性愛の対象だと思って離れていく気がする。職場は(すでに退職しているが)自由な雰囲気ではなかった。】

●Lさん:

【もう長年築き上げられた関係を今更わざ わざ言ってまで変えたくないからという感 じです。】 【母親が生きていれば言おうと思っていたけど、死んでしまったし、お父さんもお兄ちゃんも、深い家族関係からは距離あるし、多様性とか受け入れる柔軟性に乏しい感じなので、わざわざ言ってまで…という感じですね。】

それでは、家族に対して、カミング・アウト をした場合には、どのようなことになるのだろ うか。

Aさん・Dさん・Gさんのように、家族に対して、実際にカミング・アウトをした人たちも、すぐには家族に受け入れてもらえないようだ。そこで、もし兄弟姉妹がいる場合や、親しくしている親戚がいる場合には、まずそちらにカミング・アウトをし、手ごたえを感じてから、次に、親にカミング・アウトをするという段取りをとるようだ。

●A さん:

【母親が財布から情報を抜き取っていた(実際に彼の名字を言ってきた)り、「好きなら学費くらい言えば出してくれるよな」とか言い出してきたり、まあ、強烈なのは「育て方を間違えた」と言われたコトですね。その後、友人たちと出かけて友人宅に泊まらせてもらった時も、「本当かね」と疑いだし、友人に電話を代わったりとか、変にギクシャクしました】

●Dさん:

【兄にまずしたのですが、その時の返事は「やっぱり」でした。(笑) 私は兄弟の仲がいい方なので、これはきっと受け入れてもらえると思っていました。両親にしたのはそのずっと後ですが、母親は意外に「あら、そう、いろいろあるんじゃない」とすんなり受け入れました。が、父親はまずいったん、話をした次の朝に「昨日のことは聞かなかったことにしよう」と言われました。その時はそのままにしましたが、のちに手紙のやり取りをする際に、流れでこのこと

に言及する段になり、 今回は顔を見せない 分互いに辛辣な内容をつきつけるように なって. 一旦は文面上で勘当するかという 言葉も出ました。その後も根気強く自分の 思いを伝え続けたところ、 最終的には父親 も受け入れてくれるようになりました。そ の後の反応でいうと、実は父親の方が真摯 に理解してくれていたようです。父は. 「自分は親戚にどう伝えればいいのか?」 ということで悩んでくれたりしていました が、母親はその後も時折「あなたの孫も早 く見たいわね. | と無邪気に言って見せて. 父に睨まれたりしてました。私のパート ナーを「大切な友人」と紹介した時も父の 方から、まず、Dをよろしく、と言ってく れましたが、母はしばらく「本当にいいお 友達 | 扱いでした。受け入れ方もいろいろ です。今では二人とも深く理解してくれて いると思います。

●Gさん:

【カミング・アウトする時、両親や兄がどういう態度を取るか非常に恐ろしく、不安でした。まず別に暮らしていた兄に電話で打ち明けましたが、僧侶でもある兄は「何と言っていいか分からないが、お念仏だけは捨てるなよ」と言ってくれました。母はレズビアンの知り合いがいたので多分そんなにショックは受けないだろうと思っていましたが、父の反応が大変心配でした。しかし母はもちろん父も、しっかり受け止めてくれて、一緒に泣いてくれました。さずがに伊達に何年もお坊さんをやっていないなぁと、父のことを改めて尊敬しました。】

次に、BさんやLさんが次のように書いていることに注目したい。

■Bさん:

【カミング・アウトをされた受け手のことを考えると、必ずしも聞いて楽しい話ではなく、する側の自己満足のように思える】

■Lさん:

【家族なのに、大事なところがつながれない寂しさ。家族なのに、見えない透明な厚い板でふさがれている哀しさです。】

永易至文は、同性愛の子どもをもったことに 対する親の立場からの複雑な心境を綴ったもの を、手記というかたちで紹介している。ここ に、その一部を引用する。

「あのとき息子は、私に淡々と話をしました。 私は黙りこんでしまいました。理解できな い。そんなこと、ありえる理由がない。正直 言葉が見つかりませんでした。ただ、私の気 持ちが完全に崩れていったことを、今もはっ きりと覚えています。受け入れられない。私 の夢が消えた。平凡でいい、普通の息子で あってほしい。と同時に、息子がかわいそう でたまらなくなっていきました。私は孤独に 陥り、黙々とそのことばかりを考える日々に なっていきました。驚き、体裁、偏見、息子 に対する申し訳なさ。なにがそれほどまでに 私の心をしめつけるのか。私は思い切って姉 に相談してみました。「落ち着いて考えてみ て」と言われました。「なんでもないことよ。 みんな堂々と生きているじゃない。有名な作 家の人もそうでしょ。普通だよ。そんなこと で悩まないで。」そう言われても、一人、受 け入れられない私がいました。一中略一1年 が過ぎ、私はある電話相談をきっかけに、同 じ立場でありながらそんなことは普通のこと だよと言える人びとに巡りあえました。自分 のことなのに、本すらも買いに行くことがで きなかった私。本も送っていただきました。 5冊も読み、いろいろなことを知ることがで きました。今、同じ個性を持つ子どもさんの お母さん、当事者本人との交流会にまで出か けるようになり、そこでまたたくさんの勇 気,優しい気持ち,いろいろな体験談を聞か せていただきながら、この壁を乗り越えよう と自分なりに頑張っています。息子の告白に より大切なことをたくさん知ることができま

した。一人では生きられないこと。息子もきっと私の知らないところで私のようにいろいろな人たちに支えてもらいながら生きてきたに違いないということ。今の私は、支えてくださった皆さんに感謝することだけです。(ゲイの母 60代) | (永易、2014、p. 14)

カミング・アウトの問題は、カミング・アウトをする側にとっても、される側にとっても、超がつくほどの難問である。Lさんのように、【家族なのに、大事なところがつながれない寂しさ】や【家族なのに、見えない透明な厚い板でふさがれている哀しさ】を味わわないようにするには、家族に対しても、「あるがままの自分」すなわちく素(す)の自分>でいる必要があり、それには、家族にカミング・アウトとすることが一番の解決策となる。ところがその一方で、カミング・アウトをされることによってひき起こされる、家族(とりわけ両親)の側の失望や落胆、悲しみや怒りなどを慮ると、カミング・アウトをすることには、ためらいが生じるのである。

このように、カミング・アウトの問題は、常に同性愛者の人たちにつきまとう、直面せざるをえない問題である。とりわけ、あと継ぎの問題は、同性愛者の人たちにとって尽きない悩みであることは、BさんやGさんが次のように書いていることからもわかる。

●Bさん:

【嘘を付くのは良い気分はしませんが、カミング・アウトをして、ショックを受けさせるわけにはいかず、仕方ない、それで良いのだと思います。ただ、親に孫の顔を見せてあげられないのは申し訳なく思います。】

●Gさん:

【父は後継ぎがいなくて今でも現役で住職をやっており、とても申し訳なく思っています(兄は別の寺の住職をやっており、簡単には戻ってこられないようです)。悩みは尽きませんね。】

iv. カミング・アウトを超えて

ところで、Eさんのように、周囲の人たちに カミング・アウトをするという性的指向性の受 容段階から、さらに一歩前進して、次なる段階 として、性的指向性にこだわらない生き方を探 る段階に達している人もいるようだ。

●E さん:

【社会の中でよりよく生きていくためには、 性別やセクシャリティはそんなに関係ない と思ったから。】

【カミング・アウトをすることで、自分の ことを相手にたくさん語れるから。ゲイが 身近にいることを実感してほしいから。】

この段階では、Eさんにように、同性愛者はけっして稀有な存在なのではなく、身近かにいることをみんなに知ってもらいたいから、積極的にカミング・アウトをしていこうとする。自分が同性愛者であることを公表している芸能人や、地方議会の議員などは、この段階に達しているものと考えられる。¹²⁾

v. 日本人男性同性愛者の性的指向性の受容 過程に関する理論仮説

ここまでの議論を整理する。以下に記述するように、筆者の研究から導き出された、日本人男性の同性愛者の人たちの性的指向性の受容過程は6段階となる。

●第1段階:<性への目覚め>の段階

同性愛者の人たちが異性ではなく同性に性的魅力を感じるようになるのは、その時期の早い人で、幼児期からであり、遅い人で思春期においてであった。このうち、幼児期から同性に性的魅力を感じるようになる段階を<性への目覚め>の段階とした。そして、思春期から同性に性的魅力を感じるようになった人たちは、次の〈仮の受容〉の段階に含めることとする。なぜならば、そこには性に対するいわばあどけなさはもうすでになく、みずからの性的指向性について、ひとまず認めるのか、それとも認めない

のかの選択にすぐに迫られるからだ。ただし、 幼児期に自分が同性に性的魅力を感じた人で も、それを明確に同性愛として同定するには、 やはり思春期を待たねばならない。

●第2段階:性的指向性の<仮の受容>の段階 次に、思春期に入ると、同性愛者の人たち は、みずからの性的指向性に関して、「自分は どこかちがう」「自分は変じゃないか」という ふうに周囲との齟齬をきたしはじめ、自分の性 的指向性が異性ではなく同性に向いているとい うことを、ひとまず「自覚」する状況へと追い 込まれる。性的指向性の<仮の受容>の段階で あった。

●第3段階: <異質である不安>と<正体が知れる不安>を感じる段階

自分が異性にではなく同性に性的にひかれるということを「自覚」する〈仮の受容〉の段階に進むと、異性愛が当然とされる異性愛中心主義の社会においては、〈異質である不安〉を感じたり、〈正体が知れる不安〉におそわれたりして、それゆえに「異性愛者的役割葛藤」を演じなければならなくなる。さらに、〈男らしくない男の子症候群〉の同性愛者の人たちは、この「男っぽくない・男らしくない」ところが、そのまま「同性愛者(オカマ)である」と判別されることの悲しみや、自分が同性愛者であることが顕現してしまうのではないかという不安を感じる。

●第4段階:性的指向性の<真の受容>の段階 (<異質である不安>を解消する段階)

同性愛者の人たちは、〈異質である不安〉を解消するために、〈パッシング〉や〈連帯〉の戦略を採用する。同じ性的指向性をもつ人間が、自分以外にも実在していることを知ることで、同性愛者は稀有な存在ではないことがわかり、同性愛者の人たちは勇気づけられる。また、①〈前向き思考〉と、②〈哲学的な・スピリチュアルな思考〉、および③〈周囲の人たちの友好的な・寛容的な環境の作用〉によって、〈異質である不安〉をはじめとする閉塞状態を打開し、〈否定的自己感〉から〈肯定的自己感〉

へと変化する。そして、「あるがままの自分」すなわち〈素(す)の自分〉でいることのたいせつさを感じるようになる。それと同時に、同性愛者の人たちはみんな、「しかたがない」「どうしようもない」という「あきらめの気持ち」すなわち〈諦念〉をいだく。ここに、〈素(す)の自分〉だけは、変えたくとも変えようがないという〈諦念〉が存在することになる。みずからの性的指向性の〈真の受容〉の段階とは、〈素(す)の自分〉でいいのだと思えるようになることであるといってよい。

●第5段階: <選択的カミング・アウト>の段階(<正体が知れる不安>を除去する段階)

その次に、みずからの性的指向性を周囲の人 たちに打ち明けるという、カミング・アウトを 行う段階へと至る。これは、 <正体が知れる不 安>をできるかぎり除去しようとする行動で あった。そして、性的指向性の<真の受容>な くしては、カミング・アウトの問題は起こりえ ない。自分の性的アイデンティティが不安定な のに、そのことを、確実性をもって他人に告げ ることなどできないからである。ただし、この カミング・アウトの問題は、同性愛者の人たち をおおいに悩ませる。そのため、<選択的カミ ング・アウト>という方法が採用される。筆者 の研究では、ほとんどの協力者の人たちがこの 段階に留まっているものと考えられるし、ひい ては、ほとんどの同性愛者の人たちもこの段階 に留まっているものと推測される。

それから、同性愛者の人たちのなかには、ほんとうに同性愛者なのかどうか、みずからの性的指向性を試してみるという確認の行動や、性的指向性をみずから変えようとする行動、そして、カミング・アウトをしても大丈夫かどうか安全かどうかを確認するために1回試してみるという確認の行動をとったりする人たちもいることがわかったが、本研究ではこの行動を<実験的行動>として定義した。

●第6段階: <カミング・アウトの超越>の 段階

さらに一歩前進して、性的指向性にこだわらな

い生き方を探る段階に達している人もいる。この 段階にいる人は、同性愛者は身近かにいるとい うことをみんなに知ってもらいたいがために、 積極的にカミング・アウトをしていこうとする。

以上の理論仮説を図に表現したのが、31ページの図1である。また、12人の研究協力者の人たちのストーリー・ラインをもとに抽出されたさまざまな構成概念ごとに、どの構成概念にどれだけの人たちが該当するのかを分類し、整理したのが、 $32 \sim 33$ ページの表1である。

VI. 今後の課題

今回の研究は、日本人男性の同性愛者を対象とした研究であった。理論的飽和がおきたとはいいながらも、しかし、性的マイノリティの研究となると、男性の同性愛者(ゲイ)だけではなく、女性の同性愛者(レズビアン)、そして両性愛者(バイ・セクシュアル)の人たちをも含めなければ、より一般的な・精緻な理論を構築することはできない。この点において、筆者の研究は、男性の同性愛者(ゲイ)に対象をしばっているため、しかも、12名というごくわずかのデータを分析し、理論仮説を導き出した

注

- 1) SCATを用いての具体的な分析結果は、津野 (2016)の巻末の資料を参照していただきたい.
- 2) 小児性欲に関して、小此木啓吾は次のように述べている。

「フロイトは口愛欲求だけでなく,この口愛期に引き続いて小児の成長に伴ってあらわれてくる肛門愛,男根愛という三つの発達段階を区分し,これらを小児性欲と総称した.」(小此木啓吾,2002,p.230)

すなわち、小児性欲とは、厳密に定めるならば、フロイトでいうところの男根期までをさし、次の潜伏期は含まれないことになるが、本研究においては、潜伏期も小児性欲に含めることとする。このことは、小此木もまた、次のように述べていることからも、誤りではないことがわかる。

「フロイトはさらに、思春期のおける第二 次性徴のあらわれ、いわゆる「性の目ざめ」 ため、一般性・客観性に欠けるきらいがある。

また、キャスやトロイデン、あるいはエレーニョなど、海外で行われた研究と、今回の筆者による(日本で行われた)研究とを比較したところ、男性同性愛者の性的指向性の受容をめぐっては、共通点もあれば相違点もあった。たとえば、キャスやトロイデンの記述のなかには、〈諦念〉という概念は認められず、日本独自の現象であると思われる。また、カミング・アウトをするにあたり、家族にはそれがなかなか行えないという、エレーニョによって明らかにされたフィリピンの事情は、日本と場合とよく似ているとの印象をもつ。より一般的な・精緻な理論の構築をめざすには、日本国内ばかりでなく、海外の状況との比較研究も進めていかなければならないだろう。

謝辞

本論文は、東京国際大学大学院臨床心理学研究科博士課程(前期)の修士論文として執筆し、提出したものを、紀要への投稿用にコンパクトにまとめたものである。このような機会を与えてくださいました妙木浩之先生に衷心よりお礼を申し上げます。

をもってはじまる大人の性欲を性器性欲と呼んで、小児性欲と区別した。つまり小児性欲は、性器性欲以前(pre-genital)の性欲である。」(前掲書、p. 231)

- 3) ここでの【革新】は【確信】の誤り. Eさん も後に. そう訂正している.
- 4) ノンケとは、異性愛者のことを指す. 同性愛者から見て、同性愛の「ケ」(その気)がない人のことを示す隠語. 「非…」「不…」「無…」などを意味する接頭辞の「non」と、「(その)気」を合わせたものであり、「同性愛の気がない」→「non気」→「ノンケ」となった.
- 5) Mさんの場合は、さほど「異性愛者的役割葛藤」に悩まされることはなかったようだ。ただし、これは、周囲の環境が、「異性愛者的役割葛藤」を感じさせない環境であったことが幸いしたためであり、異性愛中心主義のより強い環境では、Mさんも「異性愛者的役割

葛藤 | に悩まされた.

●Mさん:

【同性愛者ということで、日常生活で困ったことはほとんどありません.】

【実家では、両親の仲があまり良くなかったこともあり、結婚についてとやかく言われることはありませんでした.】

【会社でも未婚の年上同僚も多く、上司ですら50代で独身だったので、結婚に関して口を出されることもなく、気楽に過ごせています】

【父方実家に住んで、子どもを設けて家を 継げ、と言われた】

したがって、Mさんの場合もけっして例外ではないといえる。

- 6) <降伏 (Capitulation) >とは、同性愛行動を 回避することである. しかしながら、同性愛 感情を抱きつつも、それを行動に移さないま までいることは、自己嫌悪感や絶望感を味わ うことにつながる.
- 7) <激化 (Minstrelization) > とは、自分自身の 真に属する集団からかけはなれている場面に おいて、軋轢を避けるために、大衆文化に よって彩られる線に沿って、つまりは大衆文 化に迎合するやりかたで、非常に型にはまっ た、ジェンダーには不適当なやりかたで、自 分自身を演じてみせるやりかたのことである。
- 8) <パッシング (Passing) > とは、異性愛者の ふりをすること・異性愛者を装うことを意味 する.この<パッシング>の戦略を用いると いうことは、すなわち、「異性愛者的役割葛 藤」を演じるということである.
- 9) Jさんの場合は、〈連帯〉の戦略を採用したことに加えて、特殊な方法で、みずからの性的指向性を受容していった。その特殊な方法とは、厚生労働省など国が進めるキャンペーンを知ったことである。これによって、Jさんは、同性愛者としてのみずからの存在感を得ることができた。とりわけ、【勤めていたエリア内の会社員達ほぼ全員(約100人)に私達は"エイズ!"と差別的な表現で呼ばれ】たJさんにとって、厚生労働省の進めるHIVエイズ感染予防に関する活動はとても心強かったのであろう。

■Jさん:

【付き合っていた彼からこう言われた時です.「自分を否定しちゃダメ. ありのままの自分を認めることが大事だと思うよ.」と. 彼とこの気持ちを共有することが出来たことにより, 私は精神的に非常に楽になりました, 人生観が変わった, 大きな脱皮をしたような記憶があります.】

【ある時、当時の厚生省(厚労省?)が行っているHIVエイズ感染予防に関する活動を知り、Gの存在がちゃんと社会に認められているものと知ったため、】

つまり、当時つきあっていたパートナーの励ましのことばによって、Jさんの「否定的自己感」は「肯定的自己感」へと1回目の変化をとげ、厚生労働省など国が進めるキャンペーンによって、2回目の変化をとげたわけである。

10) Iさんが、世間一般の男性・女性とは異なる 性区分を独自に設けることによって、性的指 向性の受容にともなう混乱を解決したこと は、めずらしい。

●I さん:

【性別:○○ みたいな感じだった】 【性別:○○ と言う事が確立されている】 ※○○には、Iさんの実名が入る。

もちろん、Iさんがみずからの性的アイデンティティを確立していくうえで、「自分の場合は、どう立ちむかえばよいのか、どのようにむきあったらよいのか」という葛藤や苦闘から、Iさんは独特の対処の方法として、世間一般の男性・女性とは異なる性区分を独自に設けたのだといえる。だが、その一方で、男性・女性とは異なる性区分にこだわるよりも、それを超越して、<素(す)の自分>でありたいと願う気持ちのほうが強く作用したために、男性・女性とは異なる性区分を独自に設けたのだともいえる。

- 11) みずから望んで同性愛者だと告白することを「カミング・アウト」ということは周知のとおりだが、その一方で、同性愛者だという秘密を他人にばらされることを「アウティング」という.
- 12) 石川大我さん(東京都豊島区議)や石坂わたるさん(東京都中野区議)、上川あやさん(東京都世田谷区議)といった人たちがいる。

文献

- Cass, V. C. (1979): "Homosexual Identity Formation: a Theoretical Model" *Journal of Homosexuality*, Vol. 4, No. 3, pp. 219–235.
- ----- (1984): "Homosexuality Identity Formation: Testing a Theoretical Model" Journal of Homosexuality, Vol. 20, No. 2, pp. 143-167.
- 土居健郎 (1976):「オモテとウラの精神病理」荻 野恒一編『分裂病の精神病理4』東京大学出 版会.
- Duberman, M. (2002): *Cures: A Gay Man's Odyssey*Westview Press, the United States of America.
- Ereño, J. R. (2014): "Playing it straight: A Phenomenological Study of Filipino Homosexual Adolescents who are "Closeted" at Home but are "Out" at School" *International Journal of Gender and Women's Studies*, Vol. 2, No. 1, pp. 105-119.
- Freud, A. (1965): Normality and Pathology in Childhood: Assessments of Development, The Hogarth Press, London. / 牧田清志・黒丸正四郎(監修), 黒丸正四郎・中野良平(訳)(1981): 「児童期の正常と異常」 『アンナ・フロイト著作集9』 岩崎学術出版社.
- Freud, S. (1905): "Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie" / 渡邉俊之(訳)(2009). 性 理論のための三篇『フロイト全集6』岩波書店.
- 日高庸晴 (2000): 「ゲイ・バイセクシュアル男性 の異性愛者的役割葛藤と精神的健康に関する 研究」 『思春期学』 Vol. 18, No. 3, pp. 264-272.
- (2006a):「第1回性的指向と異性愛者的 役割葛藤」『保健師ジャーナル』Vol. 62, No. 7, pp. 580-583.
- (2006b):「第2回生育歴と自殺未遂」『保 健師ジャーナル』Vol. 62, No.8, pp. 660-663.
- 日高庸晴・木村博和・市川誠一 (2007): 「男性同性間のHIV感染対策とその評価に関する研究」成果報告『厚生労働省科学研究費補助金エイズ対策研究推進事業――ゲイ・バイセクシュアル男性の健康レポート2』厚生労働省エイズ対策研究事業.
- 堀田香織 (1998):「男子大学生の同性愛アイデン ティティ形成」『学生相談研究』Vol. 19, No. 1, pp. 13-21.
- Isay, A. R. (1996): Becoming Gay Vintage Books, the United States of America.

- 石川大我 (2009):『ボクの彼氏はどこにいる?』 講談社文庫.
- 石丸径一郎(2008a):『同性愛者における他者から の拒絶受容――ダイアリー法と質問紙による マルチメソッド・アプローチ』ミネルヴァ書房.
- (2008b):「性の多様性モデル」『臨床心理学』Vol. 8, No. 3, pp. 336-340.
- 梶谷奈生 (2008):「女性同性愛者のセクシュアリティ受容に関する一考察」『心理臨床学研究』 Vol. 26, No.5, pp. 625-629.
- Levay, S. (1996): Queer Science: The Use and Abuse of Research into Homosexuality, MIT Press, the United States of America. / 伏見憲明(監訳), 玉野真路・岡田太郎(訳) (2002): 『クィア・サイエンス 同性愛をめぐる科学言説の変遷』勁草書房.
- Lozano-Verduzco, I. (2015): "Desire, Emotions, and Identity of Gay Men in Mexico City" *Psychology of Men & Masculinity*, March 23, pp. 1–46.
- 室井舞花 (2016):『恋の相手は女の子』岩波ジュニア新書.
- 中村 明 (2010):『日本語 語感の辞典』岩波書店. 永易至文編 (2014):『わが子の声を受け止めて性 的マイノリティの子をもつ父母の手記』平成 26年度厚生労働省科学研究費補助金エイズ対 策研究推進事業.
- 及川 卓 (1982):「性別同一性の障害 ——男性同性愛者の症例をとおして——」馬場謙一(編). 『青年期の精神療法』金剛出版.
- 小此木啓吾(2002):『フロイト思想のキーワード』 講談社現代新書.
- 大谷 尚(2008): 「4ステップコーディングによる 質的データ分析手法SCATの提案――着手し やすく小規模データにも適用可能な理論化の 手続き――」『名古屋大学大学院教育発達科 学研究科紀要(教育科学)』Vol. 54, No. 2, pp. 27-44.
- (2011):「SCAT: Steps for Coding and Theorization ――明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法――」『感性工学』Vol. 10, No. 3, pp. 155-160.
- Troiden, R. R. (1989): "The Formational of Homosexual Identities" *Journal of Homosexuality*, Vol. 17, No. 1–2, pp. 43–73.
- 津野千文(2016):「男性同性愛者における性的指 向性の受容過程に関する研究」東京国際大学

大学院臨床心理学研究科博士課程(前期)修 十論文

山内俊雄編著 (2004): 『改訂版 性同一性障害の 基礎と臨床』新興医学出版社. Zuger, B. (1984): "Early Effeminate Behavior in Boys: Outcome and Significance for Homosexuality" *Journal of Nervous and Mental Disease*, Vol. 172, No. 2, pp. 90–97.

資 料

受容過程の理論仮説第1段階:◆ 思春期に入ってから同性に性的射を感じるようになった人たちは、の第2段階からスタートする。	
<性への目覚め>の段階 を感じるようになった人たちは, の第2段階からスタートする。	
の第2段階からスタートする。	次
↓	
第2段階: ・ みずからの性的指向性をひとまっ	f
<仮の受容>の段階 「自覚」する。	
● <振り子の状態>	
↓	
第3段階: ・ 「異性愛者的役割葛藤」を演じる	0
<異質である不安>と<正体が知れる不安> ● <男らしくない男の子症候群>	
を感じる段階 ◆ <実験的行動>	
↓	
第 4 段階: ● <パッシング>と<連帯>の戦略	各の
<真の受容>の段階 採用	
(<異質である不安>を解消する段階) ● ①<前向き思考>・②<哲学的フ	· 1
スピリチュアルな思考>・③<∫	ヨ 囲
の人たちの友好的な・寛容的なも	景境
の作用> による解決	
● <否定的自己感>から<肯定的	当 戸
感>への変化	
● <素(す)の自分>と<諦念>	
	× 2.
第5段階: ● 家族にはカミング・アウトを行;	てな
<選択的カミング・アウト>の段階 い特殊性がある。	
(<正体が知れる不安>を除去する段階) ● ほとんどの同性愛者の人たちが、	
この段階に留まっているものと	考え
られる。	
● 〈実験的行動〉	
↓	
第 6 段階:	
<カミング・アウトの超越>の段階	

図1 日本人男性同性愛者の人たちの性的指向性の受容過程

- 32 - 日本人男性同性愛者における性的指向性の受容過程に関する一研究

表1 各構成概念に対する研究協力者12名の状況

No	概 念 名	Aさん	Bさん	Dさん	Εさん
1	<性への目覚め>	0		0	0
2	思春期で同性に性的魅力を感じる		©		
3	<振り子の状態>	×	×	©	×
4	性的指向性の<仮の受容>	©	©	©	©
5	<異質である不安>を感じる	\triangle	×	©	©
6	<正体を知れる不安>を感じる	©	©	©	©
7	<男らしくない男の子症候群>	×	×	×	×
8	<否定的自己感>をいだく	©	×	©	×
9	<諦念>をいだく	©	×	0	©
10	性的指向性の<真の受容>	©	©	©	©
11	<パッシング(Passing)>の採用	©	©	©	©
12	<連帯(Group Alignment)>の採用	©	©	©	Δ
13	<前向き思考>	©	©	\triangle	©
14	<哲学的な・スピリチュアルな思考>	×	×	©	×
15	<友好的な・寛容的な環境の作用>	\triangle	Δ	©	©
16	<選択的カミング・アウト>をする	©	×	0	©
17	<カミング・アウトの超越>	×	×	×	©
18	<実験的行動>をとる	×	×	©	©

注1) 協力者の人たちが実際に書いている項目には◎を、実際に書いてはいないものの、文脈から読み取れる項目には○を、不明の項目には△を、協力者の人たちが否定して書いている項目には×を付した。 注2) 1の<性への目覚め>と、2の思春期で同性に性的魅力を感じるは、本研究の定義では、おたがいが両立

しえない概念になるため、該当しない項目のほうには「一」の記号を付した。

Fさん	Gさん	Ιさん	Jさん	Kさん	Lさん	Μさん	Nさん
0	0				0		0
		©	0	©		©	
\triangle	0	×	©	0	×	×	×
0	©	©	©	©	©	©	©
0	0	©	0	×	©	©	\triangle
0	©	©	©	©	©	©	©
0	©	×	©	×	©	×	×
0	×	©	0	×	©	©	×
0	\triangle	©	0	\triangle	©	0	©
0	©	©	©	©	©	©	©
0	©	\triangle	©	©	©	©	©
©	\triangle	©	©	\triangle	©	©	©
Δ	0	©	Δ	\triangle	×	×	Δ
×	©	×	×	0	×	×	©
©	©	©	0	×	©	\triangle	©
©	0	©	©	×	©	0	×
\triangle	×	×	×	×	×	×	×
×	0	×	0	0	×	×	×

Abstract

On Study on an Acceptance Process of Sexual Orientation in Japanese Gay Men

Chibun Tsuno

The purpose of this paper is to clarify an acceptance process of sexual orientation in Japanese gay men and to hypothesize theoretically about it. These days of the information society, today even more than in the past, LGBT people seem to be living in a more comfortable environment. It is said, however, that almost all of Japanese gay men have been undergoing and are undergoing heterosexual role conflict and depression. An original questionnaire to survey was prepared, and 12 subjects participated in this study. E-mails were used in order to exchange data between each subject and the author, and SCAT was utilized for analyzing all the collected data qualitatively. As a result of analyzing them with SCAT, it turned out that most Japanese gay men would go through six stages in accepting their own sexual orientation. But, supposedly, most of them might stay at the fifth stage, namely the stage of coming out selectively.

小学生におけるソーシャルサポートの 受容・提供が QOL に及ぼす影響

齋 藤 美 菜

次 目

- I. 問題と目的
 - 1. ソーシャルサポート
 - 1.1 ソーシャルサポートとは何か
 - 1.2 ソーシャルサポートの分類
 - 1.3 ソーシャルサポートの受容の効果
 - 1.4 ソーシャルサポートの提供の効果
 - 1.5 ソーシャルサポートの提供と幸福感
 - 1.6 学齢期におけるソーシャルサポート の研究
 - 2. QOL
 - 2.1 QOLとは
 - 2.2 子どものQOL
 - 3 目的
 - 4. 仮説
- Ⅱ. 方法
 - 1. 予備調查
 - 2. 本調查
 - 2.1 調查対象者
 - 2.2 実施時期及び調査手続き
 - 2.3 質問紙の構成
- Ⅲ 結果
 - 1. 各尺度の記述統計量および信頼性係数
 - 2. 各尺度の相関関係
 - 3. QOL尺度の因子分析
 - 4. 学年の差の検討
 - 5. 性別の差の検討
 - 6. 二要因分散分析

- 7. クラスター分析
- Ⅳ. 考察
- V 総合考察
- VI. 本研究の課題と展望

要 約

近年. 不登校や無気力に代表される学校不適 応に関わる問題は著しい増加傾向にあり、学校 が抱える問題として深刻化している。現状で は、学校教育において、児童の学校不適応に対 する具体的な援助や予防策の必要性が高まって いると言える。このことから、小学生のストレ ス過程に影響を与える個人的要因としてソー シャルサポートに焦点を当てた研究を行った。 本研究においては ソーシャルサポートを受容 と提供の両側面から捉え、QOLに及ぼす影響 について質問紙を用いて検討した。

結果として、ソーシャルサポートの受容や提 供が高ければ、QOLも高くなり、ソーシャル サポートの受容と提供がQOLにそれぞれ影響 を及ぼしていることが明らかとなった。また. ソーシャルサポートの受容と提供のどちらかが 高くなる人を比較したところ、ソーシャルサ ポートの受容が高い人のほうが、ソーシャルサ ポートの提供が高い人よりもQOLが高くなる ということが明らかとなった。この結果は. ソーシャルサポートの提供が高ければ、ソー シャルサポートの受容が低くても、幸福感が高 くなるという大学生で実施された先行研究とは

^{*} 臨床心理学研究科博士課程(前期)

異なるものであった。小学生は、発達段階の途 中にあり、ソーシャルサポートの提供が、「自 分が親切にしていれば、自分も誰かに助けても らえる」などのように、先のことを予測するこ とに至らないと考えられる。また、ソーシャル サポートの受容に関して、特に身近な人、たと えば家族や学校の先生. 友達に自分が受容され ているという感覚を持つことが重要であると考 えられる。これは、どのような年齢の人にとっ ても重要なことであるが、年齢を重ねることで 広い人間関係を持つことができるようになり. ある人からサポートが得られなくても、他にサ ポートを与えてくれる人を見つけることができ るようになるとも考えられる。これらのことか ら、小学生にとって、QOLを高く保つために は、誰かに受容されることが必要であるという ことであり、ソーシャルサポートの提供の効果 は、受容されてこそ発揮できるものであると考 えられる。

キーワード:ソーシャルサポートの受容と提供, QOL. 小学生

I. 問題と目的

子どもたちの生活の大部分を占めているとも 言える学校は、本来、楽しいところであるべき であり、子どもの自己成長の欲求、集団所属の 欲求、承認の欲求という夢や願いを実現してい くところでもある。しかし、不登校や無気力に 代表される学校不適応に関わる問題は著しい増 加傾向にあり、学校が抱える問題として深刻化 している。現状では、学校教育において、児童 の学校不適応に対する具体的な援助や予防策の 必要性が高まっていると言える(齋藤・神村、 2008)。また、小学校高学年になると、自分の ことを客観的にとらえられるようになり、自己 肯定感を持ちはじめるが, 発達の個人差から, 自己に対する肯定的な意識を持てず、劣等感を 持ちやすくなる時期でもある。これらのことか ら, 小学校高学年には, 他者の視点に対する理 解,自己肯定感の育成,自他の尊重の意識や他者への思いやりの育成が必要であるとされている。

これまで、児童の学校不適応に関して、学校 場面における心理的ストレス、すなわち「学校 ストレス」の観点から検討したものが数多く見 られるが(岡安ら、1993)、学校で心理的スト レスを感じているということが不適応や、児童 の不適応感につながるとすれば、ストレス反応 の低減を図ることが児童の学校不適応に対する 援助となると考えられる。しかし、すべての学 校ストレッサーを除去しようとすることは現実 的に難しく、ストレス過程に影響を与える個人 的要因に働きかけるほうが有効であろう(岡安 ら、1993)。そこで、児童の学校ストレス過程 に影響を与える個人要因の1つに挙げられるの がソーシャルサポートである(岡安ら、1992)。

1. ソーシャルサポート

1.1 ソーシャルサポートとは何か

Cobb (1976) は、ソーシャルサポートを、①その人に自分がケアされ、愛されている、② 尊敬され、価値ある存在として認められている、③互いに義務を分かち合うネットワークの一員である、という3つのうち少なくとも1つ以上についてその人に信じさせてくれるような情報であると捉えた。また他にも、稲葉(1987)は、「特定の個人が、特定の時点で、彼・彼女と関係を有している他者から得ている、有形・無形の援助」であるとした。すなわち、ソーシャルサポートとは、「その人を取り巻く重要な他者(家族・友人・同僚・専門家など)から得られるさまざまな形の援助(support)」であり、その人の健康維持・増進に重大な役割を果たすと考えられている(久田、1987)。

1.2 ソーシャルサポートの分類

ソーシャルサポートを「道具的なサポート」 と「社会情緒的なサポート」の2種類に分類す る考え方がある。具体的に、道具的サポートに は、ストレス処理のための資源を提供したり、 問題解決に介入するという形での直接的なサ ポートと、それらについて情報を提供するとい う間接的なサポートの2種類がある。社会情緒 的なサポートには、愛情や愛着、親密性のよう な情緒的な働きかけと、評価やフィードバック のような認知的な側面への働きかけがある。

他にも、ソーシャルサポートは「知覚された サポート | 「実行されたサポート | 「サポート ネットワーク | の3種類に大別されるという考 え方がある。具体的に、知覚されたサポートと は、必要な時にサポートが得られるという利用 可能性の知覚あるいは将来の予期のことであ る。実行されたサポートとは、過去の一定期間 内でサポートが実際に他者から得られた経験の ことである。サポートネットワークとは、過去 にサポートが得られた. あるいは将来サポート が得られると予期される対人関係の存在のこと である。このうち、知覚されたサポートは対処 資源の一部として、ソーシャルサポートと健康 との関連についてのモデルにおいても、重要な 位置を与えられてきた。また、知覚されたサ ポートはストレッサーに直面してもその悪影響 を緩和する働きをもつというストレス緩和効果 が確認されている(福岡, 2010)。

1.3 ソーシャルサポートの受容の効果

Cohen & Wills (1985) は、ラザルスらの提 唱する心理的ストレスモデルに準拠したソー シャルサポートの影響の過程をモデルに示した (図1)。このモデルでは、ソーシャルサポート は2つの時点でストレッサーが疾病をもたらす 過程に影響していると考えられている。第一に 何らかの出来事。潜在的なストレッサーが生じ た場合. それを個人がどう受け止めるかという 1次的評価に影響する。第二にストレッサーが ストレスフルであり、何らかの対処が必要であ ると認知された場合に、ソーシャルサポートは 個人の適応的な対処行動や再評価を促進し. 不 適応的な反応を抑制する。前者で想定されるの は主としてサポートネットワークあるいは知覚 サポートであり、後者で想定されるのはこれら に加えて実行されたサポートである(Cohen & Wills, 1985).

調整変数としてのソーシャルサポートの効果 は、ストレス緩衝効果や直接効果が明らかと なっている。ストレス緩衝効果とは、ストレッ サーを体験した人がソーシャルサポートを十分 に得られていないならば、疾病や不健康状態に 陥りやすいが、ソーシャルサポートを豊富に得

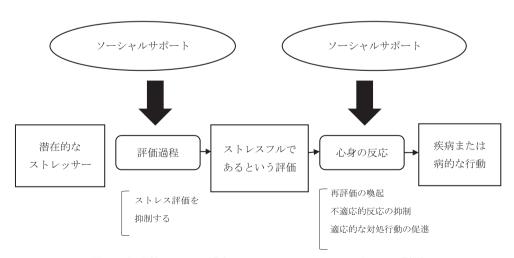


図1 心理的ストレス過程におけるソーシャルサポートの影響 (Cohen & Wills, 1985)

ているならば疾病あるいは不健康状態に陥らず に済むというものである。これに対して直接効 果とは、ストレッサーの水準が低い人であって も、ソーシャルサポートが豊富であるならば心 理的健康度が損なわれないというものである。

1.4 ソーシャルサポートの提供の効果

従来のソーシャルサポートの研究では、受け 手の立場から個人の知覚されたサポートや実行 されたサポートを測定し、どのようなサポート が心身の健康に影響を及ぼすのかということに ついて検討したものが多い (Helgeson, 1993)。 しかし近年、送り手の立場も踏まえた互恵性に 関する研究もおこなわれるようになってきてお り (森本, 2006), 他者にサポートを提供する ことは、提供する人の健康を促進すると考えら れている(House, 2001)。ソーシャルサポー トの互恵性とは、励ましや助言などのソーシャ ルサポートを他者から「してもらう」ことと. 他者へ「してあげる」ことのバランスのことで あり(福岡, 2003)、これらのバランスが保た れている場合に精神的健康が維持されるとされ ている。サポートの提供と健康の間には強い相 関関係が見られ、サポートを他者に提供するこ とで、サポートを受けていなくてもストレス緩 衝効果があると考えられているが、十分な検討 はされていない。サポートの提供に目を向けた 研究として, Poulin et al. (2013) は, 具体的 な手助けや道具的サポートの提供の効果を検討 し、ストレスフルな状態になった場合にサポー トの提供が心理的なストレスを緩和する要因に なるということが示された。しかしながら、情 緒的なサポートや思いやりの影響は検討されて おらず、これから検討していく必要があるとさ れている。

1.5 ソーシャルサポートの提供と幸福感

サポートの提供と幸福感に関して, 誰かに親 切にすることは罪悪感や苦悩, 他人の困難や苦 痛を知ることで生じる居心地の悪さを軽減さ せ, それと同時に自分の幸運を認識し, 感謝す る気持ちが強まることが示されている。実際に、誰かの力になったり慰めを与えることで、 くよくよと考えることから気持ちをそらすことができ、焦点を自分から他者へと移すことができる。さらに、親切な行動をとることで自分自身を利他的で思いやりのある人間であるとみなすようになり、自信や楽観的な考え方、自分が役に立っているという思いが強まるなど、自己認識に影響を及ぼす(Lyubomirsky、2012)。また、Otake et al. (2006)により、親切行動をすることで嬉しさや感謝が生じ、他者とのポジティブな相互作用を促進し主観的幸福感が高まるとされた。

1.6 学齢期におけるソーシャルサポートの研究

児童の学校不適応に対する具体的な援助や予 防策の必要性が高まっているなか、小学生にお けるソーシャルサポートの研究は少ないという 現状がある。その中で、齋藤・神村(2008)は、 社会的スキルとソーシャルサポート知覚が、学 級適応感に及ぼす影響について研究し、関係向 上スキルと集団参加スキル、ソーシャルサポー トの知覚が高いほど、学級適応感が高いという ことが明らかになった。また、窪田ら(2012) は、学校生活意欲とストレス、ソーシャルサ ポート、学校生活スキルの関連について研究を 行った。その結果、自分が困ったときに、周囲 からサポートを得られない場合に、ストレスを 抱える可能性があるが、逆に、サポートを得る ことができると、学級への満足度が高くなると いうことが明らかになった。

2. QOL

2.1 QOLとは

鈴木ら(2015)は、「QOL(Quality of Life: 生活の質)の概念は、社会・経済的な豊かさの みでなく、精神的豊かさや健康度を含めた包括 的概念として捉えられるものである。」として いる。また、QOLは、本人の人生や生活全般 における認知された満足度である主観的Wellbeingを含む概念として用いられることが多い (Bullinger, 1991) という現状があげられる。 このようなQOLの概念が、近年急速に広まり、 病気や疾患の身体的なものにのみ焦点を当てる のではなく. 健康の心理・社会的なモデルに焦 点が当てられるようになった。それは、日々の 生活の中での機能を考慮に入れた。 心理・社会 的な側面を強調したウェル・ビーイング(幸福・ 安寧・満足感) である。

2.2 子どものQOL

日常的に、疲れや眠さを感じていたり、意欲 が低下していたり、頭痛や腹痛を訴える子ども が多く、心身の健康状態が問題視されている。 実際に、不登校にならないまでも、身体的・精 神的に疲労を抱えた子どもが多いと考えられて いる(山本, 2010)。このような状況の中で、 身体的にだけではなく、精神的、社会的にも良 好な状態であるというWHOの健康の概念に基 づいたQOLを子どもにも保障することが求め られている。子どものQOLは、発達の過程に ある子どもの場合、年齢と認知能力の関係が大 きいため、成人のQOLの概念とは質的に異な ることや、文化的背景をより考慮しなくてはな らず、子どものQOLについて、Koot (2001) は、 「普遍的な人間の権利に基づく、 その子どもの 文化と時代の中で生活の複数の領域における主 観的かつ客観的well-beingである」としている。

3. 目的

身体的、精神的に疲労を抱えた子どもが多い 現状で、より良いQOLを子どもたちに保障し ていくために、何が子どもたちのQOLに影響 を及ぼしているかを研究していくことは社会的 意義が大きいと考えられる。今までのソーシャ ルサポートの研究では、他者からのサポートを 受けることと、他者にサポートをしてあげるこ とのバランスが保たれている場合に、精神的健 康が維持されるといわれているが、 小学生を対 象に、ソーシャルサポートの受容と提供の両方 に目を向けた研究は少ない。

これらのことから本研究の目的は、小学生の ソーシャルサポートの受容と提供がQOLに及 ぼす影響を明らかにするために、ソーシャルサ ポートの受容と提供の高低による。QOLの違 いを比較、検討することとする。

4. 仮説

①ソーシャルサポートの受容・提供ともに多い 人のQOLが最も高く、ソーシャルサポートの 受容・提供ともに少ない人のQOLが最も低い。 ②ソーシャルサポートを多く提供する人は、提 供しない人に比べてQOLが高い。

Ⅱ. 方法

1. 予備調査

本調査に先立って、作成した質問紙への回答 時間, 答えやすさの把握, 対象学年の決定をす る目的で、研究時に使用する質問紙と同様の質 問紙を, 東北地方の公立小学校に在籍する小学 1年生から小学6年生までの25名に実施した (表1)。その結果、小学1年生は漢字の読めな いところが多数あったが、読んで聞かせること で質問文の理解はできているようだった。2年 生から6年生は、調査者が質問文を読むなどは せず. 配布. 回収だけを行ったが. 質問は出て こなかった。実施後に、質問項目に対して疑問 はなかったかなどの聞き取りをし、表現の変更 を行った。実施時間は配布から回収までで15 分程度であり、最も時間のかかった小学1年生 であっても20分程度で終了している。以上の 予備調査の結果と、調査協力校との相談によ

表1 予備調査結果

	人数	平均所要時間
1年	2	17.2
2年	3	15.1
3年	5	11.3
4年	3	10.0
5年	4	7.5
6年	8	7.9
合計	25	11.5

り、本研究での実施対象学年は、小学3年生から6年生までとした。

2. 本調查

2.1 調查対象者

関東地方の公立小学校に在籍している小学3年生から小学6年生314名を対象とし、記入に不備のあった24名を除く290名(男性143名(49.3%)、女性147名(50.7%))から有効回答を得た。有効回答率は92.4%であった。

2.2 実施時期及び調査手続き

2016年7月に質問紙調査を実施した。調査は、小学校の朝学習の時間、休み時間、放課後の時間を利用し、担任教員による集団配布・回収の形式で行った。調査実施にあたって、担任教員あての文書を作成し、結果は統計的に処理されること、参加は自由であり、途中で自由に離脱する権利があることを教示するように依頼した。調査に要した時間は各学年とも15分程度であった。

2.3 質問紙の構成

本研究で使用した質問紙は,記入年月日,学年,性別を記載したフェイスシートと,以下の 尺度で構成した。

①ソーシャルサポートの受容:嶋田 (1993) の 小学生用ソーシャルサポート尺度

久田ら(1989)の、学生用ソーシャルサポート 尺 度(The Scale of Expectancy for Social Support: SESS)を小学生向けに一部修正してつくられたものであり、援助に対する期待感を測定するために、知覚されたサポートの定義に従って選定された16項目からなる尺度である。

得点化は「ぜんぜんあてはまらない」を1点,「あまりあてはまらない」を2点,「すこしあてはまる」を3点,「よくあてはまる」を4点とした。合計点の最高点は64点,最低点は16点となり,ソーシャルサポートの受容の得点として用いた。

②ソーシャルサポートの提供:嶋田 (1993) の小学生用ソーシャルサポートを修正して用 いた。

援助に対する期待感を測定するための小学生 用ソーシャルサポート尺度の質問文を、自分自 身が他者にどれだけ行っていると思うか、すな わち「ソーシャルサポートの提供の程度」を問 う質問文に変更して用いた。

質問文の変更に関して、ソーシャルサポートの提供を測定する尺度として久田ら(1989)の、学生用ソーシャルサポート尺度(The Scale of Expectancy for Social Support;SESS)を同様の変更を行い、実施した。その際に算出したCronbachのa係数は、質問文を変更していないソーシャルサポートの受容が.94、質問文の変更を行ったソーシャルサポートの提供が.93と信頼性はどちらも高く、質問文の変更に問題はないと考えられた。

得点化は「ぜんぜんあてはまらない」を1点,「あまりあてはまらない」を2点,「すこしあてはまる」を3点,「よくあてはまる」を4点とした。合計点の最高点は64点,最低点は16点となり,ソーシャルサポートの提供の得点として用いた。

③QOL: 柴田 (2014) の小学生版QOL尺度

QOLは健康の心理的な指標であり、子どもをトータルでみたときに、身体的側面だけではなく、心理的社会的側面を捉えようとしたものである。特に、一般的な子どもを対象に、子どもの生活全体を捉え、いくつかの領域での機能などを包括的に評価しようとする「包括的QOL尺度」を用いた。

本尺度は、「身体的健康」「精神的健康」「自尊感情」「家族」「友達」「学校生活」の6つの下位尺度からなり、各下位尺度4項目、全24項目について、「ぜんぜんない」から「いつも」の5件法で回答を求めた。

得点化は、「ぜんぜんない」を1点、「ほとんどない」を2点、「ときどき」を3点、「たいてい」を4点、「いつも」を5点とした。合計点の最高

点は120点, 最低点は24点となり, QOL得点 として用いた。

Ⅲ. 結果

1. 各尺度の記述統計量および信頼性係数

本研究で使用したソーシャルサポート尺度, 小学生版 QOL 尺度の対象者全体の得点を算出し、平均値、標準偏差、Cronbach oa係数を求め、表2に示した。このとき、ソーシャルサポート尺度は、ソーシャルサポートの受容と提供別に算出した。

それぞれの尺度ごとにみると、ソーシャルサポートの尺度の得点範囲は $16 \sim 64$ 点であるのに対して平均点が、受容48.9、提供50.3、QOL尺度の得点範囲は $24 \sim 120$ 点であるのに対して平均点が86.8と若干のばらつきは見られるが全体的に高い得点であることが読み取れた。またa係数を見ると、各尺度のa係数はすべて.85以上であり一定の内的整合性が確認された。

2. 各尺度の相関関係

ソーシャルサポートの受容と提供、QOLについて相関分析を行った(表3)。その結果、ソーシャルサポートの受容と提供にはかなり強い正の相関、ソーシャルサポートの受容とQOLには中程度の正の相関、ソーシャルサポートの提供とQOLには弱い正の相関がみられた。

3. QOL尺度の因子分析

小学生版QOL尺度24項目について、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。スクリープロットや固有値の減衰状況から6因子構造であると判断した。また、因子負荷量が.40未満であった項目(項目番号5.4.6.8.15.16)の6項目を除外し、再度因子分析を行った(表4)。最終的に、第1因子4項目、第2因子5項目、第3因子4項目、第4因子2項目、第5因子2項目、第6因子2項目、計18項目を採択した。得られた因子について、柴田ら(2014)の結果とは異なったが、第1因子を「自尊感情」、第2因子を「仲良し」、第3因子を「病み気味」、第4因子を「良い家族」、第5因子を「不安感」、

表2 各尺度得点の平均値と標準偏差および信頼性係数

		平均値	最小値	最大値	標準偏差	N	α係数
ソーシャルサポート	受容	48.9	17	62	11.6	290	.952
	提供	50.3	19	64	9.2	290	.930
QOL		86.8	45	117	13.1	290	.854

表3 各尺度得点の相関係数

	1	2	3
1.サポートの受容	_	.708**	.535**
2.サポートの提供		_	.441**
3.QOL			_
		*p<.05,	**p<.01

- 8 - 小学生におけるソーシャルサポートの受容・提供が QOL に及ぼす影響

第6因子を「学校への適応感」とした。それぞ れの因子について、内的整合性を確認するた め、Cronbachのa係数を算出した。その結果、 a係数はそれぞれ、「自尊感情」.81、「仲良 し」.76. 「病み気味」.66. 「良い家族」.80. 「不 安感 | .58.「学校への適応感 | .61と、半数以 上が基準の.80を下回るため、本研究では、 QOL尺度を6つの因子としてそれぞれ使用し、 解釈するのではなく、合計得点をQOL得点と

して採用することとした。

4. 学年の差の検討

QOL得点の平均値、標準偏差を学年別に算 出し(表5)、学年の違いによるQOLの得点の 差を見るために分散分析を行った。その結果. QOLにおいて有意な差が見られた(F(3, 286))= 5.865, p < .05)。そのため、TukeyのHSD法 による多重比較を行った。その結果、4年生よ

まれ 小党生版の01 足度の因子公析結果

	表 4 小学生版 Q()L 尺度	の因子	分析結果	₹		
		因子 1	因子 2	因子3	因子 4	因子 5	因子 6
自尊	享感情						
10	色々なことを思いついた	.82					
9	自分に自信があった	.78					
11	自分に満足していた	.59					
12	良いことをたくさん思いついた	.58					
仲島	₹ L		_				
19	友達と仲良くしていた		.91				
18	友達は私のことが好き		.59				
17	友達と一緒に遊んだ		.51				
7	一人ぼっちのような気がした		.46				
病み	*気味						
2	・頭が痛い、お腹が痛い			.61			
3	・疲れてぐったりした			.57			
1	・病気だと思った			.55			
20	・他の子と比べて変わっている気がした			.44			
いい	、 家族				-		
14	家で気持ちよく過ごした				.96		
13	親と仲良くしていた				.60		
不多	子感			,		•	
23	・これから先のことを心配した					.86	
24	・テストで悪い点を取らないか心配した					.51	
学校	でへの適応感						•
21	学校の勉強がよくわかった						.80
22	学校の授業が楽しかった						.58
• 1	は逆転項目						
_							.01

		1	2	3	4	5	6
	因子 1	_	.40**	.12*	.29**	.06	.41**
	因子 2		_	.22**	.38**	.13*	.26**
III 7 88 40 88	因子 3			_	.23**	.24**	.21**
因子間相関	因子 4				_	.04	.25**
	因子 5					_	.12*
	因子 6						_
					*	p <.05,	**p<.01

りも. 5. 6年生のほうがQOLが低いというこ とが明らかになった。

5. 性別の差の検討

QOL得点の平均値、標準偏差を男女別に算 出し(表6)、性別の違いによるQOLの得点の 差を見るために分散分析を行った。その結果. QOLにおいて有意な差は見られなかった (F(1,288) = .983, n.s.)。この結果から、QOLの高 さに、性別は影響していないということが明か となった。

6. 二要因分散分析

ソーシャルサポートの受容を平均値(M= 48.9) で高低2群に分け、ソーシャルサポート の提供も平均値 (M = 50.3) で高低2群に分け た。ソーシャルサポートの受容と提供がQOL に影響を及ぼしているかを検討するため、ソー シャルサポートの受容と提供を独立変数. QOL を従属変数とした二要因分散分析を行った(図 2)。その結果、ソーシャルサポートの受容と 提供の高低の交互作用は有意ではなかった(F (1. 286) = 1.867, n.s. (1. 286) = 1.867, n.s.てソーシャルサポートの受容の高低の主効果が 有意であり(F(1, 286) = 42.847, p < .001)、ソー シャルサポートの受容が高いとQOLが高くな ると言える。さらに、ソーシャルサポートの提 供の高低の主効果も有意であり(F(1,286) = 9.519, p < .05)、ソーシャルサポートの提供

表5 学年別QOL得点の平均値と標準偏差

学年	N	M	SD	多重比較
3	88	88.51	11.982	4>5.6*
4	56	91.68	13.250	
5	59	84.29	14.151	
6	87	83.56	12.276	

p < .05, p < .01

表6 性別ごとのQOL得点の平均値と標準偏差

性別	N	M	SD
男子	143	87.55	12.838
女子	147	86.03	13.35

が高いとQOLも高くなると言える。

7. クラスター分析

ソーシャルサポートの受容と提供の高低が. QOLとどのように関連するかを検討するため、 各平均点と標準偏差を基に、標準得点を算出 し、平方ユークリッド距離、Ward法によるク ラスター分析を行った。その結果、解釈可能な 4クラスターが得られた。4クラスター分類に おけるソーシャルサポートの受容と提供の標準 得点のクラスターパターンを図3に示した。

第1クラスター(132名, 45.5%)は、ソーシャ

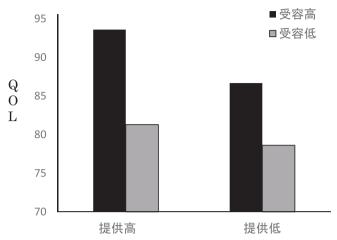
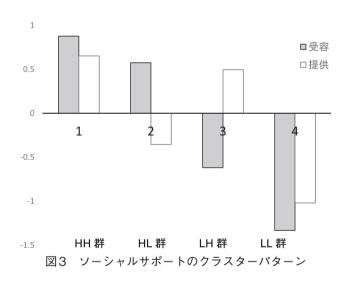


図2 ソーシャルサポートの高低によるQOLの差



ルサポートの受容,提供ともに高い値を示し、HH群とした。第2クラスター(37名,12.8%)はソーシャルサポートの受容が高く、ソーシャルサポートの提供が低い値を示し、HL群とした。第3クラスター(34名,11.7%)はソーシャルサポートの受容が低く、ソーシャルサポートの提供が高い値を示し、LH群とした。第4クラスター(87名,30%)はソーシャルサポートの受容、提供ともに低い値を示し、LL群とした。

次に、これらの4クラスターを独立変数、

QOLを従属変数とした一要因分散分析を行った。その結果、QOLにおいて有意な差が見られた(F(3, 286)=33.7, p<.001)。そのため、TukeyのHSD法による多重比較を行った。その結果、ソーシャルサポートの受容、提供ともに高いHH群が最もQOLが高く、次いでソーシャルサポートの受容が低く、提供が低いHL群、ソーシャルサポートの受容が低く、提供が高いLH群、ソーシャルサポートの受容が低く、提供が高いLH群、ソーシャルサポートの受容、提供ともに低いLL群の順でQOLが低くなっていることが明らかとなった(表7)。

表7 各クラスターパターンによるQOLの差の検討

p < .05, p < .01

Ⅳ. 考察

本研究の目的は、ソーシャルサポートの受容と提供がQOLに及ぼす影響を明らかにし、さらに、ソーシャルサポートの受容と提供の高低によるQOLの違いを比較、検討することであった。そのため、①ソーシャルサポートの受容・提供ともに少ない人のQOLが最も低い、②ソーシャルサポートを多く提供する人は、提供しない人に比べてQOLが高い、という2つの仮説の検証を行った。

QOLが、学年や性別によって差が見られるかを検討するため、分散分析を行ったところ、性別に有意な差は認められず、学年について差が認められ、QOLは、4年生よりも、5、6年生のほうが低いということが明らかになった。この結果は、柴田ら(2008)の研究とも一致する。これは、学年があがるにつれて、自我が芽生え、一人ひとりの抱える問題が多様化し、複雑になってくるためだと考えられる。

ソーシャルサポートの受容と提供の高低が QOLに影響を及ぼしているかを検討するため、 二要因分散分析を行ったところ、 QOLについて、 交互作用は見られず、 受容と提供の高低で主効果が有意であった。このことから、 ソーシャルサポートの受容やソーシャルサポートの 提供が高ければ、 QOLも高くなるということが明らかとなった。 つまり、 QOLには、 ソーシャルサポートの受容と提供がそれぞれ大きく影響していると言える。この結果は、他者から

のサポートを実際に受けられる、受けていると感じられることで不健康状態に陥りにくいという Cohen et al. (1985) の研究とも一致し、幸福感が高い人は、日頃から他者に親切にしたいという動機づけが高く、実際に親切な行動をとっていることが多いという Otake et al. (2006) の研究結果とも一致していたと言える。これは、小学生であっても、他者にサポートを提供することで、サポートを受けているだけでは得られない、他者を助けた達成感や満足感、感謝されることへの嬉しさが生じたと考えられる。したがって、「サポートを多く提供する人は、提供しない人に比べてQOLが高い」という仮説は支持された。

ソーシャルサポートの受容と提供の組み合わ せを分類するためにクラスター分析を行ったと ころ、ソーシャルサポートの受容、提供ともに 高いクラスターと、受容、提供ともに低いクラ スター、ソーシャルサポートの受容、提供のど ちらかが高いクラスターの4つに分類できた。 しかし、受容と提供がともに高いクラスターが 全体の45.5%、逆に、受容と提供ともに低いク ラスターが全体の30%と、75%の人がこれらの どちらかに当てはまる。これは、他者からサ ポートを受けていれば、それだけ他者にサポー トを提供していると考えられ、逆に、サポート を受けていなければ、他者へサポートを提供す ることは難しいのではないかと考えられる。ク ラスター間のQOLを比較するために分散分析 を行ったところ、QOLについて、ソーシャル サポートの受容、提供ともに低いクラスターよ りも、受容、提供ともに高いクラスターの方が 有意に高くなっていることが明らかとなり、ソーシャルサポートの受容と提供が高いほど QOLが高くなると言える。したがって、「ソーシャルサポートの受容・提供ともに多い人の QOLが最も高く、サポートの提供・受容ともに少ない人の QOLが最も低い」という仮説は支持された。

また、ソーシャルサポートの受容が高く、提 供が低い人と、ソーシャルサポートの受容が低 く, 提供が高い人のように, 受容と提供のどち らかが高くなる人を比較したところ、受容が高 い人の方が、提供が高い人よりもQOLが高く なるということが明らかとなった。この結果 は. 齋藤(2014)のソーシャルサポートの提供 が高ければ、ソーシャルサポートの受容が低く ても、幸福感が高くなるという大学生の研究と は異なるものであった。このことは、小学生 は、発達段階の途中にあり、ソーシャルサポー トの提供をしても、「自分が親切にしていれば、 自分も誰かに助けてもらえる」などのように. 親切の先にあることが予測できない幼さがある と考えられる。また、ソーシャルサポートの受 容に関して、特に身近な人、たとえば家族や学 校の先生、友達に自分が受容されているという 感覚を持つことが重要であると考えられる。こ れは、どのような年齢の人にとっても重要なこ とであるが、年齢を重ねることで広い人間関係 を持つことができるようになり、たとえある人 からのサポートが得られなくても、他にサポー トを得る対象をみつけることができるとも考え

これらのことから、小学生にとって、QOLを高く保つためには、誰かに受容されることが必要であるということであり、ソーシャルサポートの提供の効果は、受容されてこそ発揮できるものであると考えられる。

Ⅴ. 総合考察

本研究では、ソーシャルサポートの受容と提供がQOLに及ぼす影響を明らかにし、さらに、

ソーシャルサポートの受容と提供の高低による QOLの違いを比較、検討し、仮説の検証も行い、2つの仮説は支持された。

ソーシャルサポートの受容と提供は、それぞ れがQOLに影響を及ぼしているということが 明らかとなり、QOLを高める要因になりえる ということが示唆された。また、ソーシャルサ ポートの受容と提供の組み合わせを分類した際 に、ソーシャルサポートの受容と提供のどちら かが高いという人は、全体の25パーセントほ どで、多くはどちらも高い人もしくは、どちら も低い人であり、ソーシャルサポートの受容と 提供にはある程度の互恵性があると考えられ る。しかし、小学生という年齢であることか ら、「誰かにやってもらったから、自分も相手 に何かをしてあげよう」、「自分が助けてあげれ ば、いつか自分の助けになってくれるだろうし などのように、ソーシャルサポートの受容と提 供を結びつけて考えることができず. 「今. 助 けてほしいと言われたから助ける」。「なんとな く助けてくれた」、「褒められたい、怒られたく ないから手伝う | などのように、今置かれてい る状況に焦点を当てて行動している可能性も考 えられる。

また、ソーシャルサポートの受容と提供の両 方が高い人と、ソーシャルサポートの受容が高 く, 提供が低い人を比較した際に, 受容と提供 ともに高い人のほうがQOL高かった。このこ とから、QOLを高めるには、受容されている ということが基となり、その上で他者にサポー トを提供することで、よりQOLが高くなると 考えられる。これは、小学生、大学生ともに、 誰かに認めてもらえること、受容されていると いう感覚を持つことが重要であるが、大学生は 成長とともに、広い人間関係を築くことが比較 的容易であり、たとえある人に受容してもらえ なくても、他にサポートを与えてくれる対象を 見つけられるとも考えられる。これらのことか ら, 小学生にとって, 特に身近な人に受容され ているという感覚を持つことが重要であり. ソーシャルサポートの受容がなくてはソーシャ

ルサポートの提供は十分に機能できない可能性 が考えられる。

M. 本研究の課題と展望

本研究の課題は、QOL尺度を因子ごとに解 釈しようとした際に、因子負荷量の低い項目が 多く、その項目を削除してしまうと信頼性係数 が下がってしまい. QOLを因子ごとに解釈す ることができなかったことが挙げられる。特に 因子負荷量の低かった項目から考えると、小学 生にとって、自分の精神的健康についてなど、 自分自身を客観的に捉えることが難しかった可 能性が考えられる。そのため、QOLの測定に 関して、小学生に理解されやすい尺度を使用す る必要がある。また、本研究ではソーシャルサ ポートの中でも、知覚されたサポートに目を向

文献

- Bullinger, M. (1991). Quality of life: definition, conceptualization and implications —a methodologist's view. Theoretical Surgery, 6,
- Cobb, S. (1976). Social support as a moderator of life stress. Psychosomatic Medicine, 13, 99-125.
- Cohen, S., Wills, T. A. (1985). Social support, stress and the buffering hypothesis. Psychological Bulletin, 98, 310-357.
- 福岡欣治(2010). 日常ストレス状況体験における 親しい友人からのソーシャル・サポート受容 と気分状態の関連性 川崎医療福祉学会誌, 19. 319-328.
- 福岡欣治(2003). ソーシャル・サポートの互恵性 に関する考察-認知レベルと実行レベルの区 別に焦点を当てて一 行動科学, 42, 103-
- Helgeson, V. S. (1993). Two important distinctions in social support: Kind of support and perceived versus received. Journal of Applied Social Psychology, 23, 825-845.
- 久田 満(1987). ソーシャル・サポート研究の動 向と今後の課題 看護研究, 20, 170-179.
- 久田 満・千田茂博・箕口雅博(1989). 学生用ソー

けた研究を行ったが、思いやりや親切行動を含 めた向社会的行動などの実行サポートに目を向 けた研究を行う必要があると考えられる。

今後の展望として、大学生におけるソーシャ ルサポートの受容と提供についての研究結果 と、本研究の小学生の結果は異なるものとなっ た。特に、ソーシャルサポートの提供に関し て、幸福感に及ぼす影響は大学生のほうが大き なものとなった。それには、小学生から大学生 という成長過程で変化が起きているとも考えら れる。このことから、中学生や高校生などの研 究を行い、成長過程とともに比較していくこと でソーシャルサポートの提供の意味が異なって くると考えられ、ソーシャルサポートの提供の され方を研究することに意味が出てくると考え られる。

- シャル・サポート尺度作成の試み(1) 日本 社会心理学会第30回大会発表論文集, 143-
- House, J. S. (2001). Social isolation kills, but how and why? Psychosomatic Medicine, 63, 273-274.
- 稲葉昭英・浦 光博・南 隆男(1987). ソーシャ ルサポートの研究の現状と課題 哲学, 85, 109 - 149.
- Koot, M. (2001). The Study of Quality of Life: Concepts and methods. In Koot,. M. & Wallander, L. J. (Ed.) Quality of Life in Child and Adolescent Illness: Concepts, Methods, and Findings, 3-20.
- 窪田俊介・石津憲一郎・下田芳幸 (2012). 学校生 活意欲とストレス、ソーシャルサポート、学 校生活スキルの関連について(1) -Q-Uの 各群間の担任イメージと学校適応- 教育実 践研究, 6, 65-76.
- Lyubomirsky, S. (2012). 幸福度を高める12の行 動習慣 金井真弓 (訳) 幸せがずっと続く12 の行動習慣 日本実業出版社 91-272.
- 森本寛訓 (2006). ソーシャル・サポートの互恵性 と精神的健康との関連について 川崎医療福 祉学会誌, 16, 325-328.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 (1993). 中学生に

- おけるソーシャル・サポートの学校ストレス 軽減効果 教育心理学研究. 41. 302-312.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・神村栄一・山本美樹・坂野雄二 (1992). 心理的ストレスに関する調査研究の最近の動向―教育現場におけるストレッサーの測定を中心として― 早稲田大学人間科学研究. 5, 149-158.
- Otake, K., Shimai, S., Tanaka-Matsumi, J., Otsui, K., & Fredrickson, B. L. (2006). Happy people become happier through kindness: A counting kindnesses intervention. *Journal of Happiness Studies*, 7, 361–375.
- Poulin, M.J., Brown, S.L., Dillard, A.J., Smith, D. M. (2013). Giving to Others and the Association Between Stress and Mortality. *American Journal of Public Health*, 103, 1649–1655.
- 齋藤恵美・神村栄一 (2008). 社会的スキルとソーシャル・サポート知覚が小学生の学級適応感に及ぼす影響 新潟青陵大学大学院臨床心理学研究, 2, 65-70.
- 齋藤美菜(2014). ソーシャルサポートの提供・受容が精神的健康と幸福感に及ぼす影響 平成26年度東北学院大学卒業論文.
- 柴田玲子(2014). 小学生版 QOL 尺度 古荘純一·

- 柴田玲子・根本芳子・松嵜くみ子(編)子どものQOL尺度 その理解と活用―心身の健康を評価する日本語版KINDLR― 株式会社診断と治療社 16-25.
- 柴田玲子・松嵜くみ子・根本芳子 (2014). 子ども の健康関連QOLの測定—KINDLRQOLの実用 化に向けて— 聖心女子大学論叢, 122, 110-85.
- 柴田玲子・松嵜くみ子・根本芳子 (2008). 子ども の QOL研究の現状 教育と医学, 56 (11), 1108-1114.
- 嶋田洋徳 (1993). 児童の心理的ストレスとコーピング過程―知覚されたソーシャルサポートとストレス反応の関連― ヒューマン・サイエンス・リサーチ, 2, 27-44.
- 鈴木伸子・松本真理子・坪井裕子・野村あすか・森田美弥子(2015). 小中学生における対人 葛藤解決法略とQOLとの関連―授業中の意見 相違場面に焦点をあてて― 愛知教育大学教 育臨床総合センター紀要, 6, 55-62.
- 山本理絵 (2010). 小学生の心身の健康状態に関する調査研究——不登校意識との関連を中心 に一 人間発達学研究. 1. 37-52.

Abstract

Effect of Providing and Receiving Social Support on QOL of Elementary School Students

Haruna Saito

Recently, the problems regarding to school refusal and apathy among pupils and students have been increasing in number, become more serious, and thus need some supports and precautionary measures. In my research, I focused on the social support which would influence the stress recognition among elementary school students. I used a questionnaire to examine the influence of supports on QOL, in terms of both by providing and by receiving such social support.

As a result, if the degree of providing and receiving social support was higher, QOL score became also higher. Thus, providing and receiving social support did influence QOL. Moreover, students who received high social support scored higher QOL than those who provided high social support. This result was different from previous studies with university students who would think providing support would lead to receiving support in future. Elementary school students are still halfway through development and they might not predict the future so much as adults do.

About receiving social support, it is important to be aware of being received or accepted by close people, for example, family, teachers, and friends, regardless of age. If we live longer, we can have much more human relations. And if a person doesn't help us, we will found another person who would help us instead. To keep high QOL, it needs to be received well by others. It is suggested that we should exercise ourselves in receiving social support from others to provide better social support to others.

MBT は精神分析的な実践であると言えるのか?

東 啓 悟

次 目

- 1. はじめに
- 2. 疑問の出発点:精神分析とMBTの対比
- 3. メンタライゼーション概念の成り立ち
- 4. MBTの治療構造
- 5. メンタライジング能力を向上させる精神分 析的な意義
- 6. 精神分析的実践としてのMBT:精神分析的 実践の連続体
- 7. 「表象モデル |
- 8. 精神分析的実践としてのMBT: 「心的過程 モデルー
- 9. おわりに

要 約

この論文において、私は「MBT は精神分析的 実践と言えるのか? | という主題について論じ た。まず最初に、私はMBTを精神分析的実践 と対比した。MBTは多くの点で精神分析的実践 とは異なっていることを明らかにしつつ、しか しMBTは精神分析にその起源を持っているこ とを示した。そのため、メンタライゼーション という概念が成立した歴史を振り返り、その概 念の例証には常に精神分析実践が引用されてい ることを示した。次に、私はメンタライジング 能力を改善することの意義を論じ、メンタライ ジング能力を改善することは精神分析的実践の 前提条件を整える作業、「発達支援」の作業で あることを示唆した。最後に、私は「表象モデ ル」と「心的過程モデル」に基づいて、MBTは 精神分析的実践と見なせると結論づけた。

キーワード: MBT. 精神分析. メンタライゼー ション. 表象モデル. 心的過程モ デル

1. はじめに

メンタライゼーションの理論とそれに基づく 治療 (Mentalization-Based Treatment, 以下MBT) (Bateman and Fonagy, 2004) が日本に初めて 導入されて、もう間もなく10年が経とうとし ている。元々は境界性パーソナリティ障害に対 する理論、パッケージ化された治療的アプロー チとして導入されたメンタライゼーションの理 論とMBTであるが、この10年の間にその適用 範囲は成人だけではなく子どもやその家族にま で広がり、また適用可能な疾患も境界性パーソ ナリティ障害だけでなく様々なパーソナリティ 障害やうつ病、摂食障害など多岐に渡るように なってきた。さらにMBTは医療領域だけでは なく、教育領域や福祉領域を始めとした多様な 領域へも応用がなされるようになってきてお り. 「汎用的アプローチ」(上地. 2015) とまで 呼ばれるようになってきている。こうした中で は当初はMentalization-Based Therapyと呼ばれ ることもあったMBTであるが、Allenら (2006) はパッケージ化された治療的アプローチを Mentalization-Based Therapy, 治療過程でメン タライジング(行為としてのメンタライゼー ション) への明示的注意を伴いつつ汎用的に実

^{*} 臨床心理学研究科 研究生

践されるアプローチをMentalization-Based Treatmentとして区分したりしている(本稿で「MBT」とあるときには基本的にはこちらを指し、その構造・形式を問わず、メンタライゼーションに基づいた臨床実践を総称して「MBT」と呼称することにする)。また上地(2015)はこのMBTを指して、それが「Treatment治療」以外の領域でも応用されていることを鑑みて、「メンタライジング・アプローチ」という名称を提唱している。

さて、MBTがこうした広がりを見せている中で、筆者は今改めて1つの疑問が検討されるべきではないか、と考えている。それは「MBTとは精神分析的な実践であると言えるのか?」という疑問である。藤山(2015)が週1回の精神分析的セラピーは「精神分析的」なのか、という問いを投げかけて以降、「精神分析らしさ」とは何かということが重要な問いとなった日本においては、この疑問はとりわけ検討する価値のあることではないかと筆者は考える。この疑問について検討することを通して、MBTとは何か、ということだけではなく、「精神分析らしさ」とは何か、ということを検討することにもなると思われるからである。

本稿では、「MBTとは精神分析的な実践であると言えるのか?」という問いに対して、筆者なりの回答を示していきたいと思う。

2. 疑問の出発点:精神分析とMBTの対比

「MBTとは精神分析的な実践であると言えるのか?」という問いについて検討するために、まずはその対比の対象となる精神分析、精神分析的実践について定義することが必要となるだろう。精神分析をどのように定義するのかということに関しては膨大な意見があるが、ここでは「精神分析事典」(小此木ら、2002)における小此木啓吾の記述を引用したい。そこには、「(1) 人間の夢、言葉、失錯行為、空想、記憶、症状など、心的現象の無意識的意味を解読する独自の心理学的な解明方法を言う。基本的には

自由連想法による解明を主とするが、その後、 自由連想法を用いないさまざまの観察方法(た とえば面接による精神療法、遊戯療法、乳幼児 観察など)を通しての解明も用いられるように なった。(2) 上記の心理学的解明方法を基本手 段とし、分析者と被分析者が治療契約と作業同 盟の下に、被分析者の心的葛藤、抵抗、転移、 逆転移、対象関係の認識とそれに対する治療者 の介入と解釈(再構成-伝達)による洞察を治 療機序とすることに特徴づけられ、毎日分析 (週4回)を原則とする精神分析療法」とある。

さてこうして定義される精神分析に対して、「MBTとは精神分析的な実践と言えるのか?」という疑問を基に対比するその出発点は、Bateman and Fonagy (2006) による「Mentalization-Based Treatment For Borderline Personality Disorder. —A Practical Guide—」の中の記述である。

この中で彼らは、「MBTは空想を扱うのか」という問いに対して、「空想を扱うことと自由連想はMBTの主たる要素ではない。洞察の促進はMBTで優先すべき目標ではないからである」と回答している。菊池(2012)が理論としてのメンタライゼーションと精神分析を対比させた際に述べている通り、精神分析の目標の1つは洞察を深めることであり、上記の小此木(2002)の定義の中でも洞察は治療機序として重要視されている。そのための主たる方法の1つが精神分析の創始とも言えるFreud.S(1895)の「ヒステリー研究」以来、自由連想法であることは上記の定義の通りである。

一方で、MBTが目標とするのは、洞察を促進することではなく、患者のメンタライジング能力を向上させることである。それが故に、Allen(2008)が「私たちが提案したいのは、精神療法家が過度な自由連想を放置しないようにすることである」と述べるように、MBTにおいては患者の無意識を探索する方法としての患者の自由連想はあまり重要なものとは見なされていないのである。Vermoteら(2012)が精神分析的なスタンスとMBTのスタンスを比較

して、MBTでは患者が自身や他者の心につい て考えられるように助ける際により積極的なス タンスを取る、としたことも、MBTが患者の 自由連想に任せることを重要視しないことの表 れと言えるだろう。

また. Bateman and Fonagy (2006) の中で は夢についても言及がなされている。「患者に 夢を報告するよう求めるか? | という問いに対 する彼らの回答は、「いえ、私たちは患者に夢 を報告するようには求めない」である。「夢の 解釈は、心の生活の無意識を知るための王道で ある」(Freud.S, 1900) とされた「夢解釈」以来. 夢もまた精神分析における重要なツールの1つ であるが、MBTでは夢もまたあまり重要なも のとは見なされていない (夢が報告された場合 に、それを用いない、というわけではない)。

MBTが自由連想も夢も重要視しないのは. そもそもMBTが無意識の探索を重要視しない から、とも言えるだろう。Bateman and Fonagy (2006) が述べるように、「MBTは対人関係に おける前意識的, 意識的側面をより重視する」 のである。Allen (2008) もまた「メンタライ ジングを促進する際に、私たちが最も関心を抱 くのは、対人的領域における心的機能の前意識 的・意識的な側面である」と述べている。小此 木(2002)による精神分析の定義の第一文に「心 的現象の無意識的意味を解読する」とあること とは、MBTと極めて対比的であると言えるだ ろう。

また、自由連想や夢と同じく精神分析におけ る最も重要なツールの1つであるとされる転移 の扱いについても、MBTと精神分析では対比 的であるかもしれない。Gabbard (2006) は MBTについて「転移解釈を避けることを特色 とする力動的精神療法 | と述べている。この Gabbardの論述のためか、MBTはしばしば「転 移を扱わない」と考えられてきた。「ヒステリー 研究」(Breuer.J and Freud.S, 1895) で当初は 抵抗として言及され、「あるヒステリーの分析 の断片」(Freud.S, 1905) の中では「転移は、 精神分析最大の障壁となるべく定められてはい

る。しかし、その都度転移を察知して、患者に 向けて翻訳することに成功すれば、 転移は精神 分析の最も強力な援軍ともなる | とされたよう に、転移は精神分析にとって不可欠なものとさ れている。その後のHeimann.P(1950)らクラ イン派による投影同一化の導入から本格化した 逆転移に関する議論も含めて、転移・逆転移関 係による理解をその理論展開の中心に置いてき た精神分析から見れば、転移を扱わないMBT を精神分析的と呼ぶことには大きな抵抗がある ことだろう。

もっともこの点については議論の余地があ る。詳しくは後述するが、メンタライゼーショ ンという概念が成立してきた歴史を振り返れ ば、そもそもメンタライゼーションという概念 は従来のような転移解釈が機能しない患者につ いて考察する中で生まれて来たものである。 MBTは転移を扱うのか、という問いに対する 回答は. Allen (2008) が述べるように「すべ ては「転移」の意味次第」であろう。つまり、 過去の行動の無意識的反復として転移を扱うこ とや、Joseph.B (1975, 1987) のように、患者 の自由連想における語りを治療者に対するもの として転移を扱うことはMBTでは確かに少な い。しかし患者-治療者間の関係性に焦点を合 わせるという意味でなら、MBTは転移を扱っ ていると言えるだろう。むしろ、患者 - 治療者 間の関係性はMBTにおいてメンタライジング 能力を向上させる素地として最も重要視されて いるものですらある。この意味で、Allen (2008) は「最終的には、転移における操作(work)に 向かって進むことが重要である | と述べている。

以上述べて来たように、MBTには精神分析 との対比において多くの相違が存在している。 それにも関わらず、MBTが基づいているメン タライゼーションという概念は、精神分析実践 から生まれて来た、という歴史を有している。 では次に、メンタライゼーションという概念が 成立した精神分析的実践の歴史を振り返りたい。

3. メンタライゼーション概念の成り立ち

メンタライゼーションの概念はFonagy (1991) による「Thinking about Thinking」という論文 の中で初めて公式に用いられた。この論文の中 で提示されている境界例の事例、Mr.Sは Fonagyによる精神分析の患者であった。Mr.S は当初分析家(Fonagy)による転移解釈を含 む解釈から利益を得ることが全く出来なかっ た。それは彼が自分自身を様々な思考や感情を 持った人間であるとは考えてもいなかったから であり、この機能障害のために、分析家からの 彼を理解しようとする試みは彼にはただ迫害と しか感じられなかった。Fonagyはこの「自分 自身(及び他者)を様々な思考や感情を持った 人間であると考える機能」こそがメンタライ ゼーションであると概念化し、この機能が障害 されていることによって境界例の病理を説明し たのである。またFonagyはこの論文の中で, メンタライゼーションの能力は先天的に持つも のではなく. 発達的に獲得していくものであ る、ということも示している。

このメンタライゼーションを獲得していく発 達過程を示す証左として提示されているのもま た精神分析実践であった。Fonagy and Target (1996) による「Playing with Reality: I」とい う論文の中では、レベッカという4歳の女児に 対するプレイセラピー過程から、メンタライ ゼーション理論における児童の心的発達過程が 示されている。レベッカの心的発達の過程は神 経症的理由により制止されてしまっていた。そ のため彼女の心的体験は「心的等価モード」 (世界=心であり、心的表象とそれが表す外的 現実とが区別されていない状態のために、夢や フラッシュバックのように、自身の精神状態が そのまま現実として体験されるモード)と 「Pretendモード」(精神状態は現実から分離さ れているが、ほぼ完全に分離されているため、 知性化などのように非現実的に体験されるモー ド) に分かれたままになっていたのだが、それ がFonagyとのプレイセラピーによって心的発達過程が再開され、その2つのモードが統合されてメンタライゼーションが確立していくプロセスが描かれている。

さらにこの「Playing with Reality:I」で提示した心的発達の過程が制止してしまい、メンタライゼーションが確立されていないという観点から成人の境界例病理を精緻化し直したのが「Playing with Reality:III」(Fonagy and Target, 2000)である。この論文で提示されているヘンリエッタという事例は重症の境界例であるとされ、驚くべきことに殺人を犯した女性なのであるが、このヘンリエッタとの実践もまた、最初の18ヶ月が週に1回であった後に週4回となっている精神分析の実践である。

このように、メンタライゼーションの理論、 及びその治療実践の例証は常に精神分析実践に よって示されてきたという歴史があるのである。

4. MBTの治療構造

しかしMBTとして日本に最初に導入された 際のメンタライゼーションの治療実践(こちら の「MBT」とは、先のAllenの定義によるとこ ろのMentalization-Based「Therapy」の方であ る)は、週に1回ずつの個人心理療法と集団療 法を軸とした集中的な外来プログラムと、芸術 療法などとも組み合わされた週に5日のデイ・ ホスピタルプログラムとしてパッケージ化され ており、しかもどちらも治療者個人ではなく チームによるアプローチが推奨されたもので あった (Bateman and Fonagy, 2004)。藤山 (2015) が精神分析の技法論について述べる中で. 「週 4回以上の頻度、カウチ設定、訓練分析を受け た分析家を基礎的設定として構築されたもの | としているように、こうした設定は精神分析の 基礎である。それと対比するパッケージ化され たMBTの治療構造は、おおよそ精神分析実践 とはかけ離れた治療構造である。Bateman and Fonagy (2006) では、治療プログラムを導入 する前の患者への心理教育プログラムも提示さ

れており、それもまた精神分析実践とは言い難 いものがあろう。

とはいえ、エビデンスが求められる昨今の精 神保健分野における圧力に対応する形でその効 果を実証しなくてはならないという中で、その 効果研究のために治療がパッケージ化されるこ とは致し方ないとも言える(実証研究によって その治療効果にエビデンスを持たせている。と いうこともまたメンタライゼーションの革新的 な特徴の1つなのであるが、この点については 本稿では触れることは控える)。そしてパッ ケージ化されることで本来の精神分析とはその 治療構造が異なるものになってしまうこともま た致し方ないことと言えるだろう。

しかし治療構造は別としてその構造の中で実 践されている内容について検討する際には. パッケージ化された形ではなく例えば调1回の 個人心理療法の中でMBTを行うことにもまた. 「それが精神分析的な実践であると言えるの か?」という疑問は付きまとう。その根拠は先 のMBTと精神分析との対比において示した通 りである。実際、先に挙げた「Plaving with Reality: III」(Fonagy and Target, 2000) の中 でFonagy自身もまた「ヘンリエッタと私自身 の間に起こったことは恐らく一般的に分析とし て見なされているものではないだろう」と述べ ており、メンタライゼーションに基づいた治療 実践が精神分析的と呼べるのかということに関 して疑問を記している。

5. メンタライジング能力を向上させる 精神分析的な意義

この疑問について検討するために、MBTに おいて目標とされているメンタライジング能力 の向上には、精神分析的にはどのような意義が あるのかを検討したい。

Freud.S (1914) は分析状況における転移を 無害な遊び場、中間領域と表現しているが、こ こでは転移を「無害な」遊び場として見る能力、 中間領域として見る能力が患者に備わっている

ことが前提となっている。こうして遊び場、中 間領域とされる転移を解釈していくことが精神 分析でなされるワークなのであるが、しかし Fonagy (1991) は先の「Thinking about Thinking」 において「解釈というものは、過去から引き出 され、今ここで再体験され、そして共有される 治療的タスクの主題となれる思考や幻想を持つ ものとしての自分自身を観察できる能力が患者 にあることを想定している | と述べている。こ の能力こそがメンタライジング能力なのであ り、この論文の事例であるMr.Sは、この機能 が制止してしまっていたために、自分自身を 様々な思考や感情を持った人間であるとは考え ることが出来なかった。Mr.Sにとって転移と は「無害な」遊び場ではなく現実そのものであ り(心的等価モード). 従って精神分析におけ る介入の最たるものである解釈は彼にとって迫 害にしかならなかったのである。ここからわか るのは、菊池(2012)が指摘するように、精神 分析の技法は、被分析者がメンタライジング能 力を備えているということを暗黙の前提として いる、ということである。

同じようにFonagyら (1993) は、Mrs.Tとい う事例 (これもまた精神分析の事例である) を 提示した上で、「最初の5年か6年の間、私は彼 女に分析が適切なのかどうか、頻繁に疑った。 私の通常の分析的技法は彼女に何の影響も与え ることが出来ず、技法的困難を理解するのに役 に立つ診断に到達することが出来なかった。 (中略) 最終的に彼女との取り組み方を私に見 つけさせたのは、私の子どもたち、特にアン ナ・フロイト・センターで「発達援助 developmental help」を受けていた子どもたちとの経 験だった、と私は感じるようになった」と述べ ている。菊池 (2012) によれば、発達援助の技 法はメンタライジング能力を持たない重症の子 どものために開発されたものであるという。 Fonagyら(1993)は、Mrs.Tにはその生育史の 中で精神機能の発達を含む精神過程の制止が起 きていたと述べ、その上で「Mrs.Tのような ケースにおける治療的活動は、脱抑制か制止さ

れた精神機能の再活性化によって生み出される」と述べている。つまり、「脱抑制か制止された精神機能の再活性化」が、大人のケースにおける「発達援助」というわけである。

Mr.SとMrs.Tの事例で共通して言えることは、こうしたメンタライジング能力が不十分なことに対するアプローチがなされた後に、通常の精神分析技法である解釈などが有効に機能するようになった、ということである。Mr.SやMrs.Tの事例においてなされたこうしたアプローチは、今で言うところのMBTの原型とも言えるものだろう。先に挙げた「Playing with Reality: I」(Fonagy and Target, 1996)の中のレベッカの場合にも、精神機能の発達が神経症的な理由により制止してしまっていたためにこれは「精神過程の制止」であり、それを健常な発達ルートに戻した、という意味でやはり「発達援助」的なものによって、メンタライジング能力の適切な発達を促していたと言える。

ここまでくれば、MBTが目標とするメンタライジング能力を向上させることの精神分析的な意義が見えてくるだろう。つまりVermoteら(2012)が入院設定での精神分析的治療のケースであるMs.Aという事例を挙げて「Ms.Aの例は、彼女の行動化を扱うのにMBTがどのように役に立つかを示しており、その後に精神分析療法の過程と治療が可能となった」と述べているように、MBTは精神分析が有効に機能するための前提条件であるメンタライジング能力を回復、あるいはその発達を再活性化させているのである。

6. 精神分析的実践としての MBT: 精神分析的実践の連続体

さてそうなると問題はMBTがしている精神 分析が有効に機能するための前提条件を整える という作業,発達援助的な技法は精神分析的と 呼べるのか,精神分析的実践に含まれるのか, という議論へと移行することになるだろう。こ の議論は恐らく意見が分かれるところであろう が、筆者はこうした作業もまた精神分析的実践 に含めることを提案したい。これが本論文にお ける筆者の結論である。以下ではその根拠を提 示していきたい。

まず、Gabbard (2010) は精神力動的精神療 法における治療者の介入を、表出的-支持的連 続体に基づいて概念化している。この連続体の 一方の極は支持的なもので、そこには「助言と 賞賛 | や「心理教育的介入 | が配されており、 もう一方の極は表出的なもので、そこには「解 釈」や「観察」などが含まれている。ここで提 案されているのは、精神力動的実践を連続体と して考える考え方である。また同じように Pinsker (1997) は個人サイコセラピーをスペ クトラム化し. 「片方の極は正統派精神分析で ある | とし、その対極には「サポーティブ関係 | を置いている。「力動的」という表現と「精神 分析的」という表現が同じものを指しているの かということに関する議論はさておいて、彼ら は共通してより精神分析的で探索的、表出的な 技法やセラピーと、より支持的な技法やセラ ピーを同じ連続体として捉えることを提案して いる。

こうした考え方は、自我心理学が花開いたアメリカにおいて特徴的なものであるのかもしれない。先に述べた「発達援助」の技法は主にアンナ・フロイト派の分析家が用いたものであるが、妙木(2010)が述べた通り、Freud.Aは英国よりもアメリカの精神分析、力動精神医学に大きな影響力を及ぼしている。彼らの言う「支持的」という表現は「自我支持的」と言って差し支えないものであり、その技法は力動的心理療法の一部として認識されている。

池田 (2013) はメンタライゼーション理論について、「メンタライゼーション理論はSandler の表象論に基づく自我心理学の更なる精緻化である」と述べており、メンタライゼーション理論とMBTは精神分析の歴史からすれば自我心理学の発展形として位置づけられる。メンタライジング能力の不全を自我機能の不全、自我欠損の一部と考えれば、その機能の回復、発達を

再活性化させるMBTは自我支持的なアプロー チであり、精神分析的な実践であると言えるの ではないだろうか。

7. 「表象モデル」

もう1つ筆者が提示したいのは、Fonagyら (1993) が「表象」という見地から精神分析に ついて考察して示した. 精神分析的治療におけ る2つのモデルである。

狩野(1999) は表象を「われわれは、ある体 験を集積し、これはこういう体験だというふう に整理したり、平均化したり、つまり抽象化 し、表象に書き込む。そのさい、体験のプロト タイプとなるようなものが表象であり、それは 一定の構造をもっていると考えられる | と定義 する。また「心的表象は、記憶痕跡を心的に組 織化したものである。記憶痕跡は内側と外から の刺激にかかわる体験や主体の反応に由来する が、それは出来事の記載以外のなにものでもな いのに対し. 心的表象は体験の単純な複製以上 のものを含んでいる」ともしている。また心的 表象論を概観する中で狩野(1995)は一般哲学 で用いられる場合と精神分析の用法で用いられ る場合の違いについて言及し、「精神分析では、 無意識の表象という考えをする。つまり必ずし も主体的、意識的に思い描くような表象ではな い」と述べている。Fonagy (1993) は表象に ついて、「それらは我々の過去の体験を蓄積し ているだけでなく、我々の知覚をガイドし、 我々の内的・外的世界に関する我々の体験に影 響する | としている。

さて、Fonagyら(1993)は先に述べた通り、 この表象という概念の見地から、精神分析的治 療の2つのモデルを記述した。1つ目は「表象 モデル」と呼ばれるモデルである。このモデル は「恐ろしい考えや感情を回復させ、その結果 として生じる. 精神分析過程の説明において一 般的に用いられる精神構造の再組織化に関わる 精神的メカニズムに焦点を当てている」とされ ている。Fonagyら (1993) はサムという子ど

もの臨床例を提示することで、その治療モデル について説明している。それによれば、拒絶さ れた精神表象を現在の思考へと「統合」し、精 神表象間の関係を確立し理解する過程の基礎と なる関係のネットワークを構築することで精神 表象を「精緻化」し、患者の拒絶された精神表 象が転移された治療者と共に、患者がその精神 表象についてワークするそのプロセスを通し て、患者が以前には受け入れられなかった体験 が調停されることで「新たな表象構造の創出| がなされるという治療モデルが、表象モデルで あるとされている。

この治療モデルに示されるプロセスでは、患 者の拒絶された精神表象は、分析家への転移、 及びその解釈を通して変容. あるいは再創造さ れていく。つまりこのモデルによって提示され ているのは、いわば我々が従来精神分析として 考えているモデルであると言える。このモデル で治療される患者は、表象を創造するそのプロ セス自体は機能しており、そのために「表象は 表象である」ということを前提として. 分析家 との関係性の中で表象を再創造することが可能 となると言える。

8. 精神分析的実践としての MBT: 「精神過程モデルー

では、そもそも表象を創造するプロセス自体 が機能していない患者の場合にはどうなのか。 こうした患者の場合、抑圧された、あるいは他 の歪んだ精神表象を除去することによる精神分 析は機能しない, とFonagyら (1993) は述べ ている。そして彼らはそうした患者らに対する 諸家の技法的修正について概観し、それら修正 された技法について「早期の母子関係を強調 | しており、「発達過程が呼び覚まされる」もの であるとしている。「精神表象は、それらを生 み出し組織化する*心理学的過程*からは不可分で ある」と彼らは述べ、表象をメロディーに、そ のメロディーを生み出し奏でる心理学的過程を バイオリンになぞらえている。奇しくも藤山 (2015) もまた「精神分析らしさ」について語る中で、週複数回という頻度が生み出す音楽に精神分析を喩えている。この「表象を生み出し組織化する心理学的過程」、メロディーを奏でるバイオリン、(頻度は足りていたとして)音楽を生み出す楽器そのものが機能しない患者に対する治療モデルとして提示されたのが、Fonagyら(1993)の提示した2つ目の治療モデル、「精神過程モデル」なのである。

いわゆる「難しい」患者たちについて語る際 のキーワードとして、彼らは「精神過程の制止」 という概念を提示した。この概念が示すのは、 「精神表象に両親の精神機能が存在しないと思 われる状況」であるとし、「そのようなケース では、不快を生み出す精神表象が中心的になり 過ぎるがために、意識の一部となる表象システ ムの中核から隔離することが出来ず、従って子 どもは、精神表象の分類を創り出す精神過程全 体から撤退. あるいはそれを制止してしまう | と述べている。先に紹介したFonagyら(1993) によるMrs.Tに対する治療において示されてい たように、精神分析的実践の前提となるメンタ ライジング能力の発達が不十分な場合には、そ の発達不全の要因となっている「精神過程の制 止」を再活性化させること、発達援助的な技法 がまず必要となると言えるだろう。Fonagyら (1993) は、「利用できない、制止された精神過 程という概念は、子どもに対する精神分析的作 業と成人に対する精神分析的作業との間により 好ましい概念的な架け橋を提供し、「発達支援」 が満足させたり教育することではなく. 真に精 神分析的な作業であることを示している」と述 べることで、この制止された精神過程を再活性 化させる「発達支援」が精神分析的実践である ことを示している。これこそが「精神過程モデ ル」における治療なのである。

ではここで、短くではあるが、筆者が体験し た症例を提示したい。

症例報告

患者Aは些細なことで不機嫌になる、イライ

ラして自傷行為をするなどを主訴とした20代前半の境界性パーソナリティ障害と思われる女性である。Aは小さいころから食卓を共に囲んだことがなく、暴力や「存在を否定される」ような暴言が日常茶飯事な家庭で生育した。中学生ころより自傷行為を開始するようになったが、その理由はわからず、しかし「何かわからないけど落ち着く」のだと言う。大学に入学後に初めて男性との交際を開始したが、交際開始から少しして、彼氏との間で上記のような主訴が顕著になった。

アセスメント面接では、彼氏との間で不機嫌になった話や自傷行為の話などになると、「何でそうなるのかわからない…」と、筆者の目の前で情緒不安定になり、流涙した。筆者は情緒統制の困難や主体性、同一性の希薄さなどから境界性パーソナリティ障害と見立て、心理療法を開始した。

心理療法の開始後も、Aは自傷行為の話など になると情緒不安定になったり、解離様の状態 を見せるなどして、自身の情緒を語ることがほ とんど出来なかった。自傷行為も「怒られると 思って」事後的に報告されることがほとんど だった。あるセッション、Aは再び「昨日死の うと思った」と虚空を見つめながら無表情に 語った。筆者がその際のエピソード、情緒を問 うと、Aは苛立ち「自分で考えて、と言われて もわからない。良くなるためにここに来ている のに、何のためにここに来ているのかわからな い」と涙を流しながら筆者に不満を訴えた。こ の数回後、Aの自傷行為は首を切る、というと ころまで悪化した。これについて「命に関わる こと」と伝えた筆者に対して、Aは「私の命っ てそんなに重いですか?」と尋ねたのだった。 筆者が「私があなたの命を軽いものと考えてい る、とあなたが思っているように、私には思え ました」と伝えると、Aは「違うんですか?」 と驚きをもって応じて見せた。

これ以降、Aが筆者に抱いている思いが話し合いのテーマとなった。Aは筆者に対して、「自傷を怒られると思っている」「来るのを迷惑と

思っているのではないかしなどの思いを持って いることを語った。筆者は、筆者のどこからそ のように感じられたのかなどを、その場でAと 共に探索していった。また自傷のエピソードな どが語られ、Aが面接場面で情緒不安定になっ た際には、面接場面自体を振り返り、Aが筆者 とのやり取りのどこでどのように感じたのかな どをその場でAと共に探索していった。その際 に、Aがどのようなことを思い、どのようなこ とを感じていたとしても、筆者は「それであな たは寂しく感じたのだね」などと、その思いを 一旦は支持していった。同様に、彼氏との間で の自傷行為や情緒不安定になったエピソードに ついても、まずは出来事や双方の発言などを振 り返り、そこから1つ1つ情緒の流れなどを追 う. という作業を繰り返した。

この作業を繰り返す中で、Aは次第に「誰に 対しても「どうせ私のことは大事じゃないんで しょしと思っているしことや、その思いから自 傷に至ることが多いことなど、わからないもの だった自身の思い、情緒をわかるようになって いったのだった。

親から「自分の存在を否定される」ような言 葉をかけられ続けたというAの自己表象は、自 身の命すら軽視してしまうような「存在を否定 されるような無価値な自分」という、あまりに も不快なものだったのだろう。それが中心的に なり過ぎたがために、Aは表象を形成するプロ セスそのものを止めざるを得なかったものと考 えられる。また表象が体験の集積から形成され ていくことは先の狩野(1999)の定義の通りで あるが、自身についての言及が「自分の存在を 否定される | 体験の集積でしかなかったAに とって、筆者からのAへの言及もまた、Aに とっては「自分の存在を否定される」ような迫 害的な体験だったのだろう。こうしてAにとっ ては、自身についての言及から表象を形成する という精神過程そのものが迫害的であり、その プロセスから撤退するしかなかったものと考え

られる。この精神過程の制止により、Aは精神 発達の過程で獲得するはずだったメンタライジ ング能力を十全に獲得することができず、自ら の情緒のわからなさや情緒統制の困難、さらに はそれらによる自己表象形成の不全から主体性 や同一性が脆弱な状態となっていたものと思わ れた。

さらに、先のFonagy (1991) によるMr.Sの ように、メンタライジング能力が不全なAに とっての筆者は、「実際に」患者の命を軽いも のと考えていたのだろう (心的等価モード)。 それは確かに親転移であると考えられる。しか し「実際に」筆者にそう思うAに対して、親転 移としての解釈を伝えることは、まさにそう 思っているAの「存在を否定する」ことになる 迫害的なものとなっただろう。同様に、彼氏と の間に抱く思いは筆者に対する転移感情と理解 することももちろん可能だろうが、 それを筆者 に対する転移として解釈することもまた. Aに とっては「自分の存在を否定される」体験と なっただろう。

Aが示した思いを転移として解釈するのでは なく一旦は支持し、また出来事と共にAの思い を1つ1つ振り返るという途方もない作業を繰 り返したことで、Aは初めて「自分の存在を否 定される | ことなく自身について言及されると いう体験をやり直すことが出来たのだろう。こ こにおいて初めてAは、自身の表象を形成する ための情緒、体験の集積という精神過程を再活 性化することができたものと考えられる。

先に提示したように、Fonagy (1991) はメ ンタライジングの能力は先天的に有するもので なく、発達的に獲得していくものであると述べ ている。メンタライジング能力の中には表象は 表象に過ぎず、現実ではない(心的等価ではな い)と弁別出来る能力も含まれているが、表象 を発達させるその精神過程そのものが制止して いる場合には、メンタライジング能力の発達も 当然ながら阻害されてしまうことになる。先に 述べた通り、メンタライジング能力は精神分析 の前提となる能力であり、音楽を奏でるための

楽器の1つである。その精神過程を再活性化させる「発達支援」が精神分析的実践であるとすれば、メンタライジング能力を回復させ、その発達を促すMBTもまた、精神分析的実践と呼べるものなのではないだろうか。

9. おわりに

以上,筆者はMBTを精神分析的実践に含めることを結論として提示し、その根拠を述べてきた。最後に、逆説的であるかもしれないが、MBTを精神分析的実践に含めることにどのような意義があるのかについて述べてみたい。

これまで述べてきた通り、MBT は精神分析 実践の前提となる能力、メンタライジング能力 の回復、発達を目的とした実践である。「精神 過程の制止」(Fonagy ら、1993)によって不全 となったメンタライジング能力を回復させるこ とは、精神分析実践にとっても意義のあること であるが、しかし何よりもまず、精神過程が制 止されていて、メンタライジング能力が不全で あるということは、そうした状態にある患者に 甚大な影響を及ぼしている(Fonagy ら、1993) ことが最も重要な点であろう。

そして今日,我々臨床家はこうした甚大な影響を受けた,いわゆる「難しい」患者たちに臨床現場で多々出会っている。そうした患者たちと出会い,臨床家はどうにかして彼らの助けとなろうとあがき,もがく。さらにこうした患者たちに出会う場は,構造化されていない。ということが多い。構造化されていない,ということでもあるだろう。しかしそれでも臨床

家たちは、そうした患者たちを支援するための 枠組みとして、精神分析的臨床実践やその理論 を求める。何故か、それは精神分析的臨床実践 が真に心と心の対話を通した実践であり、そし てまたそうした難しい患者たちを真に支援する ためには、心の交流が不可欠であることを臨床 家たちが直観しているからではないだろうか。

Freudの時代と違い、現代の臨床現場ではむ しろこうした「難しい」患者たちが主ですらあ るだろう。しかし狩野(1999)が、「従来精神 分析は、技法の変化に関して、他のいろいろな 精神療法が「新しい技法」を声高に提唱してき たのにくらべると. ひどく慎重で明言を避けて きた |. 「よい治療をしていても技法は「従来ど おり」という発表が多かった」と述べる一方で 「しかし、確かに変化している事柄がある」と 述べるように、その治療技法や理論は歴史的に 適宜修正、追加されてきたはずである。そうし た歴史や現代の臨床現場での実際を鑑みれば. Freudの時代の精神分析理論、従来の精神分析 理論と、メンタライゼーション理論やMBTの ような、現代の臨床現場での実態によりフィッ トすると思われる理論や技法を、同じ精神分析 的実践という連続線上にあるものとして考える ことは、非常に意義のあることであると、筆者 は考える。精神分析的実践やその理論的枠組み を求めてきた臨床家たちが、それを学ぶ中で連 続的にメンタライゼーション理論やMBTに触 れられるようになることは、彼らが接する患者 たちに対する理解、技法をより充実したものに することとなるだろう。そこにこそMBTを精 神分析的実践に含める意義があると、筆者は考 える。

参考文献

Allen J G. (2006): Mentalizing in practice. In Handbook of Mentalization-based Treatment. John Wiley & Sons. (狩野力八郎監修/池田暁史訳(2011): メンタライゼーション・ハンドブック――MBTの基礎と臨床, 3-41. 岩崎学術出版社)

Allen J G., Fonagy P., & Bateman A. (2008):
Mentalizing in clinical practice. American Psychiatric Publishing. (狩野力八郎監修/上地雄一郎・林 創・大澤多美子・鈴木康之訳 (2014):メンタライジングの理論と臨床. 北大路書房)

- Bateman A., Fonagy P. (2004): Psychotherapy for Borderline Personality Disorder: Mentalization-Based Treatment. Oxford University Press. (狩野力八郎,白波瀬丈一郎監訳 (2008):メンタライゼーションと境界パーソナリティ障害——MBTが拓く精神分析的精神療法の新たな展開、岩崎学術出版社)
- Bateman A., Fonagy P. (2006): Metalization-Based Treatment For Borderline Personality Disorder— A Practical Guide. Oxford University Press.
- Breuer J., Frued S. (1895): Studies on hysteria. In S.E.2. (芝伸太郎訳 (2008) ヒステリー研究. フロイト全集 2. 岩波書店)
- Fonagy P. (1991): Thinking about thinking: Some clinical and theoretical considerations in the treatment of a borderline patient. The International Journal of Psychoanalysis 72, 1–18.
- Fonagy P. and Target M. (1996): Playing with reality I: Theory of mind and normal development of psychic reality. The International Journal of Psychoanalysis 77, 217–233.
- Fonagy P. and Target M. (2000): Playing with reality III: The Persistence of Dual Psychic Reality In Borderline Patients. The International Journal of Psychoanalysis 81, 853–873.
- Fonagy P. et al. (1993): The Roles of Mental Representations and Mental Processes in Therapeutic Action. Psychoanalytic Study of Child 48, 9-48.
- Freud S. (1900): Interpretation of dreams. In S.E.4-5. (新宮一成訳 (2007, 2011): 夢解釈 I, II. フロイト全集. 岩波書店)
- Freud S. (1905): Remenbering, remembering and working through. In S.E.12. (藤山直樹監訳, 鈴木菜実子訳 (2014): 想起すること, 反復すること, ワークスルーすること. フロイト技法論集. 岩崎学術出版社)
- Freud S. (1905): Fragment of an analysis of a case of hysteria. In S.E.7. (渡邊俊之, 草野シュワルツ美穂子訳 (2009):あるヒステリー分析の断片.フロイト全集6. 岩波書店)
- 藤山直樹 (2015): 週1回の精神分析的セラピー再 考. 精神分析研究. 59(3), 1-8.
- Gabbard G. (2006): When is transference work useful in dynamic psychotherapy? The American

- Journal of Psychiatry. 163, 1667-1669.
- Gabbard G. (2010): Long-term Psychodynamic Psychotherapy: A Basic Text, Second Edition. American Psychiatric Publishing. (狩野力八郎 監訳・池田暁史訳 (2012): 精神力動的精神療法 基本テキスト. 岩崎学術出版社)
- Heimann P. (1950): On counter transference. The International Journal of Psychoanalysis 31, 81– 84.
- 池田暁史 (2013): 愛着理論とメンタライゼーション. 精神分析研究. 57(1), 12-21.
- Joseph B. (1975): The patient who is difficult to reach. In Spillius, E.B. (Eds)(1988): Melanie Klein Today, Vol. I.
- Joseph B. (1987): Projective identification—some clinical aspects. In Spillius, E.B. (Eds)(1988): Melanie Klein Today, Vol. II.
- 上地雄一郎 (2015): メンタライジング・アプローチ入門——愛着理論を生かす心理療法——. 北大路書房.
- 狩野力八郎(1995): 心的表象論. 狩野力八郎 (2009): 方法としての治療構造論 精神分析 的心理療法の実践. 金剛出版.
- 狩野力八郎 (1999): 心的表象としての自己の病理. 狩野力八郎 (2009): 方法としての治療構造 論 精神分析的心理療法の実践. 金剛出版.
- 菊池裕義 (2012): メンタライゼーション理論の導入: なにが精神分析理論と違うのか. 臨床心理学研究. 10, 133-147.
- 妙木浩之 (2010): 自我心理学 米国精神分析の歴 史的展望. 妙木浩之編著 (2010): 自我心理 学の新展開 フロイト以後, 米国の精神分 析. ぎょうせい.
- 小此木啓吾編 (2002): 精神分析事典. 岩崎学術出版. Pinsker H. (1997): A PRIMER OF SUPPORTIVE PSYCHOTHERAPY. The Analytic Press. (秋田 恭子・池田政俊・重宗祥子訳 (2011): サポー ティブ・サイコセラピー入門 力動的理解を 日常臨床に活かすために. 岩崎学術出版社)
- Vermote R. et al. (2012): Psychodynamically Oriented Therapeutic Settings. in Bateman A., Fonagy P. (Eds), HANDBOOK OF Mentalizing in Mental Health Practice, 247–269. American Psychiatric Publishing.

Abstract

Can MBT be Regarded as Psychoanalytic Practice?

Keigo Azuma

In this paper, I discussed the subject that "Can MBT be regarded as psychoanalytic practice?". At first, I contrasted MBT with Psychoanalytic practice. Although MBT is different from Psychoanalytic practice in many ways, it has the origin in psychoanalysis. So, the history of the concept of mentalization was reviewed. Next, I discussed the intent of improving mentalizing capacity, and I suggested that improving mentalizing capacity was the precondition for psychoanalytic practice. Finally, I argued that MBT was able to be regarded as psychoanalytic practice. I insisted the conclusion in terms of "the representational model" and "the mental process model".

東京国際大学大学院臨床心理センター活動報告 (2016 年度)

臨床心理学研究科長 小田切紀子

<沿革・施設>

東京国際大学大学院臨床心理学研究科付属の臨床心理センターは2000年5月,高田馬場駅前のビルの3階にオープンした(新宿区高田馬場1-28-10)。翌年の2001年4月,臨床心理学研究科が西早稲田(新宿区西早稲田2-6-1 東京国際大学早稲田キャンパス)に開設されたことに伴い,同じ早稲田キャンパスの3階に移転し活動していた。その後,2011年9月末に機能の一部を,人間社会学部と同じ第2キャンパス(埼玉県川越市的場2509 東京国際大学第2キャンパス22号館)に移し,それに伴い臨床心理センターも移転した。

川越キャンパスの臨床センターは、早稲田キャンパスの臨床センターでの基本方針と臨床的設定を継承している。具体的には、受付、待合室、インテーク室(1室)、面接室(4室)、プレイルーム(3室)で構成されている。面接室はそれぞれの部屋によってやや異なった雰囲気になっており、箱庭療法や心理検査、心理療法に対応できるようになっている。インテーク室や面接室はすべて適切な広さの部屋で、ソファーセットや心理検査用の机と椅子などが設置されている。箱庭療法を行うことのできる面接室には箱庭と充実したフィギュアが揃えられている。プレイルームも、子どもが独創的な遊びを展開しやすいように工夫されている。

<運営体制>

2016年3月までは、臨床センターの運営は運営委員会が行っていた。2016年度の運営委員会は、臨床心理学研究科の6名の専任教員(溝口純二:センター長、大矢泰士:副センター長、中村留貴子、田中信市、妙木浩之、小田切紀子)によって構成されていた。運営委員は、センターの運営方針や院生に対する教育方針などを共有し、協議しながら、運営と指導に当たっている。また、センターには、3名の臨床経験豊かな臨床心理士がインテーカーとして勤務している。さらに、受付スタッフが常時1名いて、毎日来談者の窓口、院生たちの対応をしながら、さまざまな事務的処理も担当し、センターの円滑な運営に大きく貢献している。

センターの運営に際して、とくに力を入れているのはスーパーヴィジョン体制の充実と活用である。院生がセンターで事例を担当するときには、必ず運営委員が定期的なスーパーヴィジョンを行っている。スーパーヴィジョンは心理療法だけではなく、心理検査についても行っており、心理検査のバッテリーの組み方や解釈の実際、報告書の書き方にいたるまで、個別に指導するようにしている。

また、月に1回、月曜日6限にケースカンファレンス(事例検討会)を開催している。このカンファレンスには、臨床心理学研究科の教員と在学中の院生に加えて、修了生たちも多く参加しており、修了後研修の場として活用されている。そこでの相互ディスカッションや教員によるコメントも貴重な研修の機会になっている。

<2016年度相談件数・相談内容>

2016年度の全相談件数は、94件(表1)であり、相談内容別に見ると上位3つは、親子関係23件、不登校22件、性格・対人関係16件であった。地域の医療機関や相談機関から紹介された心理検査だけの依頼も4件あった。のべ相談回数(表2)では、成人(18-49歳)が329回と最も多く、青少年

(13-17歳) 211回,幼児・児童(-12歳) 130回となっている。本センターでは,親子並行面接を提供しており,子どもの不登校や発達障害などの問題を抱えて来談する家族に対しては,親には親面接,子どもにはプレイセラピー(遊戯療法)などを行っているため児童や青少年の相談件数が多くなっている。

新規相談件数(表3)は、46件であり、幅広い内容の悩みを抱えて本センターに来室されていることがわかる。また、新規来談者の経路(表4)を見ると医療機関14件であり、本センターが地域に周知されつつあることが理解できる。その次が、パンフレットとインターネット(大学HP)であり、パンフレットの作成と郵送、本センターのHPの充実が重要であることが理解できる。

以上のように、来談者の年齢層や相談内容は多岐に渡り、深刻な内容の心理相談に応じたり、相 談期間も年度を超えて長期にわたることもあるが、臨床心理士を目指す院生たちにとっては貴重な 心理臨床を修得する場となっている。

表 1 2016年度全相談件数

(相談内容別内訳)

(人)

	(人)
相談内容	件数
性格・対人関係	16
ひきこもり	2
抑うつ	2
情緒不安定	2
ADHD	4
自閉症	2
親子関係	23
家庭内暴力	2
育児教育	5
不登校	22
職場不適応	1
家庭内盗癖	2
起立性調節障害	1
発達障害	2
生活相談	1
夫婦関係	1
学校生活	1
不明	1
心理検査のみ	4
合 計	94

X = Z = HINLIX			
	相談件数	延べ 面接回数	主な相談内容
幼児. 児童 (~ 12)	14	130	親子関係. 不登校. ADHD. 性格·対人関係. 家庭内暴力
青少年(13~17)	16	211	親子関係. 不登校. 性格·対人関係. 発達障害. 自閉症. 学校 生活
成人 (18~49)	49	329	親子関係. 不登校. 情緒不安定. 性格・対人関係. 発達障害. ひきこもり. 家庭内盗癖. 育児教育. 抑うつ. 自閉症. ADHD. 職場不適応. 夫婦関係
壮年期以上(50~)	11	44	親子関係. 不登校. 生活相談. ひきこもり. ADHD
心理検査のみ	4	0	
合計	94	714	

表3 2016年度新規相談件数

(相談内容別内訳)

(人)

相談内容	件数
性格・対人関係	6
ひきこもり	2
抑うつ	2
ADHD	1
自閉症	2
親子関係	9
家庭内暴力	2
育児教育	5
不登校	8
職場不適応	1
生活相談	1
夫婦関係	1
学校生活	1
不明	1
心理検査のみ	4
合計	46

表4 2016年度新規来談者経路

(人)

	()()
来室経路	来談者
パンフ・インターネット	13
知人から	3
教育機関	4
医療機関	14
行政機関	4
学内関係者	1
センター利用者から	2
不明	5
合計	46

修了生

黑張有森池小大菅飯木本吉 上田竹原伏郁勇

井永綾新市加木寺端野田井川藤原沢

博士課程後期

王怡今池田有加里申ジンア

博士課程前期

日齋植林内遠佐馬宇今野原下藤松 田藤藤場川村沢下藤松 田藤藤場川村沢

センター長

溝 口 純 二

<u>インテーカー</u>

中 田 香 織 (臨床心理士) 桑 原 葵 (臨床心理士) 花 里 由紀子 (臨床心理士)

副センター長

大矢泰士

センター運営委員

田 中 信 市 中 村 留貴子 妙 木 浩 之 小田切 紀 子

○東京国際大学大学院紀要編集及び刊行に関する規程

2016年9月30日制定

(目 的)

第 1 条 この規程は、東京国際大学(以下、「本学」という)大学院における教育研究を助長し、学術的な教授研究の成果を学会及び広く社会に公表する手段として刊行する学術雑誌(以下、「大学院紀要」という)の編集・刊行に関する事項及びその他関連事項を定めることを目的とする。

(名 称)

- 第2条 本学が編集・刊行する大学院紀要は、次の2編とする。
 - (1) 『人文·社会科学研究—東京国際大学大学院』 (英語名称:The Graduate School Bulletin of Social Sciences and Humanities, Tokyo International University)
 - (2) 『臨床心理学研究—東京国際大学大学院臨床心理学研究科』(英語名称: The Graduate School Bulletin of Clinical Psychology, Tokyo International University)

(編集・刊行組織)

- 第 3 条 大学院紀要の編集及び刊行は、本学 FD 委員会(以下、「委員会」という) の責任において行う。
 - 2 委員会の下 FD 委員及び研究科長により構成される「大学院紀要編集会議」(以下,「編集会議」 という)を置き、委員長の指示により編集及び刊行の実務を担当せしめる。
 - 3 「大学院紀要編集会議」の責任者は、FD 委員の中から委員長が推薦し学長が指名するものとし、本規程における委員長の職務を都度委嘱することができる。

(掲載する学術的な教授研究成果の種類)

第4条 大学院紀要に掲載する学術的な教授研究の成果は、学術論文、研究ノート及びその他学術研究 の成果と委員長が編集会議の意見を徴し判断したもの(以下、「大学院紀要掲載論文等」という) とする。

(査読制度等)

- 第 5 条 大学院紀要掲載論文等のうち「学術論文」については、査読制度により掲載の可否を判定する ものとする。
 - 2 学術論文の査読は、委員長の嘱託する査読審査委員が行う。

(査読制度の非適用)

第 6 条 学術論文を除く大学院紀要掲載論文等については、前条の査読制度は適用しない。但し、編集 会議は、大学院紀要掲載論文等の形式等につき、著者に修正を指示することができるものとし、 当該指示に正当な理由なく著者が従わない場合、掲載を認めないことがある。

(寄稿資格)

- 第7条 大学院紀要への寄稿資格を有する者は、次の各号に定める者とする。
 - (1) 本学大学院研究科に所属する学生
 - (2) 本学大学院研究科修了後3年以内の者
 - (3) 前各号の他、編集会議の意見を徴し委員長が適当と認めた者

(大学院紀要掲載論文等の形式等)

第8条 大学院紀要掲載論文等の形式,提出方法等に係る詳細は,別に定める「東京国際大学大学院紀 要掲載論文等執筆・提出要領 | (以下,「要領 | という)による。

- 2 大学院紀要掲載論文等の形式等は、原則として APA (American Psychological Association) 方式 とするが、当該論文等の分野において確立した標準の書式・形式等がある場合には、それに従うことも可とする。
- 3 大学院紀要掲載論文等の原稿は、著者の責任において作成された完成原稿とし、形式が整って いない原稿若しくは完成原稿とみなし得ない原稿は、受理しない。
- 4 大学院紀要掲載論文等の掲載原稿の校正等は、著者の最終責任においてこれを行う。

(使用言語)

第9条 大学院紀要掲載論文等の執筆に使用する言語は、日本語又は英語とする。

(発行の形態)

- 第10条 大学院紀要の発行の形態は PDF 等の電子媒体とし、本学ホームページ等において公表する。
 - 2 刊行された大学院紀要は、「国立情報学研究所(NII: National Institute of Informatics)が運営する学術論文や図書・雑誌等の学術情報データベース」CiNii での公開、国立国会図書館のNDL-OPACへの収載、海外における同様な方法での公表等により、適切に周知するものとする。

(発行者)

第11条 大学院紀要の発行者は、東京国際大学学長とする。

(発行時期等)

第12条 大学院紀要の刊行は、各編とも原則として毎年度1回とし、編集会議において発行予定期日、 原稿締切日等を設定する。

(転 載)

第13条 大学院紀要に掲載された大学院紀要掲載論文等を執筆者が他所に転載する場合には、委員長の 了解を得るとともに、初出が大学院紀要であることを明示しなければならない。

(改 廃)

第14条 この規程の改廃は、常務会の議を経て理事長が行う。

附 則:

- 1. この規程は、2016年9月30日より施行する。
- 2. この規程の施行に伴い、以下に記載する「東京国際大学大学院研究科紀要刊行に関する規程」は廃止する。
 - (1)「商学研究-東京国際大学大学院商学研究科」刊行に関する規程
 - (2)「国際関係学研究―東京国際大学大学院国際関係学研究科 | 刊行に関する規程
 - (3) 「応用社会学研究―東京国際大学大学院社会学研究科 | 刊行に関する規程
 - (4)「経済研究―東京国際大学大学院経済学研究科」刊行に関する規程
 - (5) 「臨床心理学研究―東京国際大学大学院臨床心理学研究科」刊行に関する規程

編集後記

修了生,博士課程研究生,臨床心理センターのインテーカーと受付担当者及び研究科教員により今年度も無事に発行することができた。修了生たちにとっては初めての学術論文の投稿経験となり,教員にとっては1年間の活動を振り返る良い機会となった。

皆様に心から感謝したい。

小田切紀子

臨床心理学研究 東京国際大学臨床心理学研究科 第16号

2018 (平成30) 年 3 月 31 日発行 【非 売 品】

編集者 東京国際大学大学院 臨床心理学研究科紀要編集委員

発 行 者 高 橋 宏

 発 行 者
 東
 京
 国
 際
 大
 学

 〒169-0051
 東京都新宿区西早稲田 2 - 6 - 1

 TEL (0 3) 3005 - 772

 FAX (0 3) 3205 - 7074

印刷者 株式会社東京プレス 〒161-0033 東京都新宿区下落合3-12-18

THE STUDY OF CLINICAL PSYCHOLOGY

Graduate School of Clinical Psychology TOKYO INTERNATIONAL UNIVERSITY

No.16

Articles				
Exploratory Study of "Autonomy of Sandplay"	Yukari Ikeda			
On Study on an Acceptance Process of Sexual Orientation in Japanese Gay Men	Chibun Tsuno			
Effect of Providing and Receiving Social Support				
on QOL of Elementary School Students	Haruna Saito			
Can MBT be Regarded as Psychoanalytic Practice?	Keigo Azuma			
Report				
A Report on Activities of the Clinical Psychology Center of Tokyo International University 2016				
	Noriko Odagiri			